遊戯王～デュエルキングを目指す少女の物語

魔法使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王～デュエルキングを目指す少女の物語

【Ｎコード】

Ｎ４４９４Ｘ

【作者名】

魔法使い

【あらすじ】

女はデュエルキングになれないことを知った少女は男装して学園に乗り込む。主人公はさまざまな危険を乗り越えてデュエル部に入る。日常？青春？ホモ？レズ？なんでもありのほのぼの系小説です。

プロロロロロロロローグ（前書き）

適当に思いついたネタ
頑張るよん

プロロロロロロロローグ

そして季節は長い冬を終えて４月の１０日。僕はこれから始まろうとする学園生活の為の準備をしていた。

「よいしょっと…」

入学のしたくを終えると僕は独り言のようにつぶやきながら玄関に並べてある靴に手を掛けた。ちょっと寂しいけど今日で僕のふるさとともお別れだ。僕はある思いを胸にして家を走るように飛び出した。

僕の将来の夢は武藤遊戯、遊城十代、不動遊星のような誰もが尊敬できるようなデュエルキングになることだ。

デュエルキングの道は果てしない。それでも長い道のりを超えることができた人がなれるのがこのデュエルキングだ。周りに無謀だと言われてもいい。それでも僕は大切な人に約束をしたんだ。それに僕は一度も約束を破ったことはない。絶対にデュエルキングになってやる！

「さよなら…」

家の前に立ってお辞儀をした。これでここの家とはお別れだ。家族も皆ここには暮らしていないしこの家はそのうちなくなってしまうだろう。そして家から数歩歩いた時に何かに気が付いた。

「あ！！下着忘れてる！！」

僕は急いで家に帰ると一目散にタンスから女性用のブラを取り出す。それを男性用のデュエルアカデミアの制服の自分の胸にあわせてみた。何かが変だ。

「そういえば私…。男の子なんだ…。もうこんなの必要ないのかな…」

私の名前は奈々川ナナ。女の子なのだ。それなのに男装をしているのはなぜかって？これを話すのは深い理由がある。でも私が女だっていうことが絶対にこれから始まる学園生活でばれてはいけない。

「確か1ヶ月前に買ったこのブラウスってお気に入りなんだよねぇ！まだ時間あるからちょっとだけ着てみようっと。最後だからいいよね！」

じっくりと大きな鏡を見て着替えた姿を全身がはっきりと写るようしながらポーズを決めた。

「うーーーん。それにしてもまた胸が大きくなった気がする…」

自分の胸を触りながらその膨らみを鏡で見ながら考える。女を象徴するこの胸をどう隠すかが問題だ。膨らんでいることが少しでも見られると一瞬で女だということがばれる。

「まだ時間あるよなぁ…。まだお気に入りの洋服いっぱいから順番に着ようっと」

女はデュエルキングになれたという前例がない。かつてデュエルで栄光になった人物全ては男だった。女でもデュエルは強い人はいるが大人になるに連れてデュエルに離れていく。そもそも世間は女だからという理由で忘れられる。だから私は女を捨てて男になったんだ。これなら夢をかなえられることができる。この方法ならデュエルキングになれるかもしれない。

◆◆◆

「うわあああああああああああああ」

やばいから私は走る。今日は大切な日だっていうのに遅刻する。今日が最後の女性でいられる日だと思ってのんびり着替えしまくってたからだ。やばいぞこれ。

「セーフ！セーフだよね！」
試験会場に付くと先生が立っていた。私は焦りながらも自分が大丈夫だということを証明させるように努力する。

「ギリギリセーフだよ。あと3分遅れてたら危なかったな」
「やったーーー。私、開始早々遅刻するっていう目立つ子にはならなくてよかったーー」
「それは良かった。良かった」

先生も嬉しそうな顔で私を歓迎の言葉で励ましてくれた。私は目をキラキラさせながら会話をさらに進めていく。調子に乗って興奮した私は早速言われてはいけない過ちを侵してしまう。

「よかったぁ…。私、ゆっくり着替えしててちょっと油断してたのよね」
「君、受験番号と名前言ってなかったね」
「私、学生番号２０２番。奈々川ユウタ」

先生はポカっと穴が開いたような顔をしている。学生番号を私は言っただけなのに先生は驚いたような表情でこちらを見ている。何事だと私は思った。

「あれ、名前…？君、女の子じゃないのか？」

衝撃だった。いきなりばれてしまったのか？私という言葉を連呼するだけで男になろうと努力しているのにばれるなんて。

「ち、違う。僕、ネクタイの結び方にちょっとだけ苦戦してて練習していただけなんだ。こうやって…こうやるのができないんだよな

ぁ…」

急いで同世代の高校生が言いそうな台詞を私は作った。こんなところでこれから始まる私の学園生活が終わるなんて考えられない。私は男なんだ。

「…。わざわざ確認を取るまでもなくこの写真で登録してある通りだから男だよな。なんか君、私って言ったから一瞬女の子かと思ったよ。それにしても君、女の子みたいで可愛いな」

「勘違いしないでくださいよ。僕が女に見えるなんて先生は変体じゃないんですか！」

「すまん。最近他の先生にお前はショタコンだろって言われてるから勘違いされないように気をつけないとな」

やばい…。危なかったけどギリギリセーフだった。それにしても一人称を間違えるだけでも女の子っぽく見られてしまうのか？今は周りにいるのは先生で良かったものの学校ではちょっとしたことが命取りになりそうだ。

「おっと。そろそろ時間のようだな。会場に入らないと間に合わないぞ」

「先生が僕に無駄話するからでしょ！」

「すまんすまん」

あのショタコン先生が教えてもらった通りに会場に進んでいくと５００人を超える生徒達が座っている。自分の席に座って少し立つと試験の先生が来て筆記の説明が始まった。これから始まるのはクラス分けのための筆記試験だ。もちろん私はデュエルキングになる

ためだからこんな簡単な問題に負けるわけにはいかない。それに何のために今まで勉強していたんだ。

第1話　『モテモテの学園生活』

私が女の子だっていうことがバレたらデュエルキングになるという夢がかなえられなくなってしまう。絶対にバレるわけにはいかない。学校でもなるべく無口で目立たないようにしよう。

「「それでは次に新年生代表による挨拶です！1年A組。奈々川ユウタ君！！」」

どうやら私の成績は1年生の中でトップらしく新入生代表に選ばれてしまったらしい。そこで私は代表の挨拶をすることになったのだが私が歩くと今まで静かだった体育館が急にざわめきの声になってしまう。

「これって試験が一位の人が挨拶をするんでしょ？」
「あの子美少年じゃない？これがうわさのイケメン？」

周りの学生達による私語が私の耳に聞こえる。目立たないと宣言したはずなのにこんな結果になってしまってすごい恥ずかしい。私はこんなことが起きるなんて予想外だった。

◆◆◆

入学式が終えて自分の席に座る。なんか周りがざわついていてどうも私のほうを向いているようだ。なぜか私のことで周りは会話をしているみたいだった。特にたくさんの女性の視線が目立つ。

「すごいねーーー。あんな綺麗な顔をした男の子なんか見たことない」

「ちょっと加奈子。声かけてきなさいよ」

「やだよー。恥ずかしいったらーー。そっちこそ声を掛けなさいよー」

「無理よ！絶対に無理だって！」

「くそっ！！顔がいいからって女の子にモテモテかよ！ふざけやがって！！」

「神様は不幸だよなぁ。なんで同じ男なのにこんなに天と地の差が激しいんだ」

男の格好をしているだけなのにこんなに女の子にもてるなんて…。でもあまり嬉しくないんだが。

これからどうしたらいいんだろう。私はなぜかクラス中の注目になっちゃったし…。やっぱりこれから男の友達も作らないといけないのかな？どうしよう私…。男の子すごい苦手なのに。

「なあ。奈々川ってどんなデッキを使うのか？」

「……。え？」

急に男の人に話しかけられた。ちょっとびっくりしたので戸惑っ

ている。

「だからどんなデッキを使うのかなって？何か奈々川ってこの辺で見ない人だからさ」

私が普通に女の格好をしているときでも男の子にあまりしゃべりかけて貰うという機会がないからちょっとだけ緊張する。

「なるほどね。奈々川は電車で２時間も掛かるところから来ているのか。何でわざわざこの高校に来たんだ？」

「そう…。デュエルが強い高校だって聞いたからここにやってきたんだ」

それでも男の人達は私に大してやさしく接してくれた。

「やっぱ筆記試験強い奴はデュエルも強いのかよ…」

「僕はデュエルだけは自信があるんだ。誰にも負けない自信がある。将来の夢はデュエルキングになることなんだ」

「何かすごい奴と友達になれそうだな。俺の名は宮城ケン。何かある都道県と間違えられそうだから宮崎でもケンでも苗字か名前のどちらかを呼んでくれると嬉しい」

良かった。私、なんだか男の人と仲良くできてる。良かった良かった。こんなところで仲良くできるなんて。どうやら皆言い人そうで安心できそうだな。

「ちょっと僕、トイレに行きたいから行ってくるね！」

「じゃあ俺も一緒に行くぜ！」

「えぇ……！？」

何で…トイレに行くだけなのについてくるの？もしかして男の人って一緒にするものなの？女の子同士でも行くっていうこと自体あまりないっていうのに。

「奈々川がトイレに行くってさ！」
「本当に！！」
「俺も付いてくるぜ！！」
「何でそんなについてくるの…」

ただおしっこをするっていうだけのに私の跡を廊下で男達が４人ほどついてくる。何かすごい緊張する。私はゆっくり歩きながらトイレに向かおうと左に曲がった。

「おい……。奈々川…。そこは女子トイレだぞ…」
「お前……。まさか……」

そうだ…。私はもう男なんだった。忘れてたよ。だとしたら男子トイレを使えっていうのか！！嫌な予感がする。まさかばれる…？

「ごめん。ちょっと前見てなかった」
「嘘つくなよ。お前、一直線で女子トイレに入ろうとしてたぞ」

注意されて私は生まれて初めて男子トイレというものに入った。入ってすぐに見たくないものが見えた。男子が立って便器にくっつくような距離でシューっという音と共に何かを出している。これが男の人の……。

「どうしたんだ？奈々川！！」

やばい…。私が変だっていうことがわかる。私がばれないように

するという選択肢はただ一つ。ここに逃げるしかないのだ。

「おい！見ろよ！あの奈々川が個室に入ったぞ」

「どうやら天才でもお腹が痛くなるみたいだな」

「ハハハハハ。ウンコは家でして来いよ！！馬鹿じゃねぇの！！」

どうして…。私はトイレにいっただけだのに……。男なんて嫌いだ。

◆◆◆

「神崎ミカだ！！」

「あの人って何なんですか？」

「か、神崎ってあの現役プロリーグの…」

「確か先月、プロのリーグ戦で2位だったらしいな」

「ってか…。テレビで見るより可愛いな」

私がトイレから出ると今度はすごい人が廊下を歩いている。容姿は完璧でかなり美人っていう分類に入る完璧人間だ。この子はデュエルは強くても僕が目指しているデュエルキングにはなれない。理由は女性の力では無理だからだ。それでも私はこの子は尊敬する。だって私が目指すべきライバルだもの。

「サインもらえるかな？俺の妹が君のファンみたいでほしがっているみたいなんだ」

男の集団のうちの一人が前に出てきて神崎さんの前に現れる。

「あっ。ずるいぞ！！あいつ。抜けやがったな！」

「はぁ…」

神崎さんがため息をはく。どうやら呆れ顔で断りを入れて説明をしたようだ。

「これで家族をダシにして私に持ちかけてくる人はこれでちょうど５０人目…。ごめんね」

「ギクっ…」

「校長先生にこれからずっと学園にいるんだからサインはしないようにって言われているの。それにね。いいものを見つけちゃったから…」

「いいものって……」

断られた男子はショックで少し石像のように止まった。どうやらどうでもいい一般人には神崎さんの目には入らないみたいだ。

「そういえばここにいるのって奈々川ユウタくんだよね」

「そ、そうだけど」

「顔と頭がいいだけで神崎のほうから離しかけてもらえるのかよ！！ちくしょーー」

私はなぜか断られた男の子とは違って話しかけてきた。

「君、この学校って進学校の癖にトップの成績ってすごいねーーー」
「……」
褒められたけど私は言葉はでなかった。
「まあ、私が特特生じゃなかったら君は2位だったんでしょうけどねーー！うふふふ……。ついに見つけた！私と釣り合いそうな男の子」

「私、あなたとお付き合いしてあげる」
「いや、結構だ」

「！？」
「即断した！しかも今の回答一秒も掛かってなかったぞ！」
どうしよう…。私、初めて告白されたよ。しかも女の人にって……。私は女なのに。
「これは一体どういうことなの？」
神崎さんはすごく戸惑っている。私の判断はしょうがないのにすごい落ち込んでいるみたいだ。

「あ、『結構だ』。だと肯定の意味になるからわかりずらかったか？だったら『お断りするよ』」

私がとどめを指すと神崎さんはさらに静まり返った。

「なんと…。あの神崎ミカを悪徳セールス扱いにしやがった！」

でもあまりにもかわいそうだったので

「でも、友達でいいなら喜んで！」

と言ってあげると、

「あなた…。私が…誰だかわかっているの？今まで私が…何百人の人の告白を断ったと思ってるの？…」

そんなことを言われても…。しょうがないものはしょうがないのに。

「その私がようやく好みの男の子を見つけたのに…。自分から声を掛けたのに…。自分から声を掛けるなんて人生で初めてのことなんだからね！こんな屈辱初めてよ」

何かすごいかわいそうになってきた。私がもし、好きな男の人ができて断られたらこんな悔しい思いになっちゃうのかな。

「でも、覚えておきなさい！私、あきらめないから！覚えておきなさいよ」

神崎さんはそのまま私に振られてどっかに行ってしまった。ちょ

っと緊張したけどこれでよかったのかな？でも可哀想だったからあとで謝った方がいいのかな？

「すごいな！！お前！！なかなかやるじゃないか！」

「あの神崎ミカを振るなんてそう簡単にできるもんじゃないぜ！！」

「ちょ…。ちょっと…」

私の周りに男の人がいっぱい囲む。なぜかは知らないが１０人くらいで胴上げされた。そして私のことは一日にして神崎ミカを振ったということで学校中の有名になってしまったようだ。

◆◆◆

そして体育の時間。私は男子の中に混じってバスケをするので、女の私は男の力には勝てないと思ったのだがそんなことはなかった。私は中学生のころバスケ部だったのでむしろ得意の分類だ。いつも以上に体が軽いようでスムーズに仲間とパスの連携が取れた。そして私は大きくジャンプすると華麗にダンクが決まった…。

「きゃーーーー。ユウタ様ーーーーーーーーーーーーーー」

「きゃあああああああああああああ」

「ユウタ様ーーーーーーーーー。かっこいい～～～」

「ありえねぇよ…。女子の奴、入学したばっかの奈々川をもう『ユ

ウタ様』だぜ」
「だ、ダンクなんて初めてみたよ…」
たくさんの男子の嫉妬と女子の『きゃーー』という声が聞こえる。
「はぁ…」
私はため息を吐いた。私はこんなキャラじゃないのに。どうやら私はこのキャラを残りの3年間続けるとなるとかなり辛いプレッシャーになるだろう。私の性格からしてもっとドジっ子というキャラに本当はなりたかった。
「お前はいいよなぁ…。ちらほら女子にされて。俺なんか一度もこんなにモテたことないぜ」
「僕はこんなキャラを演じるなんてコリゴリだよ。本当は普通の高校生になりたかったんだけどなぁ」
本当は普通の女子高生になりたかったんだけど。可愛い制服を着て女の子同士でこうやって『きゃーきゃー』言う生活。でも諦めるしかない。私はデュエルキングになるんだ。こんなことでくじけるわけにはいかないんだ。

体育のあとは酷い目にあった。
他のクラス含む20人の女子が私の裸を見たいと言って追いかけてきたのだ。一部の人はカメラを持っていてかなりの重症だと思った。

私に親切に助けてくれる男子はこの女の症状を腐った女と書いて腐女子というらしい。初めてこの言葉をしった。
必死で私は女子の集団を逃げ切った。途中で靴を履き替えるべくために下駄箱を開くと大量の何かが雪崩のごとく出てきたのだ。
どうやらそれは私宛のラブレターだった。しかもそれは数え切れないような量。漫画やアニメで見たようなことが本当に現実で起こっているのだからびっくりしたけど。
靴を履き替えるともしものことがあると行けないので着替えを持ちながら体育館の裏側に面倒だけど態々着替えに行った。

「やっぱいちいちここでに着替えないと行けないのか…。男子と一緒に着替えたら女ってことがばれそうで怖いよ…」

辺りをキョロキョロして周りをいないことを確かめると私は短パンを脱いだ。あの女子達のことだからどっかで隠れてそうで怖いけどこんな目立たないところに誰も来るわけない。

女だとバレないように胸を縮ませるコルセットがさっき運動したせいで汗で匂って変な感じだ。ベトベトしてるから脱ぎたいけど大変だからやめよう。
それにもしもの為にパンツもトランクスに変えるべきだけどスースーするから履けないんだよなぁ…。

「えっ！？」

突然誰かがここを歩いているような音がした。私の着替えが見られてはいけないと急いで隠れようとするがすでに遅かった。

「あ、あなた…。どうして女性物の下着を履いてるの？」

「神崎……さん。何でここに……」

これで終わりだ。こんなにも早くばれてしまうなんて……。

第2話　『僕は変態だ』

「何で神崎さん…。ここにいるの？」
「私はあなたと同じように授業中、目立つのが嫌いだからたまたまここに隠れようとしただけよ。そっちこそ何してるのよ？」

体育館の裏。誰もいないと思っていたはずなのに早くも女性用の下着をしている私は神崎ミカにバレてしまったのだ。
誰にも絶対にこのことはバレてはいけないと用心していたはずなのにこんなにもあっさり見つかってしまうなんて…。

「あなたどうして女性物の下着を？」

呆れたのかびっくりしてるのか分からない表情で神崎さんはこちらを見ている。私のことが好きで告白していたのにショックだったんだろうな。

「…まさか…だと思うけど…。あなたって実は…」

これで終わりだ。諦めよう。私は目をつぶって後の台詞を聞き流してた。

「あなた…ってもしかして変体なの？」
「…はぁ？」

ばれてないのか？でもマシだ。マシなんだ。問題ない。

ここで女ってバレるってことよりはるかに…。大丈夫だ！私、受け入れるんだ。上等じゃないか。

「ああ。僕は変体だ！！」

「……そう…。ユウタは女装が趣味だったんだ…」

すごい冷たそうな残念そうな表情をしている。

告白を振った相手が女装を趣味としているってことになってるけど女ってばれるよりはマシだ。このまま続けるぞ！

「僕は女装をするのが好きなんだ」

「あんた変態の癖に私を振ったんだ…」

よし。このまま攻めとおせばこの状況を打破できるぞ！！私が変なキャラになってもいい。

「…。すまない…」

そう思って安心したそのときだった。

「あなた！私の奴隷決定ね！！」

「は、はぁああ！？」

「決定ぃーー。決定ね！あなたはもう、私の言いなりなの」

「……」

「よろしくね！」

最悪だ。余計にひどいことになってる気がする。

「だってあなた。女装が趣味って私がばらしたら学校中に広まっちゃうのよ。あなただってばれるわけにはいかないでしょ」
「そうだけど…」
「だったらこれから私の言うことを聞きなさいね。女装の趣味を直すために、これからあなたは私の魅力を教えてあげるんだから！」
「……。別に女の魅力を教えなくてもいい…」
「何でよ！！男の癖に女の子が好きじゃないっていうの！！じゃあ、ばらすわよ！！」
「そ、それだけはやめてくれ！」
「ならこれから私のことをミカって呼ぶのよ。私もあなたのことをユウタって呼ぶから」

広めるか広めないかは神崎さんに権限がある。最悪だけど彼女の言いなりになって諦めるしかない。
でも、この学校で羨まれている有名な人と付き合えるなんてちょっとだけ嬉しいかもしれない。でもこれ以上好きになるってことはないと思う。
あのミカの趣味も悪いっちゃ悪いんだけど。

「それにしてもユウタっておっぱいがちょっと膨らんでるんだね」

いきなり私のところに体重を掛けて不意をつくように私の胸を揉んできた。
振り払おうとしたがいきなりだったのでガードできずに変な声を出してしまった。

「きゃ…！」
「何、女みたいな声出してるのよ。これってやっぱ何か入れてるの？」
「ち、違うよ！君こそ変態じゃないか」

「あらあら。私に指図して言いと思っているのかい？私のスレイプちゃん」
「くっ…！」

これ以上彼女に何かをやっても無駄だと思った私は、いまさらだが下着を隠す急いでさっさと男性用の制服に着替えた。
私がネクタイを慣れた手つきで絞めながら彼女に訴えるためにミカにこう言った。

「なあ、そろそろ学校が終わるころだけど戻らなくていいのか？」

もう、6時間目の授業が終わって辺りは夕日が近い状況になっている。そろそろホームルームも終わって放課後の時間になるはずだ。
これを理由に彼女に離れて貰おうとしたのだが彼女は私に離れようとしない。

「へぇーーー。そんな適当な理由をつけて私と離れたいの？　私、ユウタの心読めるもん。ここから早く逃げたいんでしょ」
「君ってもしかして…」

心が読める…。まさかだとは思うが私が女だっていうこともばれてしまっているのか…。
そんなはずはないのに…。私は冷や汗でワイシャツがびっしょりになりそうなくらいに焦っているのがミカにはわかっているようだ。

「なーーーんていうのは嘘だよ。本当かと思った？」
「脅かすなよ…。びっくりしたじゃないか！」
「だってユウタが可愛いからちょっとからくりたかっただけだもん」

やっぱ嘘か。それでも私はちょっとびっくりしたな…。

「ねぇ…。放課後。やることがないなら、今ここで私とデュエルしない？」
「…ぇ…。デュエル？」
「やりたくないならやらなくてもいいわよ。あなたの学年1位の実力をちょっとだけ見たかっただけだから」

私はデュエルしたいに決まっている。だって目の前にいるのはプロデュエリストの神崎ミカ。
デュエルキングを目指している私には通過点のために戦いたい。それに私の今の実力も知りたいもの。

「あぁ…。いいさ。受けて立つよ。僕は絶対に負けないからな！！」
「いいねーー。その威勢。こっちもやる気出てくるわ」

こんなところで絶対に負けるわけにはいかない。そう決意した私は着替え用のバッグと共に入れてあった場所からデュエルディスクを取り出す。
私は腕に装着して構えた。デュエルディスク…。これは未来の便利なデュエルをスムーズに処理してくれる端末機器だ。
これにカードをプレイすることで本物のが実態化するように見える楽しい機能なんだ。これがなしにデュエルするなんてことは考えられない。

「じゃあせっかくだから賭けをしましょうよ」
「えぇ…！！」

対戦する準備ができて落ち着いているミカはいきなり衝撃的な発言をした。賭けって一体どんなことをするのよ…。

「簡単なことよ。ここには誰も来ない…。だからここで私達が起こしたことを内緒にするための駆け引きよ。…どう？面白いでしょ？」
「…。どういうことなの…？」

疑問に思ったがすぐにユウナは話を進めていった…。

「忘れちゃったのかしら？…。あなたは見られたくないものを私に見せてしまった。ユウタは女装が趣味だったっていうことが知られたくないでしょ！だったらあなたが勝ったらこのことを周りに内緒にしてあげる！」
「……。もう、忘れてくれよ！！」
「でも、今だって女物の下着着てるでしょ。私が忘れるわけないじゃない」
「くっ…」
「そしてもう1つのルール。あなたが私に負けたら」

「あなたは私と付き合うって約束してちょうだい！まだあきらめてないんだから」

「だから無理だ」

私は即断った。
彼女はまだ私のことを諦めてないようであるけど、私は何を言われようが無駄だ。

「何でよ！だったらあなたの秘密をバラすわよ！！」
「…。何度も言う通りにやめてくれよ…」

私は女なんだ。それなのに同じ女と付き合うなんて…。絶対に無理だ…。ありえない。
それなのに負けたら付き合うって…。私は百合に目覚めてしまうだろ。まだ私には乙女心っていうのがあるのに。

「……。そんなに負けるのが怖いの？」
「ち、…。違う！！それに僕だけ不利な条件をつけるなんておかしい！こんなの無茶だよ」

神崎さんが私の弱みを探ろうとしているけど何か意味が違う。

「なら、もしユウタが負けたとしてもあなたの秘密は絶対にばらさない。だから約束してくれる？」
「…。わかった…。僕は負けない！」

お互いに了解して準備を済ます。お互いにデュエルディスクを向き合って構えた。
ここで私がデュエルに勝ってしまえば彼女は私のことを諦めて貰えるだろうとこのときは思っていた。

第3話　『XセイバーVSライトロード』

『決闘！！』

ユウタ　ＬＰ４０００
ミカ　ＬＰ４０００

「先行はユウタからでいいわ。後攻はハンデだからこれで勝てば気持ちいでしょ」
「随分と余裕なんだな」

舐められてるけど勝てる確立をわざわざ上げてくれたんだ。
先行は有利だ。初手でカードを１枚多くスタートできるから好きなんだよね。私。

「僕のターン！ドロー。僕は手札からモンスターをセット！カードを２枚伏せてターンを終了するよ」

私がセットしたモンスターは『ＸＸ－セイバー　ダークソウル』。このカードが墓地に送られた時、デッキからＸセイバーを持ってこれる。
まずは罠と一緒に伏せてミカの様子を見るのがこのプレイングは正しいだろうと判断した。

「ふーーん。私に恐れをなしてガン伏せしただけなのね。マイスレイプ。じゃあ次は私のターン。今引いた『強欲で謙虚な壺』を発動

する」
「僕のことをスレイプって呼ぶのやめてくれよ」
ミカは手札をじっくりと睨みながら私に挑発してカードをプレイする。
今発動した『強欲で謙虚な壺』は大変貴重と言われながらプロリーグでも必須と呼ばれる高価なカードだ。
めくれたカードは『ソーラーエクスチェンジ』と『ライトロード・シーフ　ライニャン』『サイクロン』……。
「私はこの中から『ソーラーエクスチェンジ』を手札に加える。そして『ライトロード・モンク　エイリン』を召喚！」
ソリッドビジョンに現れたのは純粋な正義の色をした白い制服を来た猿のような顔をした少女のモンスター。
「まずは手調べにそのモンスターを潰してあげる。バトルよ！『エイリン』でセットモンスターに攻撃！！このカードの効果で戦闘を行ったモンスターはダメージ計算を行わずにデッキに戻る」
「くっ……」
作戦失敗だ。セットしてあった『ダークソウル』がデッキに戻されてしまったことで効果が発動できなくなってしまった。
それにもっと痛いことは墓地に送られなかったことなのでこのカードを蘇生で利用できないことが何よりも私は辛かった。
「カードを1枚伏せてターンを終了させるわ。エンドフェイズ時に『エイリン』の効果でデッキからカードを3枚墓地に送る」
「僕もエンドフェイズ時にカードを発動させるよ。『トゥルース・リインフォース』！効果でデッキより『X－セイバー　パシウル』

を特殊召喚するよ」

『トゥルース・リインフォース』は発動したターン攻撃できないが相手ターンなので関係ない。

むしろデメリットを帳消ししたってことさ。『パシウル』は戦闘破壊されない効果を持ってるから時間稼ぎができるんだけど…。

「『パシウル』を守備で出したようだけど、『エイリン』の目の前には無力よ」

「違うな。僕はただ、壁として呼び出したわけではない。このカードはレベル2のチューナーってことに意味がある。僕のターン！！」

私が狙うのはただひとつさ。

ユウタ
LP：4000
手札：3枚→4枚
場　：モンスター
　　『X－セイバー　パシウル』
　　魔法・罠
　　セット1枚

ミカ
LP：4000
手札：4枚
場　：モンスター
　　『ライトロード・モンク　エイリン』

魔法・罠
セット1枚

「『XX－セイバー　ボガーナイト』を通常召喚！このカードの効果により『XX－セイバー　フラムナイト』を特殊召喚する」

私がカードをデュエルディスクに2枚を叩きつけると赤いマントを羽織った剣士に続けて金髪姿の小さな剣士が並んで姿を現す。

「次にレベル4の『ボガーナイト』にレベル2の『パシウル』をチューニング！！シンクロ召喚！疾風の剣でフィールドを駆け上がれ！『XX－セイバー　ヒュンレイ』！！」

2体のモンスターがレベルを表す星に変わり、その星が交差するように交わって強い光を発する。その強い光のあとに別のモンスターが出現する。

「『XX－セイバー　ヒュンレイ』の効果により伏せカードを3枚まで破壊できる！僕は君のその伏せカードを破壊するよ」

「…。なかなかやるわね」

『ヒュンレイ』が剣から波動を発生させると伏せカードは破壊される。効果で割ったカードは『聖なるバリア－ミラーフォース－』。

あの神崎さんの表情を見るからになかなかいいカードを破壊したと解釈できるな。

「そしてバトルフェイズに『ヒュンレイ』で『エイリン』に攻撃！！」

『ヒュンレイ』が２つの剣を華麗に使って『エイリン』を粉砕させる。伏せがないから、がら空きでいとも簡単に攻撃が通った。

ミカ　ＬＰ４０００→３３００

「そして『フラムナイト』でダイレクトアタック！！」

この攻撃も普通に通る。『トラゴエディア』ありそうな気がしたんだけど、この流れからしてなさそう。

ミカ　ＬＰ３３００→２０００

「僕はカードを１枚伏せてターン終了」

「ちょっとは楽しめそうね。私のターン！『ソーラーエクスチェンジ』を発動。手札から『ライトロード・ウォリアー　ガロス』を墓地に送って２枚をドロー。そしてデッキからカードを２枚落とすわ。…」

前のターンに使わずに温存していたカードを使うと『ライトロード・ビースト　ウォルフ』がデッキトップから落ちてしまう。

この綺麗な流れを狙ったようにこのターンで使いこなすとはプロのセンスといったところだろうか。

それに『ネクロガードナー』。１度だけ攻撃を無効にするカードもさっきの勢いで落ちたな。なんていう強運の持ち主なんだ…。

「ラッキー！！『ウォルフ』を特殊召喚！さらに『ライトロード・マジシャン　ライラ』を召喚！！」

ソリッドビジョンにはライトロードの集団を表す白い服装をした正義の力を持った獣に続けて純粋な祈りをあげようとする女性が出現しようとする。

『ライラ』には守備にすることによって伏せカードを破壊する効果を持っている。だったら…。

「『セイバーホール』発動！Xセイバーがいる時、その召喚を無効にする！！」

これで1対1交換は成立したけど。

でも、神崎さんのことだから相手にうまく罠を回避されたような感じに見えるんだよな。これでこのターンは終わるわけではないし。

「その子は囮だったんだけどね。うまく引っかかったみたいね。次は手札のカードを1枚捨てて『死者転生』を発動するよ」

「うまく僕の罠を回避したつもりか！」

『死者蘇生』に似た紋章のカードが発動される。手札のカードを捨てると、あるカードを回収させる。

このカードは伝説とも呼ばれたカード。過去に伝説のデュエリストの武藤遊戯が使ったとか使ってないとか世間では話題になっているけど真実はわからない。

「くっ…。このカード…。いつの間に…」

「じゃあ墓地の光と闇を除外してこのカードを特殊召喚する！『カオス・ソルジャー　―開闢の使者―』を特殊召喚よ！」

青と金の鎧を着けた光の戦士がこの緊迫したフィールドに現れる。
このカードの出現によって場の空気が一揆に重くなったように感じる。

「『ウォルフ』で『フラムナイト』にアタック！！」

まず、手始めに正義の野獣が私のモンスターにタックルを仕掛けようとする。
この攻撃も私に効果を使わせる囮なんだけど、使わないよりは使ったほうがマシだ。

「『フラムナイト』の効果！フィールドに存在するとき、１度だけ効果を無効！」
「でもまだ攻撃は終わるわけではない。『カオス・ソルジャー　―開闢の使者―』で『フラムナイト』に攻撃！！！開闢双破斬！！」

開闢の使者と名乗る戦士は剣を円を描くようにして回しながら金髪の戦士を切り裂いた。

ユウタ　ＬＰ４０００→２３００

「さらに戦闘破壊したことにより、『開闢』の１つ目の効果発動！もう１度続けて攻撃できる。『ヒュンレイ』に攻撃」

私のモンスターが次々と消滅させられていく。
守りには自信があったはずなのに全て消されてしまった。カオスソルジャー…。とてつもなく強い…。

ユウタ　ＬＰ２３００→１６００

「あらあら、そろそろ決着が付きそうね」
「まだ、僕のライフは０になったわけではないよ。僕はデュエルキングになるんだ。だからここで負けるわけにはいかない！だから、僕は君より強いってことを証明させてやるんだ！！」
「そのデュエルの姿勢は大事よ。よく覚えなさい」

私は負けたわけではない。プロとの戦いでこのピンチを味わえるなんてとても嬉しい。諦めるわけにはいかないんだ！

「これで私はこのままターンエンドする。ユウタ！かかってらっしゃい！」
「僕のターン！！いくよ！！」

私はデッキの上に手を掛ける。
あの打点３０００のモンスターのプレッシャーがハンパないな。簡単に除去できそうな感じがしないが。それに確か除外効果も持っていたな。
私の手札の１枚。本日２枚目の『Ｘ－セイバー　パシウル』。対ライトロードでは壁という本来の役割が使えずに時間稼ぎにもなりはしない。
でも、私の伏せカードとこのターンのドローの結果によってはまだワンチャンがあるから諦めない！！必ず勝てるから！！

ユウタ
ＬＰ：１６００
手札：１枚→２枚
場　：モンスター
　　なし
　　魔法・罠
　　伏せ１枚

ミカ
ＬＰ：２０００
手札：２枚
場　：モンスター
　　『カオス・ソルジャー　－開闢の使者－』
　　『ライトロード・ビースト　ウォルフ』
　　魔法・罠
　　なし

「よし！！きた！！まずは『Ｘ－セイバー　パシウル』を通常召喚！！さらに『ガドムズの緊急指令』発動！！」

私は前のターンに腐っていた１枚のカードを使うために準備していたのだ。

『緊急指令』は自分の場にＸセイバーがいれば墓地のＸセイバーを蘇生できるカード。大量展開が可能なカードだ。これならあのモンスターに勝てる布石ができる。

「また、めんどくさいカードがいっぱい出てきたわね…」

「『ＸＸ－セイバー　フラムナイト』『ＸＸ－セイバー　ヒュンレイ』を墓地から呼び出す。そして僕の場にＸセイバーが２体以上存在するから『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を特殊召喚！！」

新たに現れた自分の長身より大きな剣を持つ『フォルトロール』を中心にこれで私の場にはモンスターが全部で４体。

これから私の攻撃が始まるわけさ！！これで一気に攻めてやるんだから！

「そして『フォルトロール』には墓地のレベル４以下のＸセイバーを蘇生する効果を持っている。僕は『ボガーナイト』を特殊召喚するよ」

一応、効果は知っていると思うが親切にカードの説明をする。私はさらなる展開をしようと心見たのだが、

「そうはさせないわ！！手札の『エフェクト・ヴェーラー』を墓地に送って１ターンだけそのモンスターの効果を無効にする！！」

これで展開は止まってしまったな。もっとモンスターを並べる予定だったのだが。

でも、プラス思考で考えると僕も神崎さんと同じく『エフェクト・ヴェーラー』を使わせたと考えるべきか。むしろ向こうは損しているわけだし。

「レベル６の『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』にレベル３の『ＸＸ－セイバー　フラムナイト』をチューニングするよ。剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け！シンクロ召喚！現れろ『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』」

光の先に現れたシンクロモンスターはXセイバーの総司令官と言ったモンスターだ。私の切り札でもあるカードである。
攻撃力はあの『ブルーアイズ』も超える３１００だからな。私の場を荒らしつくしてきたモンスターなんか簡単にケチらせられる。

「厄介なモンスターを……」
「さらにレベル６の『Xセイバー　ヒュンレイ』にレベル２の『Xーセイバー　パシウル』をチューニングして『ギガンテック・ファイター』を特殊召喚！このカードは墓地の戦士族１枚に付き攻撃力が１００ポイントアップする」

私はシンクロを経由して大きな巨人のモンスターを呼び出す。打点勝ちをするために呼んだのだが、こんなところでこの効果を使えるとはな。
戦士族のカードは神崎さんの墓地には『エイリン』『ネクガ』。私の墓地には『フラムナイト』『パシウル』『ヒュンレイ』が存在している。
よって５枚だから元々の攻撃力に５００プラスして３３００だ。

「バトルフェイズ！『ギガンティック・ファイター』で『カオス・ソルジャー　ー開闢の使者ー』に攻撃！！」

大きな巨体を生かして手のひらを広げるとそのまま伝説の戦士をいとも簡単に破壊するソリッドビジョンが映し出される。

ミカ　ＬＰ２０００→１７００

「さらに『ＸＸーセイバー　ガトムズ』で『ライトロード・ビース

ト　ウォルフ』を攻撃する！！」
「これは止めないと辛い展開になりそうね。私は墓地の『ネクロ・ガードナー』を取り除いてその攻撃を無効にするわ」
大きな剣で正装服を着た獣のモンスターに切りかかろうとしたが、突然現れた幻影の戦士に阻まれて盾で攻撃を受け流されてしまった。
伏せカードがないのに手札、墓地のカードを駆使して私の攻撃を防いだのはすさまじいな…。でも、さらに積みの状態にしてやろうか。

「メインフェイズ2に入る。『XX－セイバー　ガトムズ』の効果発動！フィールドのXセイバーをリリースすることで相手の手札をランダムに捨てることができる。僕は自身をリリースしてその唯一の手札を墓地に送らせてあげるよ」
「……。これでいいんでしょ」
何も弱い台詞を吐かずに手札を捨てる神崎さん。
捨てたカードは『ライトロード・エンジェル　ケルビム』。ライトロードをリリースすることによって相手のカードを2枚破壊できるカードだ。
『ウォルフ』を残していたってことは次のターンのコストとして返されていただろう。随分と危なかったな。
「僕はこれでターンエンド宣言するよ。これで僕の勝ちは決定したな」

「私のターン！！」

黙々とカードを手札に加える。今まで有利だったのに神崎さんは一気に不利になったんだ。状況は変わりない。

さらに戦士が墓地に送られたことによって攻撃力３４００になったモンスターが制圧するなんて普通のデッキでは返しが無理に近い状態なのにどうしてそんなに冷静なんだろう。

ユウタ
ＬＰ：１６００
手札：０枚
場　：モンスター
『ギガンティック・ファイター』　攻撃力３４００
魔法・罠
なし

ミカ
ＬＰ：１７００
手札：０枚→１枚
場　：モンスター
『ライトロード・ビースト　ウォルフ』
魔法・罠
なし

「どうやらここで終わりのようね」

「君は何を言っているんだい？手札１枚でこの状況を打破できる手段なんてありやしないよ」

手札のカードを見て急に表情が明るくなった神崎さん。

こんな状況で逆転されるなんてありえない。絶対にないと私は確信していたのだが、その幻想はすぐに壊されてしまった。

「ライトロードが墓地に４種類ある時、このカードは特殊召喚できる！！『裁きの竜』を特殊召喚！！このカードはライフを１０００払うことにより、このカード以外のフィールドのカードを全て破壊する。裁きの光！！」

「嘘でしょ……。こんなことって……」

ミカ　ＬＰ１７００→７００

神々しい髭を生やした竜がフィールドの中央で大きく雄たけびを上げるとフィールド上に稲妻が走った。

私の場の巨人のモンスターが吹き飛ばされていく。

ユウタ　ＬＰ１６００→０

自分の付けているデュエルディスクのライフポイントの表示は０を示した。

「う…うぅ……」

悔しさのあまり私の目には涙が浮かび上がりそうになった。

勝てると自信があったっていうのに…。くそ…。くそぉ……。何で……。負けてしまうんだ…。

「僕はデュエルキングになるっていうのに……。こんなところで……」

悔しい……。

「ユウタ！！何で、男の癖に泣いてるのよ！たかがデュエルで負けたくらいで…」

急に泣き出した私に心配したのか優しい心遣いで神崎さんは接してきたけど…。

泣いている私にはぜんぜんその表情に気が付かない。

「……。泣いてないよ……」

「おもいっきり泣いてるじゃないよ。ユウタ…」

「ち、違う…」

「いいからこれ渡すからさっさと泣き止みなさいよ。私が泣かしたみたいで誰かに見られたら恥ずかしいでしょ」

女の子らしいピンク色の『ハネクリボー』のキャラクターが描かれているハンカチを私に渡してくれた。

そうだ…。私は今は女の子じゃなくて男の子の格好をしているんだった…。こんなところでくじけるわけにはいかない。

『僕は男の子』なんだと自分に言い聞かせて、今は必死に涙を堪

えるべきだな。

「……。ありがとう…」

「遠慮はいらないわ。でもあなた、デュエルキングって大きな夢があるあなたは尊敬するけど、そう簡単になれるものじゃないのよ」

「…。わかってるよ。このくらい」

大切な人と約束したこの夢。簡単じゃないってことくらい自分でも分かっている。でも、諦めきれないんだ。

「私だってプロリーグで挫折しそうになったことある…。自分の強さが突然無力だって感じちゃったからね。それでも私は堪えて自分なりに頑張ったから今の私がいるの。私のファンに何度も励まされてようやくこの道にたどり着くことができたもの。私だってユウタを応援するわ！だから頑張ってよ」

神崎さんに言われてようやく私の甘えだった性格に目を覚ました気がする。

「本当にありがとう…。僕、勇気が出てきたよ。それに君のおかげでこの学校での目標もできたんだ。あと、次デュエルするときは絶対に負けないから」

「べ、別にあんたのために励ましてあげたわけじゃないんだからね！」

「…ミカ…」

この学校に来てから最初に久しくなれた嬉しさのあまり、私は初めて神崎さんの下の名前で呼んだ。

興奮したあまり無意識の内に自分の性別を忘れて神崎さんの胸に跳びついた。

「ユウタ…」

神崎さんの体から直接、体温を感じるよ。あったかいなぁ…。

「ちょっと待った〜〜〜！私との約束忘れてない！？」

「えっ！？」

神崎さんは抱きついている私を切り離すように手で押し返すして体同士のくっつきから離れさせた。

そういえば何かデュエル前に賭け事をした気がしたけど。

「ユウタは負けたんだから今日からあなたは私の彼氏でしょ。よろしくね！！」

「…う…うぅ…」

「さっきいきなり私に抱きついて来てエッチなこと考えてたんでしょ。何でそんな悲しそうな顔をするのよ」

「エッチなことなんて考えてないよ！誤解だ…」

「じゃあまずは始めに手を繋いで帰りましょうね。ユウタ」

手を繋いでこのまま学校の校門を出た。私達は有名人なもんだから周りの視線がみんなこっちを見ていて痛すぎる。

私は人生で初めて彼氏ではなくて彼女が出来た。なんかもう、いろいろと最悪だ。

第４話　『お尻の穴に注意』

私達は美人プロデュエリストの神崎と手を繋ぎながら歩いている。
神崎さんとのデュエルに負けていいなりになってしまった私。
顔を真っ赤にしながら私は懸命にこの場を乗り切ろうとしているが、歩いていると周りの視線がものすごく辛い。

「…。神崎さん…。僕、すごく恥ずかしいよ…」
「カップルなんだから手を繋ぐなんてあたりまえでしょ。それと、もう付き合っているんだから私のことを呼び捨てで呼びなさいよ」

強気なテンションで私と向き合っている神崎さんは異常だ。っていうより、私はまだ認めてないぞ。
私は見た目は男の格好をしていててもまだ女の恋心ってもんがあるんだから異性では好きにはなれないな。

「だからってこんな目立つところで手を繋ぐなんてやだよ…」

私は想いのままに告げる。それでも神崎さんは諦めるということは知らない。

「もうここまで来たんだから私達は友達以上の関係でしょ！」
「僕はまだ君のことは異性としてはまだ好きになってない友達としては好きだけど…。これ以上学校で厄介なことになるのが嫌なんだ。それに、僕のクラスの人に見られたら面倒だし」
「だったら、あなたは学校で目立ちすぎていろいろと厄介なことがあるなら、こうやって手を繋げば他の雌猫ストーカーにユウタを諦めさせることができるのよ」
「それでも大胆すぎるだろ！！これ」

手を繋ぐのは恥ずかしいけどよく考えれば、確かに神崎さんと付き合うのは利点なことはあるかもしれない。
私はこの学校に入学して1日目で目立ってしまったことにより、クラスの女子の王子様ポジションになってモテモテになってしまった。
体育の時間の着替えをしようと私の裸を確認しに来るほど変態な連中だったな。この状況が続くといつか私が女だっていうことがばれるかも。
でも、私が超有名人の神崎さんと付き合ってしまえば私のことを諦めさせるということができる。
しかも神崎さんは優しいし、面白いから友達としては好きなんだよね。なんていうか、私の学園生活充実してきたぞ！！

「お、お前ら……」
「宮城…。こ、これは誤解なんだよ。僕が神崎さんの言いなりになっているわけで…」
「じゃあ、何で手なんか繋いでいるんだよ！！」
やっぱり目立つからすぐにクラスの人に見つかっちゃったか。
驚いた顔つきで私の最初の友達になってくれた宮城は私のことを見つめている。
「このリア充め……。奈々川……。お前…。神崎のことを振ったのに何で付き合っているんだよ。女にまったく興味ないお前は俺と同じようにずっと童貞だと信じていたのに…。俺のことを裏切ったな

!!」

「……」

リア充？童貞？…。私に何か怒りながら話しているけど意味わかんないや。

でも、これで宮城が私のことを男だと信じてくれてるってことが発覚したな。でも、付き合っているってことが勘違いされるのはちょっと辛いけど。

「奈々川ユウタは私のマイスレイプなのーーー。ねぇーーー」

宮城をさらに挑発するかのように、神崎さんは私の顔にキスをするくらいの距離で綺麗な顔を近づけてきた。

このいやらしい感じって怖いな。我ながら女の恐怖を改めて感じる瞬間だった。

「ねぇ。マイスレイプ。こんな奴置いてさっと行きましょう」

私が可哀想だなと思っている間に、神崎さんは手を引っぱってこの場を立ち去ろうとした。その時…。宮城は…。

「お前ら……。レイプ……。レイプ…って…。まさか奈々川…。無理やり大事な所同士を見せ合うエッチなことやったのかよ！」

……。宮城…。マイスレイプの意味違いすぎるだろ…。

「…。そんないきなり変なことはしないわよ。それより、まずあなたはスレイプの意味を辞書で調べたほうがいいわ」

「奈々川が神崎のことをレイプしたんじゃなかったのかよ…」

「まじめな僕がするわけないでしょ！！」

変なことを言って場の空気をおかしくした宮城を見て神崎さんは呆れていた。スレイプとは奴隷って意味なんだけどね。

この空気を変えて話の流れを作るために私は…。

「そういえば、今日から寮生活が始まるんだったよな。宮城…」

「奈々川も寮生活するのか…」

「ユウタ…。寮生活するの…？マイスレイプとして私の家に泊まるんじゃなかったの？」

「泊まるわけないだろ！！それに、その話は今聞いたよ」

私の家はこのデュエルが強い学校に進学するために離れたのだ。だから寮生活も同時にスタートするってわけだな。

もう、私には家族はいないし、この学校にいる間の3年間も離れてしまうから取り壊して貰うことになったんだ。

だからこの鞄にはパンパンに私の私服などが入っているから準備はできているんだ。

それに、生まれて初めての寮生活ってどんなものか知りたいしね。

「俺、奈々川と同じ部屋になれるといいなーーー」

「同じ部屋って…？」

「あれ？2人で1つの部屋ってこと知らなかったのか？」

同じ部屋…？あれ？部屋は別々じゃなかったのか…。
やばい…。初めて聞いたよ…。部屋が共同ってことはいろいろと不便じゃないか！！私の着替えはどうすればいいのよ。

「はぁ…？私に喧嘩売ってるの？私のユウタはあげないわよ！！」
「俺が奈々川なんか狙うわけないだろ！！」

困るよ…。自分の部屋で安心して着替えができないってことになるとトイレで隠れてやるしかないじゃないのかな？
でも、何とかなりそうなのかな……。寝てる間とか誤魔化そうとすればいけるじゃないか！大丈夫だ！私、いける！

「奈々川。思い出したのだが人数の関係で2年生と同じ部屋になる可能性もあるんだ」
「それがどうしたの？」

宮城は今まで嫉妬していたはずの表情だったのに急に怖そうな表情に変わった。
何かあるのだろうかと私は疑問に思った。別に2年生の先輩と一緒でも私にはあまり変わらない気がするんだが。

「さっき聞いたうわさだけどな。2年生の堀内シリヤっていう先輩に気をつけろってさ」
「…。なんだそれ！？」

変な名前の先輩だなと思ったが、どんなうわさ話かと軽い気持ちで私は受け流した。

「その堀内シリヤさんはゲイらしいんだ」

「ゲイ？何それ？」
「夜中には気に入った男は腕力で物を言わせて掘りまくる変態に変わるらしい。これで今まで線の細い生徒がこの寮生活で何人も犠牲になっているらしいんだ」

宮城が恐ろしい顔で話していたが掘るって何のことなんだか…。犠牲になって話してるから危ない人なのか…。その堀内先輩って人は…。

「それがどうかしたのかい？」
「奈々川は女っぽい顔だし、リアルファイト弱そうに見えるから掘られないように気をつけろよ。一応忠告したぜ」
「すまないが掘るってどういう意味なの？」
「はぁ…。お前、こんなのも分からないのかよ。…。しょうがねぇなあ…。教えてやるよ」

宮城は私に対して威張っているけど、そっちもさっきスレイプっていう単語の意味が分からなかったんだけどね。

「掘るっていうことはな！男のケツに男のチンコをぶっ刺すってことだよ！！」

私は卑劣な言葉を言われてしばらく声がでなかった。そんな変なことをされるわけないだろうとこのときは自分に暗示していたのだ

けど。

「僕がそんな危険な人と一緒の部屋なんて確立的にありえないだろ…。変な話を話さないでくれよ」

「俺はこれでもまじめに言っているんだぜ。あとで寮の担当の先生に自分の部屋から教えてもらえよ」

「恐ろしい話を私のユウタに話さないでよ！！こんな最低な奴と私のユウタが一緒の部屋になるわけないでしょ」

少し同様してるけど、大丈夫だ。

堀内先輩と同じ部屋にはなるはずがない。夜中に襲われてしまったら私が女だっていうことがばれてしまうからな。

「面白い話だったから話しただけだよ。奈々川、お尻の穴を狙われないように気をつけろよ。じゃあな…！」

◆◆◆

私はあれから宮城と神崎さんと別れた。

宮城が言っていたお尻を狙われるという怖い話でちょっとだけ恐怖心が残っていたけど、ありえないと私は確信していた。

堀内先輩が私の部屋と同じなはずないと自信持って自分の寮に移動し、私の部屋の扉をゆっくりと開けた。

扉を開けると大きなスポーツ体系の男性が私を迎えていた。この人が私と1年間一緒の部屋ということになる。

「…。やぁ。君が奈々川ユウタ君かい？」
「そうですけど…」

怖かったので薄い声で返事を返す。だってこの人の第一印象としてすごい毛むくじゃらなんだ。
ワイシャツから見せているかのように見える胸毛が野獣のライオンっぽい。っていうかかなり怖い…。生理的に無理だ。

「私の名前は堀内シリヤっていうんだよ。ま、これからずっと同じ部屋だからよろしくな！」

嘘でしょ……。私は驚きを隠せなかった。悲鳴を上げたいと思ったが初対面の人にこんなことを言うのは不適切だ。
この男が宮城が言っていた危険人物の堀内先輩だなんて…。

「どうした？顔色悪いぞ」

詳しいことを聞いてもらったけどこの堀内先輩は男の人が好きらしいんだ。私は今、男の格好をしているから…。危険ってもんじゃない。

「まあ、入寮したてでわからないことがあると思うが、気軽に私に聞きたまえよ。たとえば私の好みとか…」
「いいえ…。一切興味ありません」

とりあえずは下手にフラグを立てる会話をしては駄目だ。
私はまったく先輩に興味を示さないように冷たい視線で送れば大丈夫なはず。そう甘く考えていた私は馬鹿だった。

「ちなみに私の好きなのは…」

「君みたいな可愛い男の子」

「ちっ…。会って早々いきなり告ってしまったぜ…」

先輩は額を赤く染めながら告白した。何かもういろいろと大変なことになってる。

こんな最低な奴と1年間一緒の部屋なんて死んでも無理だよ…。逃げられるはずもないじゃないか。

「君と私はこれから毎日毎日毎日毎日毎日一緒に暮らすのだから仲良くしようじゃないか。君のような可愛い男の子とこんな狭い部屋でお互いに匂いを嗅ぎながら1年も暮らせるなんて…。まるで夢のようだよ」

乙女のような台詞を吐きながら私のことを考えずにぽかっとしてる。私、いろいろと人生詰んでる…。

「おっといかんな。時間を忘れるところだったよ。奈々川君。そろそろ1年のお風呂の時間になる頃だ。君も入ってきたらどうだ？この続きはあとでしようよ」

お、お風呂って……。

◆◆◆

この寮には男性しか集まっていない。女性寮は男が入って来れないようにここから反対の数キロ離れている場所にあるらしいんだ。

だから、普段男として生活する私はここの男子風呂しか入る道しかないってことになる…。

それでも変な人と言われないように私は近くまでやってきた。でも…。男の人と一緒に入るなんて無理だよ……。

「おっ…！奈々川じゃないか！お前も風呂に入りに来たのか？」

私、本当に付いてないよ…。よりによってなんで宮城が来るんだよ。

しかも宮城が現れた勢いで私は止まっていた足が動いているし…。確実に風呂に向かっている…。

「聞いてなかったが、お前は誰と一緒の寮になった…？まさか堀内先輩ってわけないよな」

宮城が冗談で言っていたつもりだったんだけど、実際はその通りなんだよな…。

私は正直に話した。もちろん開始早々狙われているってことを伝えた。

「ハハハ。笑えるぜ。本当に堀内先輩と一緒になるんだってな。聞いた先輩達の話によると堀内先輩の被害にあった子は欝病に掛かって学校を辞めちゃったらしいぜ」
「……。僕、警察に訴えて来るよ…」

私にはデュエルキングになるという夢があるのにこんな恐怖で夢を壊されたくない。
それなのに何でこんなことで人生詰み掛かっているんだろう。やっぱり誰かに助けを呼ぶしかないのか。

「無駄だぜ。奈々川。男は女と違って訴えられるっていうのは滅多にないんだよ」

宮城が言ったこの台詞…。ここに来て異性の不便を感じてしまうなんて…。私が今、女の格好をしていたら確実に訴えられたのに…。

「でも、お前には神崎っていう彼女がいるんだよな。素直に付き合っている人がいるって言えば諦めさせてもらえるかもしれないぜ」

話の途中だが、遂に青い男性をあらわすマークの場所に付いてしまった。
宮城がお風呂場の扉を開けるとたくさんの人が見える。それもみんな裸で男らしいゴツイ体つきの人ばっかり。
私は体がフリーズしてしまった。こんな場所で私が裸を見せれば女だっていうことを隠し通すことなんて確実に無理だろ。

「どうしたんだよ。奈々川！早く閉めないと開けっ放しで寒いだろ」

宮城は平然として私の立場を考えずにゆっくりとベルト、ズボンと順に脱いでるとトランクスひとつになった。

「きゃあああああああーーーーーーーーーーーーー」

そして私は宮城が最後の1枚のパンツを脱いだあとに見えた男の人の大きな物を見た瞬間、悲鳴を上げて無意識の内に逃げていた。

風呂なんて絶対に入れないと確信した瞬間だった。

◆◆◆

「お帰り。早く帰ってきたけど、ちゃんと私のために体を温めてきたのかい？」

私はこのまま自分の寮に戻ってきた。

堀内先輩が私を待ち望んでいたかのように歓迎していたけど、いつ襲われるかと考えると油断はできない。

ここにも私の居場所というものはない。

それにお風呂に入らなかったから、忙しい学校生活1日の溜まった私の体が汗臭くて変な感じがする。

これからずっと私はお風呂に入れないのかと考えてしまうというマイナスなことしか考えられない。

「もう、今日は疲れたから僕は寝ることにするよ。おやすみ…」

もう、やけくそになった私は寝ることにした。

この問題はとりあえず明日考えようと思って自分のベッドに登っ

て目を閉じた。

これから私のこの学園生活はどうなるのだろうかとずっと私は考える…。

私がデュエルキングになるっていったから女を捨てて男になったのに、不便すぎてもう嫌だよ…。

でも、大切な人との約束を守るために諦めてはいけないから、弱音を吐いてはいけない。

お風呂の問題は、朝早く誰もいない時間に速やかに入ってすぐに終わらせれば大丈夫なはずさ。

あと、彼女になった神崎さんと、今私と一緒の部屋の堀内さんに不意を付かれて女だってことをバレないように常に気をつけないと。

こんな生活やっていけるのかな…？

「もう眠りに着いたかい？奈々川君！？」

「！？」

急に部屋を真っ暗にし始めて堀内先輩の声が聞こえた。周りが静かになったのを確認した先輩はありえない行動を起こした。

それは、私の寝ているベッドの階段を上ってきたのだ。いきなりのことだったのでとっさの判断ができなかった私。

先輩は動きが遅い私を熊が襲うかのように急に、私の口を押さえ付けた。

「んっ」

「はぁ…はぁ…。暴れても無駄だぞ。君との体格差を考えろよ。私は柔道で全国7位の実力がある。それに全国デュエル大会でも4位の成績を持っているんだよ」

大声を出そうとしても口を封じられた私は声を出すことすら許されない。抵抗できない私は涙が溢れることしかできなかった。

しかも私の上に馬乗り乗っかってさらに追い詰めようとした…。絶望と最悪なことがこれから起きることしか予想できない。

「心配するな。今日はお前に気持ちよくなってもらうだけだ。不本意だが君が暴れると暴力で黙らせるしかない」

ゴツイ体で思いっ切りグーの態勢で私を脅した。

私の外見は男でも本当は女だから勝てるはずもない相手を見て怖いという感情しかない…。

「まずは泣いている可愛い君のパンツを脱がして可愛いお尻を拝見させて貰おう…はぁはぁ」

先輩が私のパジャマに手を掛けようとした。

このままでは私が女だっていうことがばれる最悪な結末になってしまう……。

私は涙を大量に浮かべながらこの絶対絶命のピンチの中、自分の昔の過去を思い出す。

第5話　『男としての勇気』

私はホモとうわさされている大柄男の堀内先輩と同じ寮になっていきなり襲われてしまった。
馬乗りにされて身動きができない私…。私のお尻を見ようとズボンを下ろそうとしてくる。女とばれるわけにはいかない私は何としてても阻止をしなければならない。
口を押さえつけられていたけれども私は何とか振り払ってして小さい泣き声で言葉を発しようとした。

「……。僕は好きな人がいるんだぞ…。付き合っている人がいるのに先輩はどうして僕を襲うんだ…」
「はぁ…。はぁ…。付き合っててもも私は君のことが好きだよ。ハァハァ。今から奈々川君を気持ちよくさせてその女の子より私のほうがいいってことを証明してあげよう」
「うぅ…。やめてくれよ…」
「叫んでも無駄だよ。みんなもう寝る時間だからね。大きな音を立ててもも今まで助けに来てくれる人なんていなかったんだ」

いくら暴れようとしてもしっかりと先輩の大きい体を駆使して私をホールドして動けなくさせられている。

「ホラホラ。私のアソコは君のおかげでこんなにも興奮しているんだよ…。今から君のお尻に入れてあげるね……。ハァハァ」
「いやぁ……」

先輩のズボンの上からなのに股間部分が大きくなっているのがわかる。気持ち悪いよ……。
まだ好きな人すらできていないのにこんな所で変なのを入れられ

るなんて死んでも嫌だ……。
男の人に恐怖を抱いてしまった私は、これ以上動いても無駄だと思った私は自然に抵抗する気力もなくなり素直に受け入れる態勢になっていた。

「そうだ…。これでいい」

思うがままに先輩にズボンを下ろされてしまう。そして神崎さんにも見られたものと同じ女性物の下着があらわになった。

「何で君は女物の下着をしているんだい？」

恐ろしさに言葉が出るはずもない。

「言わないとぶん殴るぞ！！」
「言います！！言います……。だから殴らないで…」

怖いと思っても言わなければならない。本当の真実を言わなければ確実に変なことをされてしまう。

「僕は実は女なんだ……。だからもうやめてくれよ…」
「ほう…。君は女の子なんだね！！　私は女の子は本当は好きなんだけど、モテないから男の方が好きなんだよ」

終わった…。こんな形で人生を幕を閉じるなんて…。でもこれ以上なんかされるよりはマシな気がする。怖い思いだけはもうしたくない。

「女装が趣味なんて私の好みじゃないか！！ますます君のことを気に入ったよ…ハァハァ」

「え…っ！？」

変態だ。キモイ。キモイ……。

こいつ…。確実に私のことを男だと信じきっている……。私がこのまま襲われてしまうなんて目に見えている。どうすればいい…。

そうだったな…。私は今、男の子なんだ……。男の子だったらどうすればいいの？…。ユウタお兄ちゃんならこうするはずだ……！

「ぐわぁ…」

私の下着に見惚れながらボーっと油断していた先輩に私は股間に思いっきり足を上げて蹴り上げた。

いつもここに偶々当たると、お父さんとかお兄ちゃんが何で痛がるかわからなかったけどここが男の人の弱点っていうのがわかる。

そのまま先輩は2段ベッドの上から落ちた。叩きつけられる生々しい痛そうな音がなった。

「ぐ…っ…うぅう…。馬鹿な…！」

お腹を抑えながら必死に苦しそうに倒れこむ先輩。

痛そうに殺すと訴え掛けているかのように目で私を見つめている

けど、今までの私の苦しみと比べればどうってこともないはずだ。
…。私は今、男だ！…。女の子みたいに泣き叫んで助けを呼ぶわけにはいかない。自分で解決しなければならないんだ！！

「驚きましたか？　僕は中学生の頃バスケ部のエースでダンクをよく決めていたから脚力と瞬発力には自信があるんですよ」
「うぅ……」
「一応、先輩はルームメイトだから仲良くなりたいと最初は思ってました…。だからもうしないって約束してくれれば許してあげますよ」

これから1年間、先輩はここでずっと一緒になるんだ。
トラブルを起こさないように私に誓ってくれればここでまともな1年間を暮らせる。だから先輩には私に襲わないと誓ってもらいたい。

「…。君の一撃は気持ちよかったなぁ……。だから私はこの痛みが無くなったらあとで今度は君を襲うよ」

どうやら分かってもらえないみたいだな。

「せっかく忠告したのに…。そうじゃないなら先輩…。さっき言ってもわからないなら暴力でいいって言ってましたよね…。だったら相手をしてあげますよ！」

本当は力で勝てないっていうのがわかっているはずなのに…。怖いってわかっている。
なのにここで弱気を吐けば確実にまた襲われてしまう。だからここで私の攻撃をやめるわけにはいかない。再びあいつの股間を蹴ってやる。

「ちょ、ちょっと待ってくれ…。私との体格差を考えろ…。私は柔道で全国7位だぞ…。それに高校デュエル大会でも4位の成績を持っている…」
「そうやって僕に口で言っても無駄ですよ。わからないなら僕が黙らせてあげましょう」

私は思いっきりあいつの顔面を蹴ろうと構えたその時…

「わかった…。わかった…。落ち着いてくれ…。今は私は戦えないからデュエルで決着をつけようじゃないか！」

先輩は必死なのは顔でわかる。先輩は股間の激痛に走っているから今、リアルファイトで勝つことができるのは私だ。
だからデュエルで決着を付けるってわけだな。面白い……。私はデュエルキングになるからこんな最悪な野郎に負けるなんてありえない！！

「いいでしょう…。先輩を潰してあげますよ。これで勝ったら先輩はもう僕のことを襲わないって約束してくれますね！！」
「…。ハハハ。奈々川君は正直だな。私が全国4位のつわものだって、さっき親切に言ったのに忘れたのかい？　私のアソコは痛くても決して負けることはないのだよ」
「試してみないとわからないさ…。それに今の僕は負ける気がしない！！」

「決闘！！」

ユウタ　ＬＰ４０００
堀内　ＬＰ４０００

「先行は僕から貰うよ」
「いいだろう。先輩が後輩を譲るのは基本はそうだからな」
先輩が格好付けてそう言っていたけれども、今の私の手札は神手札と自慢できるほどに強い。これなら負ける気がしない。
「まずは『Ｘ－セイバー　エアベルン』を通常召喚！！」
召喚の掛け声と共に手始めに猫背気味のスタイルに爪型の武器のモンスターを出現させる。
このカードは戦闘ダメージを与えたら相手の手札をハンデスする効果を持っているけど、先行１ターン目だから関係ないか。
「さらに手札の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を墓地に送って『ワン・フォー・ワン』を発動。効果でレベル１のモンスターをデッキから特殊召喚できる。現れろ！『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』！」
私は爬虫類の顔をした獣戦士を呼び寄せる。
「ほう…。君のデッキはＸセイバーデッキか…。奈々川君は可愛い顔をしてそんなデッキを使うんだな」
「さらに『レイジグラ』の効果により、今捨てた墓地の『フォルト

ロール』を手札に戻す。そして『フォルトロール』を特殊召喚！！」
Ｘセイバーが2体以上いるので私は２４００打点のモンスターを呼び寄せる。このカードはＸセイバーの展開を支える強力効果を持っているんだ。
「そして僕はレベル６の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』にレベル３の『Ｘ－セイバー　エアベルン』をチューニング！！」
「先行１ターン目にシンクロ召喚…。本当にそのプレイングは正しいのだろうかね？」
先輩は私に動揺させようとする作戦みたいにいやらしく言ったようだけど無駄だ。この展開はさらに進む！！
「剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け！シンクロ召喚！現れろ『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』！！さらに2体目の『フォルトロール』を特殊召喚！！」
「なんだと…」
「『フォルトロール』の効果で墓地の『レイジグラ』を特殊召喚！さらに『レイジグラ』が特殊召喚に成功したことでもう1体の『フォルトロール』を墓地から手札に加えるよ。そして加えた『フォルトロール』も特殊召喚」
「モンスターが埋まった…。何をするつもりだ…」
手札の消費を４枚使ってフィールドを結構埋めた私。
例え『ブラックホール』を握られていただろうとしてもこれから見せるのは地獄だ。私を襲い掛かったことを後悔させてやる。
「『ガドムズ』の効果によりフィールドのＸセイバーを墓地に送ることで相手の手札のカードをランダムに捨てさせることができる！

！『レイジグラ』をリリースして効果発動！！」
「…。私の『ブラックホール』が…」
やっぱり握っていたか『ブラックホール』…。これで怖いものはなくなったわけだな。
「さらにハンデスをしてやる！！効果使用済みの『フォルトロール』をリリースして『ガドムズ』の効果！！そして使ってないほうの『フォルトロール』の効果を使用して『レイジグラ』を蘇生！効果で再びもう1枚の『フォルトロール』を回収！再び『フォルトロール』を特殊召喚！」
「…。無限ハンデスループ…。私の手札が全て……」
無限ループを駆使して私はこの流れを繰り返して先輩の手札を全て吹き飛ばしてやった。これで相手の戦意は喪失してしまっただろう。
手札が0枚になったってことはこの状況はたとえ天才でも逆転することなんて不可能だ。
「私はカードを1枚伏せてターンエンド」
先輩の手札は0枚とはいえ、もしものことがあるかも知れないので念には念をリバースカードを伏せて守りを固める。

ユウタ
LP：4000
手札：1枚
場　：モンスター

ＸＸ－セイバー　フォルトロール×２
ＸＸ－セイバー　ガトムズ
ＸＸ－セイバー　レイジグラ
魔法・罠
伏せ１枚

堀内
ＬＰ：４０００
手札：０枚→１枚
場　：モンスター
なし
魔法・罠
なし

「よくも私の手札を全てなくしてくれたな…。私のターン！ドロー！！」

後攻１ターンで理不尽なターンが来て先輩はかなり焦っているみたい。

「私は手札の『深海のディーヴァ』を召喚！さらにデッキより『深海のディーヴァ』を特殊召喚！！」

先輩はチューナーとチューナーを並べるという謎プレイングをしてくる。

このままではシンクロ召喚はできないというのにどうしてなのか？私が感じたことはこれではない別の召喚方法か。

「『深海のディーヴァ』でオーバーレイネットワークを構築！！エ

クシーズ召喚！」

２体の同盟モンスターが突然ブラックホールのようなものを作り出して何かが生まれようとする。現れるのは…。

「これで時間稼ぎだ！！現れろ『ガチガチガンテツ』！！」

先輩が呼ぼうとするモンスターは壁としての役割が強い強力モンスター…。だったら…。

「じゃあ僕はそれにカウンターして『神の宣告』を使うよ」

ユウタ　ＬＰ４０００→２０００

これを封じてやった。私は悪あがきもさせない。

「そんな…。これではもう何もできないではないか！」

「残念でしたね～。先輩！手札がなくてこのターンがこれ以上進められないなら勝手に僕のターンに移動しますよ！」

「…。こんなはずでは…」

私はこのまま残ったモンスターでがら空きな堀内先輩のフィールドに一斉攻撃した。

手札も０で自分から肥やしてもいない墓地も信用ならない守りであっという間にライフは０になった。

堀内　ＬＰ４０００→０

「嘘だ…。嘘だ…。嘘だあああああ。私は全国大会４位の実力なんだぞ。こんな簡単に負けるなんて…」
「たまたま僕の手札がよかったからですよ。逆に僕が後攻だったらこのデュエルはどうなったかはわかりません」

堂々と落ち込んでいる先輩に決め台詞を言った。
確かに私の感想通りに確実にわからない試合になっていたはず。先行無限ハンデスが成功しなかったら私は負けていたかもしれない。
勝負は決着が付いたんだ。結果が全てだ。私は勝ったんだ！！

「約束通りにこれ以上僕に何もしないって約束してくれるかい？わかったならもう寝るよ」
「……。私と一緒に体をくっつけながら寝るのかい…。ハァハァ」
「だから…。もうこんなことをしないって約束しただろ」

鼻息をしながら私に近づいてくる。かなりキモイ表情をしているから余計に腹が立つ。何回言っても堀内先輩はわかってくれないようだな。

「私はもうアソコの痛みは回復したのだよ。もう痛くないから触ってもいいよ。奈々川君！！」
「うわあああああああああああ」

先輩が変なものを近づけてきたから私はとっさの反射で無意識の内に再び急所を蹴って部屋から逃げ出した。
さっきより力をあげて蹴り上げたからさっきより痛そうだけど後ろを振り返らなかった。先輩が追っかけてくる気配もない。
男のものを見せてきたからトラウマになりそうだよ…。こんな気持ち悪い人と絶対に同じ部屋なんてもう無理だ…。ありえない。

これから一体どうすればいいんだろう…。私…。居場所がないよ…。もぉやだよ……。

◆◆◆

こんな辛い思いをしながらも私が男装している理由はちゃんとある。決して私は女が性的に好きな変態とか、男に近づくために化けているわけでもない。

今からかなり昔に私の父はあの伝説の社長の海馬瀬戸が主催したバトルシティに参加した。
父はかなり荒れてレアカードを強奪する集団の『グールズ』という組織に入り、いろいろと悪さをしていたらしい。
柄の悪い連中とともに裏でカードを弱い物から盗み、カードを複製したり裏ルートで売ったりするなどの行為をよくした。
そしてバトルシティに参加した父は、のちの初代デュエルキングになる武藤遊戯と戦った。
私の父は武藤遊戯を追い込むものに成功したものの最後の最後に逆転されてしまって負けてしまった。

このデュエルはグールズのボスが命令し自分の死を掛けて戦っていた為に、これで人生は終わると確信した。
しかし武藤遊戯は命乞いをした父を助けてくれた。助けて貰ったものの、父はそのまま精神的ショックを受けることになった。

優勝したのは決勝で戦ったグールズのボスに勝った武藤遊戯と世間に知らされていたらしいが、それでも父の精神は復活しない。
おまけにボスを失ったグールズも世の中に完全に消し去ってしまった。世間はこれが歴史とともに忘れ去られたしまったようだ。
何ヶ月か立ってまだ若かった父はまじめに工場関係の仕事で働きだしたもののカードに対する未練は諦め切れなかった。
若い時の黒歴史が心残りだったために、父はこのあとの人生は辛いままだったので死を望もうとしたんだけど、そこで私のお母さんになる人とであったんだ。
その人はかなりの美人で積極的に辛い自分の為に嫌といわずに優しくしてくれた。そして一緒に暮らすことになったんだ。
母も同じく通っていた学生時代に、世界を救って伝説を残した遊城十代と一緒に学んでいたらしい。
父も母もお互いにカードを趣味にしていたために気があっていた。だからこのまま結婚して子供を生んだんだ。

そこで私が生まれた。
双子だった。私とそっくりに一緒に出てきたのは男の子。ユウタとナナとお母さんは付けてくれた。

私達が大きくなるにつれて時代は大きく代わりだしてやがて、Dホイールと呼ばれた大きなバイクで行われるライディングデュエルというものが流行りだした。
そして私とお兄ちゃんが5歳になってデュエル・オブ・フォーチュンカップが開催されて家族4人で行くことになった。
最初は誰もが圧倒的な強さで見せ付けてくれた前回のキングのジャックアトラスが勝つと期待されていたが、不動遊星という人物が優勝した。
この人はマーカー付きで最初は嫌われていたのに優勝したとたんに熱い声援が送られた。
私とユウタも最初はジャックを応援していたのに前代未聞の優勝者があまりにもすごくて、こっちに私達も感動して流されてしまった。

「すげぇーーーー。不動遊星って人、顔に変なマーク付いているのに優勝しているよー」
「何度も何度も、お母さんは言ってるでしょ！人を馬鹿にするのはやめなさい！ユウタ！！」
「ちぇーー」

ユウタはお母さんに怒られて軽くゲンコツされた。今思うとこの時が一番楽しかったんだな…。
この時のお兄ちゃんは活発な男の子だったためによくお父さんとお母さんに怒られていたのが印象だった。

「ナナ、これからデュエルキングのふどうゆうせいと握手してくるっ」

興奮した幼かった私は興奮のあまりに勝手な行動を出て座っていた席から離れた。

「ずるいぞ！ナナ！！俺も不動遊星に握手してもらうんだよ！待てーーー」

「コラ！！ナナ！ユウタ！またお母さんを怒らせるとおやつを抜きにするわよ！！」

おやつを抜きにすると言われて足を止めた私とお兄ちゃん。

勝手に子供達だけで移動するからお母さんは怒っていたけれどもそれでもお父さんは違って優しく話しかけてくれた。

「ナナ、ユウタ。お母さんに怒られてもいいから行くんだ。お前達は夢があるんだからお父さんの昔のようになってはほしくない。子供の純粋な気持ちは大切だぞ」

「お父さんのほうが大好きーーーー」

「早くしないと握手してもらえなくなるかもしれないぞ。ってそれより握手なんかしてくれるかわからないけど…」

私はそのままお父さんの大きな足に飛びついた。厳しかったお母さんと違って私達を大切に思ってくれる。

それにくらべてお母さんはデュエルアカデミアの教師をしていたために、とにかくうっさくて私は嫌いだった。

「やーーーい。俺はナナを置いて先に行ってくるぜ。じゃあなーー」

「待ってよ…。お兄ちゃん！！ナナを置いていかないで…」

釣られた私もお兄ちゃんと一緒に席を飛び出した。だがすぐに私はお兄ちゃんを抜いた。

「くそ…っ」

後ろからお兄ちゃんの悔しがる声が聞こえたのはわかった。双子なのにこの時から私のほうが駆けっこは早かったから抜されることはなかった。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん。私と握手してよ！！」

いる場所は分からないのに、関係者以外立ち入り禁止って書かれた場所を無視して適当な場所を走っているとあの人は見つかった。ちょうど廊下で1人で歩いているところを私は見つけたんだ。この時は偶然偶々だったのですごいと思わなかったのだけど、あとで私とお兄ちゃんの夢を大きく変えることとなる。

「ああ…。握手くらい構わない…」

「やったーーーー」

動揺することもなく私の勝手なことを聞いてくれて嬉しかった。大人の大きな手の中に小さかった私の手が結び合って握手をしてくれた。

この人の手の腕前が優勝したんだと思うとすごくワクワクした。この感じは今でも忘れてはいない。

「あ、ずるいぞ！！ナナの奴！！俺より先に握手するなんて！！」

「……！！。そんなに君は焦ることないさ…」

いきなり後ろから現れたお兄ちゃんがちょっと私達が似すぎてビックリしていたように遊星はリアクションしていたけれど、それでもチャンピオンらしく接した。
そしてお兄ちゃんにも私がしたと同じように握手した。そして調子に乗ったお兄ちゃんは遊星にこう言った。

「俺、絶対お前を絶対倒してデュエルキングになる…！！」
「……俺を倒すか」
「私よりデュエルが弱いお兄ちゃんが勝てるわけないじゃん！！」
「うるせぇーーー。いつかナナも遊星も倒してデュエルキングになるんだよ！！」

お兄ちゃんの適当な言いがかりに、キングは一瞬呆れた顔をして返事をすると思ったが、私が思ったことと反対のことを言った。
この冷静な性格がすごいかっこよかった。今でも私は遊星をとても尊敬する。この冷静な諦めない性格が大会優勝に繋がったのだと思う。

「その君の大きな夢はすごいと思うな。俺も君と同じように大きな夢があるからここに来れたんだ。ここまで来れたのは諦めなかったからだ。君も頑張ってデュエルを強くなるんだ。そうしたら相手をしてやる」
「えーーーー。今、相手してくれるわけじゃないの？俺の最強超上級モンスターデッキでここで倒すはずだったのにぃーー」
「お兄ちゃん、そのデッキ使って一度も私に勝手ないでしょ！だから遊星に勝つなんて無理無理ーーー」
「だから、そのことをこいつの前で言うなよーーーー！ナナの馬鹿！！」

「君たちは兄弟そろって中がいいんだな。家族も兄弟もいない俺に取ってはうらやましい…。君たちは絶対になれそうだ。その楽しそうな目が俺をそう思わせる」

「へへへ。俺は絶対にデュエルキングになるぜ！！」
「お兄ちゃんがなれるわけないでしょ！！」

お兄ちゃんは遊星に言われて調子に乗った発言に私は馬鹿にしたように言った。
それでも元々私より強気な性格だけで、実際は才能がないお兄ちゃんがデュエルキングになれるはずもないと思っていたんだけどあんなことになるなんて。

第6話　『レズ☆ハッピー』

そして次の朝、私は昨日の堀内先輩の恐怖から寮を飛び出したまま帰ってこなかった。
私は学校の近くの公園で野宿をした為にあれからずっとお風呂に入らなかったから体中がベトベトして変な感じがする。
本当は朝早くに男風呂に入って済まそうと思ったけど、いきなり急に誰かが入ってきそうで怖かったから止めた。変な人ばっかだから男の人は嫌いだ…。
体中の疲れが取れないまま学校の時間帯になってしまったので私はそのまま学校にいくことにしたわけだけど、
それでも学校では休める暇もなく何人ものの女子生徒にモテモテな私は、ちょっとだけしようとしていた昼寝もできずに休憩もできやしないよ。

「はっくしょん！！」

やっぱり昨日は外で寝たから風邪引いたのかな…。
放課後になっても寮に帰る勇気がなくじっと心配そうに空を見上げていたら、ピンク色のロングヘアーの神崎さんが心配そうに僕のクラスにやってきた。

「どうしたの？マイスレイプ。具合悪そうだけど…」

私が今、信用できる人物は神崎さんしかいない気がする。それほどこの学校生活は希望がありそうにない…。
だから精神不安定な私は神崎さんに頼ることにしたら素直に聞き入ってくれた。

「昨日から僕はずっと寝ていないんだ……」
「は？　ユウタって昨日は寮だったんでしょ…」
「そうだけど…」
「不安があるなら私に言ってみなさいよ」

私のことも面白そうに優しく接してくれるこの人なら私の悩みごとも聞いてくれる感じがした。だから私は本当のことを話した。

「僕…。昨日、宮城が言っていた通りに堀内先輩に襲われたんだ…」
「えっ！！　本当に襲われたの？」
「……」
「それじゃあ掘られたわけじゃないでしょうね…。あんたのものは私のものだって前に言ったでしょ」
「僕はおもいっきり蹴って必死で逃げたさ…。だからもう寮にはいられないんだ…。だからもう私には住む場所はない…」

宮城に冗談で言われた通りに起こってしまったことが本当に起こるなんて怖かった。だから同じ異性の神崎さんと話すと安心する。
本当は私は男の格好をしているから自分の弱弱しい心を晒せないのが辛いんだ…。今の自分に居場所はないから…。

「それは良かった。ちょうど欲しいと思っていたのよね」

神崎さんは急にニコニコしながら私に近づいてきてあることを言う。

「だったら私の家に来なさいよ！！」

「い、一緒にって……！？」

私はいきなりのことだったんで言ってることが意味わかんなかった。女の子と一緒に暮らすって…。

「だから、居場所がないなら私と一緒に暮らしなさいよ！！　それに1人暮らしだといろいろと怖いのよ…」

顔を真っ赤に染めながら恥ずかしそうに私にもう1度言った。やっぱり神埼さんは本気だよ…。

「で、でも…」

迷っている私…。一緒に暮らすという選択肢の以上、神崎さんと暮らすってことは私が女の子だと隠しきれるもんではない。

まして同棲して暮らすってことはエッチなこともされる可能性もあるんだぞ……。こんな危険な状況を365日も隠し通せるのか…。

「いいからついてきなさいよ！」

「ちょっ…」

私に回答をする権利すら与えずに手を引っ張られて連れて行かれた。

◆◆◆◆

「すごい！　広いよーーーー！」
「どうよ。プロリーグで活躍していろいろとお金はあるのよね。1人暮らしは始めたのはいいものの、私1人で住むなんて勿体ないでしょ」

私が連れて行かれた場所は巨大なシャンデリアに大きなリビングに壮大な数の部屋があるまるで金持ちの大豪邸だった。
部屋中にはプロリーグで大量の何度も優勝したトロフィーと限定カードがガラス張りに置かれていて芸術と思えるほどおしゃれ。
私と神埼さんの2人でも十分広すぎるくらいだった。昨日の寮とは比べにもならないくらい充実している。

「そして！　ここはあんたの部屋よ！！」
「うお～～～～～」

大きな階段を上って案内されていくとここが私の部屋だと神埼さんに言われた。部屋をのぞいてみると衝撃すぎて驚いて声が出た。
この部屋には男らしい汚い匂いも一切ないし、寮のときとは違って端っこに大きなベッドを置いていてもスペースがいっぱいある。
大きな薄型の最新テレビに勉強しやすそうな机、ベッドには私好みの『マシュマロン』のぬいぐるみが置いてあって普通の女の子のお部屋だ。
それにこの家には私達の学校がここからすぐ見えるほど近い。こんな環境に私を住ませてくれるなんて…。神崎さんは優しいな…。

「どう？　スレイプちゃんのあんたには勿体部屋でしょ」
「ホントにここに住ませてくれるのか！！」
「いいわよ！」

何度も確認するほど私は興奮していた。神崎さんとの部屋も別だしこれなら着替えも大丈夫そうだ。だけど、１つだけ問題がある。

「１人でお風呂に入ってもいいのか？」
「はぁ…？　あんた誰と入るつもりなのよ…」

ちょっと変な質問したけどこれで大丈夫そうだな…。これなら変態なことをされずにすみそうだよ。

「さてと…。あんたは私の奴隷なんだからね！　この家に住みたければ私の命令に逆らえないのよ」
「え…？」

安心したと思ったその時、急にベッドに押し倒して神崎さんは私の顔に近づけた。
甘い果実の香水のいいにおいと共に女の子独特のやわらかさが体に直接当たってドキドキする。私と同じ異性なのに何なんだこの感じ…。
って…。駄目っ！私はまだ女の子なのよ！！

「まずは私にご奉仕して貰いましょうか。まずは服脱ぎなさいよ」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

このまま変なエッチな展開になると思った私は神崎さんを押し戻した。これ以上何かされると私の威勢が崩れそうになる。

「僕達は友達同士だろ。びっくりしたじゃないか！　変なことをやるために僕をここに連れてきたのか！」

これ以上されると昨日襲われた先輩とやってることと変わらない気がすると思った私は本当のことを言った。神崎さんは、

「勘違いしないでよね！！　一緒に住むってことはエッチなことはお断りよ！」

と顔を赤く染めてすぐに止めてくれたので悪気はなさそうだ。これなら夜中に襲われるってことはないから安心できそう。

「エッチなイベントはあんたが私のことを好きっていうまでおあずけなんだから！！　まだ私のことを好きって言ってないでしょ」

「別に…そんな気には…」

「何よーー！」

「それと出来ればそのエッチなイベントも遠慮してもらいたい…」

「あーーーー。もう！　女の子と一緒に住むのに異性としてみてないなんて」

「僕は君をそんな変態な目では見てないよ…。友達として見ているだけで…」

「ムカーーッ」

良かった……。信頼できる神崎さんと一緒に暮らせることができて私は今、最高に幸せだ。これなら安心して学校生活を続けられることができる。

「あ、そういえばあんたの為にメイド服買って来たのよねーーー。

ここに来た以上私の命令は絶対よ」

漫画とかでよく見かける黒のワンピースに白のエプロンの組み合わせに、白のフリルの付いたカチューシャの組み合わせのもの。

こんなのをにやけながら持ってくるなんてどんな趣味をしているんだ神崎さんは…。

「め、メイド服って僕のことを馬鹿にしてないか！」

「いいから着替えなさいよ！」

ここに来た以上はしょうがないか…。

でも、私一度こういうものを着てみたかったのよね。私は男の子の格好なんだからもう、こんな可愛いお洋服を着れないと思っていたし。

「わかったからここを出てくれないか。着替えをするから」

「お！　着替える気満々じゃないのよ。変態！」

「だから、僕は変態じゃな～い！！！！！」

神埼さんを追い払って私はメイド服に着替えた。

ちょっと小さいサイズだから私の胸が余計にちょっとだけ苦しかったけど…。

「どう…かな？」

「いやーーん。ホントに女の子みたいに可愛い！！」

何だかんだ言って着ちゃったな…。自分でも言うのはあれだけど

すごく似合っている気がする。

「絶対に似合うと思ったのよねーーー。さすが、だてに女装の癖があると思ったわ」

クスクス笑っている神崎さん…。やっぱ私のことを馬鹿にしている気がする…。

「じゃあ、この晴れ姿をフィルムに抑えとくわね」

「やめろ！！」

カメラを構えて私の恥ずかしい格好をお構いなしに写真を撮った。最初は持っていなかったのに私が着替えている間に持ってきたんだな…。

「これであんたは改めて私の奴隷ってことを確信させたのよ。この写真をばら撒かれたくなかったら大人しく言うことを聞くのね！」

「脅しのつもりか！！」

「って冗談よ…。あんたって本当にからかいがいがあるわね」

「むぅ〜〜」

冗談でも私には怖いよ…。でも、私のことをよく知っている神崎さんなら変なことをしないはずだと思っている。だからこうやってからかっているんだな。

「そろそろお風呂できそうだからしたくしなさい！！」

そういえば、さっきお風呂の準備をしてくれたんだっけ…。もうできたのか…？

「僕のことを絶対に覗くんじゃないよ！　いいか！絶対に…！！」

エロイベントは起きないと神埼さんは言っていたけれども念には念を一応忠告しておく。

「私を何だと思っているのよ！！　あんたみたいな変態じゃないわよ！！」

「いくぜ♪　クリアマインド♪　アクセルシンクロォオオオオオオオオオオオオ♪　招来せよ！『シューティング・スター・ドラゴン』！！」

1日ぶりのお風呂に興奮していた私は疲れた昨日の汗を取るように大好きな遊星のマネをしながらシャワーを流した。

だってテンションかなり上がるのよ！　神崎さんの家のお風呂はまるで露天風呂かと一瞬思うほど広かったし、何よりも外からの綺麗な景色が見える。

この地域全体を私のものにしたと感じるほど征服した感じ。こんな絶景で癒しの時間を取れるなんてまるで天国みたい。

「ふぅ…」

湯船にゆっくり浸かりながら今まで苦労した日常を忘れるくらいに気持ちいい。

湯に浮かんでいる自分の大きな胸が、ここなら男を隠していると

いうことを忘れて唯一女性の時間を味わえることになりそうだな。
私の戸籍的には男だ。素敵…。私の目標はデュエルキングになること…。私…。超カッコいい！！

◆◆◆◆

不動遊星に会ってから私とお兄ちゃんは人生が変わった。
それにお父さんもお兄ちゃんが「俺はデュエルキングになる！！」と言った途端にやる気が出てきて、再びデュエルがしたいといってプロデュエリストの道を進んだ。
私もお兄ちゃんに負けずとデュエルのことを勉強した。そのおかげで…。

「「第１２４回。小学生大会の優勝は奈々川ナナちゃんです！！」」

「お父さん！！　お父さん！！　ナナすごいでしょ！　また優勝したよ！！」

幼稚園のころと会わせてこれで１０回目だった。私ははしゃいでお父さんのほうに駆け寄ったんだけど、お父さんは全然嬉しそうな顔をしていない。

「何で、ユウタ！！　お前のほうは3位にもなってないで4位なんだよ！！　妹のほうが強いのは恥だぞ！！」

私ではなくお兄ちゃんのほうに向かっていって怖い歪んだ表情をしてお兄ちゃんを叱った。

お兄ちゃんだって4位という普通の人よりいい成績のはずなのにどうして怒るんだろう……。

「あなた…。ユウタだって頑張ったのよ…。怒ることないじゃない。あなただってプロリーグでよく失敗するじゃない」

「うるさい！！…」

仲良かったはずのお母さんなのにお父さんは気が狂ったように怒鳴った。

怒った表情だったから昔の優しかったお父さんの面影すら一切ない。あんなにも励まして優しくしてくれてたのにどうして…？

その理由はお父さんはプロリーグに入って世間に注目され始めたからだった。

注目されたのはよかったものの、一部の人からは反対の声が上がっていた。

マスコミは過去にお父さんはグールズという悪い組織で働いて悪気を働いていたことを新聞などでうわさを流されてしまったからだ。

それにそのことを思い出したお父さんと同世代の人が思い出して私達の家に「死ね」や「クズ」などの落書きをされた。

脅迫状の手紙や毎日鳴り止まない電話が私達家族に大きな傷跡を残したんだ。夜中中に暴走族が玄関を蹴っていくことがあった。

父がグールズに入っていたというそのことで私とお兄ちゃんは「父は盗み」と言われ学校でいじめを受けた。

そしてお父さんはたった1年でデュエルが出来なくなってプロリーグの道から降りた。

私達は追われることになり、ネオドミノシティではなく遠くの町へ引っ越したんだけど、私とお兄ちゃんは不動遊星に言われたことを忘れてはいない。
絶対にデュエルキングになるということを胸に頑張っている。辛いことがあったけどお父さんとお母さんがいたからへっちゃらだった。
でも…。一番悲しかったことはお父さんがもう、昔のお父さんではなくなってしまったことだった。

「ユウタ！　そんなクズカードを入れているんじゃねぇよ！　もっといいカードがあるだろ！」
「で、でもこのカードは初めてお母さんから貰ったものなのに……」
「それにだ。そのプレイングはなんだよ！！　勝つ気ないだろ！！」

今までデュエルが好きだったお父さん。生活の全てだったデュエルを失ってしまったあとは…。
自分の子供がデュエルキングの道へ進んで活躍すること…。ただそれが世間へ見返す手段として考えることとなっていた。

「あなた…。ちょっとユウタに厳しくないか…。ナナが特別にデュエルが強いだけで、ユウタもよくやってるほうよ」
「お前は黙れよ！！」

家庭の環境が変わったせいで今までの仲良し家族だったという関係が崩れていった。お母さんもお父さんのことで呆れていた。

「ねぇ！！　ナナは！！　ナナは何が悪いの！　どうすればもっと強くなれるの！！」

マイペースだった私はいつも通りのテンションで接したけれども

…。

「別にお前は好きなようにデュエルをすればいい」

「え？…」

お父さんは冷い返事をするだけ。私は悲しかった…。

お兄ちゃんにはいっぱいアドバイスはもらえるのに私だけは適当に済ませるだけで、愛情を貰えない。

それでも私は諦めずに何かを教えてもらおうと調子に乗ると…。

「今度のデュエル大会も絶対に優勝するから！！」

「…。そうか…」

私には全然期待されずにお兄ちゃんばっかり期待しているお父さん…。私のことは嫌いなんだと思いながらも必死で本を見たりして影で努力したんだ。

そして次のデュエル大会でも優勝した…。それなのに……。

「お父さん！　見てみて！　約束通り優勝したよ！　褒めて褒めてーー！！」

「よかったな…」

周りの2位だった人や3位だった人は家族で喜んでいたのに、私達親子だけは全然喜んでくれなかった。

やっぱりこんなにも落ち込んでいる原因はお兄ちゃんが準々決勝で敗退したから機嫌を悪くしていたからだった。

「どうしてお前は妹のように勝てないんだ！！」

ついに怒りを爆発させたお父さんはいっぱいにビンタしてお兄ち

ゃんを吹き飛ばした。
「妹に負けて悔しくないのかよ！　お前は俺の子じゃない！」
「……ガハっ」
デュエルディスクをムチのようにしてお兄ちゃんを叩いた。
お兄ちゃんは声を出さずにひたすら泣きながら黙って悔しそうな目でお父さんの虐待にひたすら耐える。
「お父さん…。やめてよ！　どうしてお兄ちゃんを叩くの！？　お兄ちゃんは悪くないよ！　ナナのせいなの？」
私のせいでお兄ちゃんが痛い目にあっていると思った私。止めてもらうために必死でお兄ちゃんを助けようとしたんだけど…。
「私がお兄ちゃんの分まで頑張るから…。だからもうお兄ちゃんを怒らないで…」
「ふざけんな！！」
「ホラ！　予行練習しようよ！　ナナはデュエルキングになったの！！　だから優勝商品の伝説のカードをお父さんにあげます！」
紙で神のカードと書いたカードをお父さんに渡した。けれどもお父さんは表情を変えずに…。
渡したカードをビリビリに破いてこう言った。
「お前には絶対にデュエルキングになれないんだよ！！」
「…。どうして…。不動遊星…は私になれるって言ってくれたのに…」
「お前がどんだけデュエルが強くても全て無駄なんだよ…」

「そんなことないよ…。ナナは頑張るから…」
「うるさい…！　女は…」

私がデュエルキングになれば再びお父さんはまたあの時の笑顔を取り戻してくれると思った。
けれども私は女の致命的な弱点を知ることになる…。

「女はデュエルキングになれないんだ！！」

「お前がいくらデュエルが強くても、どれだけデュエルが強くてもデュエルキングになれない…。女がデュエルキングになれるわけないんだよ！！」

女だからってデュエルキングになれないことを知った私は、いくら何を言われようと今まで強気だったのに精神に止めを刺された。
どんなに私が頑張ってもお父さんを助けることができない…。

「神様…！　どうしてだよ！！　どうしてデュエルの才能を兄のユウタじゃなくて妹のナナのほうに与えてしまったんだよ！！」
「ナナは生まれて来なければよかったんだ……。うわあああああああああああ」
「どうして…。妹の方に……！！」

私は大泣きした。涙が堪えるまで泣いた。私のせいでお父さんもお兄ちゃんも苦しむことになると心に刺さっているから、余計に胸が苦しかった。

◆◆◆◆

「うわあああああああああああ」

私は思い出したくもない悪夢を見て大きなベッドに敷いてある布団から飛び出して目を覚ました。

「どうしたの？　私のスレイプ。すごいうなされていたけど、何か酷い夢を見てたの？」

そういえば美人の神崎さんと同居していたんだったな…。これからずっーーとここで暮らすことになるんだっけか。

「ああ…。大丈夫だ…。問題ないよ」

心配そうにしていたので安心させるための台詞を吐いた。

「何か心配ごととか悩みごとがあるなら言いなさいよ！　私達はもう、一緒なんだから隠しごとはなしだからね！」

「ありがとう…。本当に嬉しいよ…」

あまりの嬉しさにちょうど神崎さんが私のベッドの上で座っていたのでそのまま倒して抱きついた。

何故か抱きつくって行為が昔から私は安心するのよね。

「ユウタ……」

…体と体がくっついて直接体温を感じる。

やっぱり女の子同士の母性本能から安心できる…。私、このままそっちの方向に言ってもいいかもしれない…。

「こらーーーっ！！　約束もう忘れてるよね！」

「あっ…」

女の子らしく好き勝手に抱きつくと怒られちゃうか…。私は今、男の子の格好をしているからね。

「ユウタ！　あんたの為に朝ごはん作って上げたんだからね！　本当は奴隷だから犬と同じ餌にするはずだったのに」

「そう言うけどミカは素直なんだな…。そういうのをツンデレって言うんだよ」

「もーーっ…！」

「よく見ると君はちょっと可愛いな」

「か、可愛いって…。そんなことよりマイスレイプ。早く顔を洗って着替えを澄ましなさい！　せっかく作ったご飯が冷めちゃうわよ」

神崎さんに言われて着ていた灰色のスウェットを脱いで学校の制服に着替えた。

私、奈々川ナナは、お兄ちゃんの名前を取って奈々川ユウタとしてここにいる。

これならデュエルキングになるという道のりが開けるから……。辛いことがあっても諦めなければ絶対に夢が叶うって不動遊星が言ってた…。

だからお兄ちゃんとお父さんの為に私は諦めるわけにはいかない

んだ！！

第7話　『デュエル部に入るよ！』

あれから私が入学して約1週間が経過した。
男装してて始めは不安が多かったけれどもみんな優しくて面白い人達ばっかりなので仲良くなれそうだ。
それに私のことを必要以上に追いかけてくる女子達も神崎ミカと付き合っていることを知られた途端に少なくなったと感じる。
少しずつ減ってきたので嬉しいような…。悲しいような…。それでもまだ一部の人には私のマニアのファンが残っているらしい…。
これからの学校生活の目標はデュエルキングを目指すという夢だ！
どんな困難が私に降りかかってくるのかわからないけど、ドンっと掛かってきなさい！

チャイムの音色が学校に響きあたり長ったらしくて退屈だった学校の授業も終わりを迎えて騒がしい放課後の時間に変わる。
授業中寝てた人も急に起きてテンションが上がるほどこの時間帯はみんなが活発になる。
こんな平凡な時間帯でも神崎さんの家に帰らずに、私と私の友達の宮城は机に座りながらある会話をしていた。

「奈々川…。お前、部活入らないのか？」
「うーーん…」

私は机に肘を立てながら窓に映っている野球部の走りこみの練習を見ながら軽く返事を返す。
確かに部活に入らないとこの高校生活はかなり損することになるだろう。

早く入らないといけないんだけど、私は何の部活に入るのか悩んでいるのだ。
１年生は早めに部活に入らないと先輩とのかかわりが不利なことになるから急がないと…。
そもそも私が男装していたせいで生活が安定してなかったおかげで遅れたわけなんだけどね。
周りの半分以上の学生の部活はもう決まっていて活動をはじめているだろう。わかっているんだけどなかなか決まらないや…。
「そろそろ部活に入らないとやばいぜ。運動部とかは大事な大会の準備の練習に取り掛かっているみたいだし…」
「みんな、はやいんだなぁ…」

大会といえば私の記憶で去年の女子バスの練習も大会で活躍するために忙しかった記憶が印象残っている。
それでも中学校の頃の大切な思い出だったんだけどなぁ…。部活は学校生活の大事な思い出を作るから探さないと…。

「そういえば奈々川は厨房のころはバスケをやってたみたいだけど入らないのか？　授業中でも点数取りまくりだったじゃん」
「僕はもういいよ…。高校では運動部に入りたい気分ではない」
「じゃあ文化系のに入るのか？　お前女っぽいから料理とか音楽とか好きに見えるけど？」
「僕は料理も音楽も音痴だから向いてないよ…」

中学同様にバスケ部に入ってもいいけど、私が男装しているにあたって運動部に入ることはかなり面倒だ。
別に私が部活で点数をいっぱい取れる選手として大活躍しても別に性別がバレるってことはないけれど。着替えがかなり面倒そうだ。
おそらくだけど着替えは男子と一緒ってことになるはずだからこ

うやって何度も隠し通せるわけではない。
あと、宮城に勧められた料理部。言いにくい話で女として恥ずかしいことなんだけど私、料理できないのよね…。
「そういえば宮城は部活決まったのか？」
私に対してえらそうにいろいろと勧めてくる宮城。けれども自分のことはいいのかと宮城に聞いて見る。
宮城も授業で結構うまい姿を見せているのでスポーツ部に入ってそう。男の人が好きなサッカーとか！

「決まってるわけないじゃん！」
キリっとした鋭い口調で宮城は言った。

「なんだよ…」
「やっぱさ……。ほら……。帰宅部安定じゃん」
「はぁ……帰宅部って何もやらないでこのまま放課後帰っちゃう部活だろ…。帰宅部が一番つまらないよ」
期待して損した…。宮城はもっと面白そうな部活に入るかと信じていたのになぁ…。
私は帰宅部には入らないよ。まず、部活を入らない選択肢がないから。

「お前さ、かなり悩んでいるらしいけどどうかしたのか？」
「だって…」
机でペンをモジモジと触りながら不安な表情を表して私は本当は入りたい部活があることを宮城に伝える。

「だって、なんでこの学校にはデュエル部がないんだよ！！」
「そんなことで悩んでいたのかよ…。期待して損したわー」
「別にそんなことじゃないだろ！　僕は今までずっと悩んでいたんだよ！」

私がずっと懸命に悩みを話したのに宮城は人事だと思って投げやりの返事で返す。
どうでもいいと思っているようだけど私は、焦っているほどこの部活に入りたくて本気だっていうのに！！　もぉ！！

「だったら他の部活に入ればいいのに……」
「代わりなんてないんだよ！　僕は今までずっとデュエル部に入ろうとしていたんだぞ！　この学校はデュエルが強い特進高校だって聞いたからここに来たのに…」

なかなか見つからずに懸命にこの部活を探しているけれども、本当に私は入りたい部活があるんだ。
そのデュエル部は部活動のパンフレットに載っていない。デュエルキングになる以上は私はこの部活に入って大暴れしたいのに…。
そのことでさっきからずっと私の思考が停止していたんだぞ。代わりの部活なんてあるわけないだろ。

「ないわけないだろ！奈々川。よく確認しろよ！そのパンフレットには載ってないだけで、活動はしているぞ」
「どういうことだよ…！　だったら何でパンフレットに載っていないんだよ！」

この学校のデュエル偏差値は他の比べて極端に高いから、私はこの学校に来たのに何でパンフレットの紹介のページに載っていないのに疑問に思う。

「奈々川…。デュエル部に入るつもりなのか？　ある生徒が言っていたがそのデュエル部っていうのは入らないほうがいい」
「どうしてだよ！！　僕はこの学校でデュエルキングになるためにデュエルを鍛えたいんだ！　それのに…」
「はぁ……。お前、この学校の事実も知らないで入学したのかよ…この部活かなり荒れているって話を聞いたぜ」
「荒れてる？…」
「お前も知ってるだろ！　うちの学校のデュエル部は全国大会のチーム戦で2位の成績だったって」
「じゃあなんで…」

大きな大会で何度も優勝していて目立っているから私は憧れてこの部活に入ろうと決めたのに…。宮城が言うには本当の黒い話があるらしい。
話の内容をずっと聞いていると、この話は宮城の友達との間で知ったことらしいんだ。堀内のガチホモ話やらで変なことばかり詳しすぎるだろよ…宮城…。

「今の2年生がめちゃくちゃ荒れているんだ。部活どころじゃなくて無法地帯になってるって話だぞ！」
「だったら僕がその部活を改善させるまでだよ！　元々はデュエル

が強いんだからきっと話をすればわかってくれるはずさ」
「無茶だよ…。俺らがわざわざ地獄に入れっていうのか？　死ににいくもんだぜ！」
「宮城？　ビビッているのかい？　僕達は男なんだから！　行くぞ！」
「おい！　だから俺は部活には入らないって言ってるだろ！　入りたいんだったら1人で言って来いよ」

私は宮城の危ないと話していた警告を無視してまでもこの部活に入る情熱は強い。
2年生が荒れているとは言ったもののデュエルが好きな人たちには悪い人はいないから私は疑いない。
何しろデュエル部はデュエルが好きな人たちが集まっているっていう条件なんだからこの答えは間違いないはず。
部活には全く興味を持たない宮城だから私は誘ってあげてもいい。反応は返ってこないけど無理やり入れてやる！

「いいから帰宅部なんていうつまらない考えは止めたほうがいいぞ！」
「ひ、人の勝手だろ！　俺はじっくりと勉強したいんだよ！」

そうやって私から逃げようとして今、考えたようなことを言ってるけど部活に入りたくないっていう目をしているから、私は、
「いいから一緒に行くよ！！　部活を覗くだけでもいいだろ！」
「部活には入りたくないんだよ！」

私は嫌がる宮城を強制のような形で連れて行き、危険とうわさされるデュエル部っていうのを覗いて見ることにした。
たかが部活だっていうのに何でそんなに宮城は、人生が終わった

ような顔をしているんだろう？　ちょっと大げさじゃないのか？

◆◆◆◆

部室だっていうのに長い階段を何回も上っていってようやく４階の場所に、デュエル部と書かれたその部室を発見した。
なぜかすごい不気味な感じがする…。このデュエル部だけは他の部室とは別に遠くの場所にあるのが嫌な感じがするけど…。

「奈々川…。やっぱ帰ろうよ…」

その部室の扉を私は開けようとすると急に誰かが私の肩は叩かれて、　そこには弱音を吐いている宮城の姿が。
宮城は大げさに、生まれたての小鹿のように足をガタガタに震えていて私に怖いということを訴えている。

「せっかくここまで来たんだよ！　さあ開けるよ」
「やめろ…。やめてくれ！」

私に扉を開けさせまいと宮城は腕を押さえようとしているけど、私はすばやく回避してドアノブの取っ手に手を掛けた。

「さあ…。これから宮城も部活に入るんだよ！　いくよ！！」

ゆっくりとドアノブを回してその扉の向こうで始まろうとしている私の部活動に期待しながら扉を開く。

宮城が怯えているけどそんなもん男の子になった私には怖いものはないんだよ！

「やあ…！　奈々川君久しぶりじゃないか！！　ハァハァ…」

「うわあああああああああああああああああ」

私は扉を開けた途端に鳥肌と恐怖を一気に感じた。

扉を開くと大柄でなぜか上半身裸で胸毛ボウボウの格好が目立つ、寮で私のお尻を襲おうとした堀内先輩の姿がそこにはあった。

部室には下半身が裸でうつ伏せになって死体のように倒れている男がいた。まるで死体のように動かないでお尻のところに白い液体のようなものが掛かっている。

変な匂いがする…。

「ハァハァ…。今まで愛しい君が戻らないからずっと私は我慢していたんだよ…。ハァハァ…」

堀内先輩を体中を震わせて飼い主を見るような犬のような表情で私を見ている。あの寮で起きたトラウマが思い出しそうだ…。

「だから言っただろ…。奈々川…。デュエル部には入らないほうがいいって」

「そんなの聞いてないよ！！　」

「堀内先輩に掘られちゃうんだよ！！　だからこのデュエル部は嫌だったんだ！　」

どうやら宮城が恐怖に感じている理由がわかった。

デュエル部に入ろうとする男子生徒はみんな堀内先輩の餌食になってしまうから誰も入らないみたいなんだ。

このデュエル部には何人か先輩がいるようで、マナーとして1年

生は先輩に怒られないように早めに来ないといけない。
けれども早く着すぎてしまうといつも1人だけ早くいる堀内先輩がいるために男子生徒はお尻を狙って襲われてしまう。
それで新しく入ってきたそこで倒れている生徒はお尻を掘られた跡ってことなのか…。こんな風に私はなりたくない…。
私と宮城だけでは柔道も強い堀内先輩に勝てるわけもないじゃないか！！

「止めてくれ！！」
「うわあああああああ。来るな！！　来るな！！」

大声で叫びながら私と宮城は追ってくる堀内先輩から逃げようとする。
部室の中でテーブルの上にあるデュエルの雑誌などが足に掛かってしまって崩しながらも懸命に逃げる。
それでも大きな体の堀内先輩は遅かったので私は女子バスケ部で生かした瞬発力で素早く回避する。
それなのに…。

「何で僕ばっか狙うんだよ！！」
「知らねぇよ！　お前が女っぽいからじゃないのか？」

私を過去に襲った堀内先輩は私をずっと追いかけている。寮で襲った時のように死に掛けたくないから私は命掛けで逃げるのに、
宮城の方は諦めてもらったみたいで、来ないと安心したかのように足を止めて私の方をずっと宮城は見ている。

「ああ、…。なんて君は愛くるしいんだ…。君の泣け叫ぶ声が聞きたいよ…。ハァハァ…」

キモイ…。キモイよ…。
捕まったら終わりだ。今度こそ私が女だっていうことがばれてしまう…。今度は宮城もいるから確実に不味いよ…。
それなのに…。

「つーーかまえたーーー。ハァハァ…」
「いやーーーーーー」

壁際に追い込まれた私は腕の自由を空中で奪って逃げられないようにされた私…。
これから私はあの人のように掘られてしまう…。そう思うと私はもう駄目だ……。

「先輩は僕に一度デュエルで負けましたよね…。もう襲わないって約束したじゃないですか…」
「はぁはぁ…。それは私が油断して股間をおもいっきり叩かれたからじゃないか…。はぁはあ…。あの時は気持ちよかったなぁ…。君も今から同じことをしてあげよう」

寮では私が不意をついて勝利したからであって今は、堀内先輩は絶好調だから力で勝てるはずもない…。
宮城は呆然とした表情で、下半身を狙おうとして私のズボンのベルトを脱がそうとしている姿を見ている…。
あの時は女物のパンツを見られてもばれなかったが今度は宮城もいるんだ…。私は男物を履いてないから宮城にばれる…。

「ぐわぁ…」

「なぁ…。堀内…。またお前は男を襲おうとしているのかよ」
「こ、これは違うんです…」

私のズボンのベルトをはずして手を掛けたとき、急に誰かが堀内先輩の頭を蹴ると苦しみ出して倒れた。
後ろには宮城でもない。助けてくれたのは今時流行らない古いリーゼント風の髪型の不良のような乱れた制服を着ている男性。
どうやら別の先輩が部室に帰ってきたようだ。

「ったくよぉ。お前がいるから部活に女の子が入って来ないんだよ！！」
「グハっ」

倒れている堀内先輩を追い討ちを掛けるように何度も何度もリーゼントの男は顔面を殴る。

「俺様がリア充になってハーレムになるっていうのにお前がキモイから女の子が入って来ないじゃねぇかよ！」
「ごめんなさい…。ごめんなさい…」
「入ってきた女の子全員孕ますっていう夢を叶える夢が、お前のせいで叶わなくなったじゃねぇか！　どうしてくれるんだ！！　死ね

！！」

女の子、女の子と言いながらリーゼントの男は堀内先輩をさらに殴り、鼻から血が出ようとも止めることはない。

普通に女の子が引く台詞なんだけど…。今のは男になると決めた私でも気持ち悪いと思った。

「数少ないデュエル部の部員に手を出すのはいただけないな…。柔道が強いってだけで」

「私は柔道は全国で7位なんだぞ…。それなのに私をよくも…」

堀内先輩は柔道部で活躍していたと私に言っていたのに、不良の男が押している。

あの堀内先輩の体系が役に立たないほどあの先輩は喧嘩が強いなんて…。でも、ちょっとリアルファイト強くないか…？

「お前、舐めてんだろ！　カードと柔道どっちが強いんだよ？」

「は？」

「だから！　カードと柔道はどっちが強いかって聞いてんだよ！」

「柔道に…決まってるでしょうが…」

「やっぱりてめぇ！　この部活舐めてんだろ！！」

「痛っ！！　痛っ！！」

「ホラ！　やっぱカードの方がつええじゃねぇかよ…」

質問に答えた堀内先輩に怒りを感じたリーゼントは近くに落ちて

いたカードを堀内先輩の目玉にめがけて投げた。
目に入った堀内先輩は目を押さえながら苦しみもがいている。助けてもらったのはいいものの堀内先輩以上にこの人怖い気がするよ…。
それでも堀内先輩にやりすぎな気がする。さらにリーゼントはボコボコに何度も蹴って飽きるまで続けた。

「あーーー。面白かった…。さてと…。害虫を駆除してやったぜ」
「大丈夫ですか！　先輩！！」

私のことを襲ったとはいえ、あまりにもボコボコにされていたので可哀想だと思った私は堀内先輩のほうに近づいたのだが、堀内先輩は意識はなかった。
ぴくりとも動かないってことは気絶しているの？　これをじっと見ていた宮城は表情が固まって言葉もでない。

「お前らが新入部員なのか…？」
「酷いじゃないですか！　そこまでする必要はないじゃないですか！」
「そこの女っぽいお前がターゲットなんだろ。この俺様が助けてあげたんだから感謝しろよな」
「確かに助けてもらったことは嬉しいですけど…」

批判した台詞を言ってしまったけれども確かに助けてくれたことは嬉しい…。
これで私が女だったということがばれずに済んだんだ。これに懲りて堀内先輩がもう襲わなくなればいいんだけれど。
ここで堀内先輩がいなくなったことで一旦間をようやく取ること

ができたので自己紹介が始まった。

「俺様の名は中里カイだ。よろしくな。俺のことはカイザーって呼べよ」

「か、カイザーって…」

中里と名乗った先輩が言ったカイザーってかつて遊城十代と同じデュエルアカデミアにいた丸藤亮と同じあだ名じゃないか…。

こんなヤクザのような性格でだらしがないチャラ男みたいな先輩の呼び名がカイザーっておかしくないか。私は絶対に似合わないと思う…。

「（奈々川…。絶対に本名で呼ぶなよ…。あの先輩は今ので危険な人物ってことわかっただろ）」

「（で、でもカイザーって…。ぷっ）」

思わず噴出しそうになってしまいそうになってしまう私。でも絶対に本人の前では笑ってはいけないな。

でも、カイザーって呼ばないと本当に堀内先輩のようにサンドバッグにされそうだから気をつけないと…。

「そこの女みたいな奴！　エロ本買って来いよ」

「え、エロ本！？」

何かを考えているときに急に『エロ本』という単語を聞かれる私。思春期の男の人が女の子のあんなことやそんなことされるのを妄想するために見るイヤラシイ本を何で私が買わないといけないんだよ…。

「近くにコンビニあるだろ！　いいから買って来いよ！　それを今

日、おかずにするから」
「何でエロ本なんて買わないといけないんですか！」
「だから、後輩なんだから先輩の命令は絶対なんだよ！　いいから買って来い！！　つまらない内容だとぶっ殺すぞ！」
女の私がそういう本に詳しくないから男の宮城に頼めばいいのになぜか私に買って貰おうとする先輩。
でも、買わないと堀内先輩のようになりそうだからと宮城にコソコソと言われたので私は部室を出た。
ついでに一緒に宮城もここから逃げるようにここから出た。

◆◆◆◆

学校から歩いて5分の所の近くのコンビニに私と宮城は向かった。
コンビニの雑誌コーナーの前でカイザーが好きそうなジャンルのエロ本をデュエル部の噂話やカイザーの詳しい話を宮城としながら探した。
まだ18歳にもなっていない15歳の私と宮城がエロ本を手にして読むことはいけないはずなんだけど、命令だから仕方がない。
「本当は元々部活に入る気がなかったのになんでこんなことに巻き込まれなきゃいけないんだよ…。おかしいだろ」
「悪いな…。でも僕と一緒にこの部活に入るよ」

「はぁ…。帰宅部ていいと思っていたのに…。まあ、お前と一緒なら大丈夫なのかな…？」
「でも、悪い人じゃなさそうじゃない？　あの中里先輩は」
「馬鹿！　カイザーって言えって言われてたの忘れてるだろ」
「あ、そうだった…」
「お前、うっかりだから本当に気をつけろよ！　マジで殺されてもしらないぜ」
「あの人ってデュエル部の部長さんなの？」
「違うよ。あんな暴れん坊が部長なわけないだろうよ」

カイザーは本当は悪そうな人に見えないんだけどなぁ…。私達を助けてくれたんだから優しそうな人っぽいし…。
でも、これから私達はカイザーの新の恐怖を思い知ることになるとは知らなかった…。
私はどれがいいかエロ本の中身を開いて内容を確認しながらカイザーのことを知ってそうだったので宮城に一応いろいろと聞いて見る。

聞いて見たところ、中里先輩はカイザーと自ら名乗るから、あの容姿とは想像つかないほどデュエルの腕はプロ顔負けのレベルらしい。
それなのに気も悪いほど女の子に直接「受精してくれ」「やらせてくれ」とか言うから女子には嫌われ、デュエル部には女の子が入らなくなったって。
この問題のせいで堀内先輩とカイザーのせいで男も女も新入生の生徒が部活に入らなるほど、恐怖の部活と言われるように有名になったからパンフレットに載らなくなった。
でも、デュエルの腕はここの部活のエースらしいけど、凶暴な性格だから部長にはなれずに別の人になったからこのことをかなり気

にしているらしい。
だから去年の全国大会には出れなかった。他の学校の生徒を暴力で喧嘩の問題を起こした為に学校を退学の危機になりそうになったもののギリギリのところで停学で済んだ。
カイザーの代わりに出た堀内先輩が高校全国デュエル大会４位ってことは…。それを倒した私はカイザーより強いってことよね…。
この部活も本当は大したことじゃないんじゃないかと少しだけだけど思ってしまった私…。でも、運が良かっただけだから浮かれちゃ駄目！

「奈々川…。何でレズものばっか見ているんだよ！　やっぱ変態だなー」
「ち、違う！！」

神埼さんの影響で百合に目覚めつつある私は意識してないのに自然に見ていた。
それよりこんなところでゆっくりエッチな本を見ている場合じゃないな。こんなところを誰かに見られたら勘違いされちゃう。

「宮城だってずっとその本ばっか見てるじゃないか！　そっちも変態だろ！」

変態。変態と言ってきたから私も変態と言って宮城に返す。
そういうことを言った宮城こそ変な物を見ていると思った私は、宮城がさっきからずっと見ている雑誌を奪ってどんなものを見ているか確認した。

奪った雑誌を確認したのだがイヤラシイシーンが全くない…。ページをいくらめくってもそのシーンが一切ない。この雑誌はもしかして…。

「変態なお前と違って、俺はデュエルの雑誌を見てただけだよ」
「僕のことを裏切ったな！」
「別に裏切ってないだろ。元々はお前がエロ本を買ってきてと言われただけで俺は別に用はないんだよ」
「くそっ！」
「それに俺はこの雑誌に、今回は限定カードが付くみたいだから5冊くらい買う予定だからお金はない。お前は約束通りエロ本を買いな！」

宮城はカードが付くからといって同じ雑誌を何冊も買ってコンビニを出て行った。ずるすぎるだろと意識していても私にはやらなければならない。
私は泣く泣くエロ本を片手に顔を赤らめながらこの状況を早く脱出させたくて、急いでさっさっとレジのほうに持っていった。
たまたまレジの店員は女子大生2人でやっていたみたいで私を怪しい本を持ってきたとすぐにわかり、クスクスと笑われてしまった。
こんな本を買うということは縁がないと思っていたはずなのに……。私…。このまま死んでもいいかもしれない…。

第8話　『ぶっ殺す！！』

私はデュエルキングになるという夢をかなえるためにデュエル部に入ったのはいいものの何かがおかしい。
部員は少ないし、不良みたいな風潮のカイザーのために何でエロ本なんかを私は買ったんだ……。
それに部長も今はいないし、この部屋には私と宮城とカイザーと死んでいる堀内先輩だけっていうのも不思議だ。
先輩に本を買って来いと無理やり頼まれてた物を近くのコンビニで私は買い物を済ませるとすぐに部室に戻った。

「うん。お前達はなかなかいいエロ漫画持ってきてくれるじゃないか。お前らにはセンスがあるな」
「その内容は奈々川が選んだんですよ」

本を渡すと喜んだような顔で私のことを褒められたが、私は羞恥心のほうが強くて何とも嬉しくなかった。
そして余計なことをぺらぺらとしゃべる宮城。女の子の私に取ってはこの本を買うのは滅茶苦茶恥ずかしかったんだぞ！

「やるじゃねぇか。正直お前らを見直したぜ」
「……。それはどうも…」

私はカイザーと名乗るように言われた部員に頼まれた本を渡すと喜ばれて、すぐに封をビリビリに開いてページを見始める。
カイザーはポケットにあった箱のような物を取り出す。そしてその中から棒のような物を出して火をつけた。タバコだ…。
未成年の癖にタバコを吸いながら漫画を見ている姿が見ていてイライラする。

「カイザー先輩。何でここの部活には人があまり来ないんですか？」
上から目線なのがいちいちムカついてくる。だけどこの人は先輩だからしょうがないと妥協するしかない…。
私は今まで感じていた疑問をカイザーに敬語で質問をしてみる。
「ああ、ここの部活には元々は3人だけだったからな」
「え…？」
3人だけ…？　ここはデュエルに関しては一流の部活だっていうのに人数が少ないってのは妙じゃないか。
やっぱり宮城が言ってた通りに堀内先輩とカイザーのせいで男も女も怖がって新入生が入って来ないのが理由なんだろう。
「そこでお前らが入ってきたってことだろ。俺様はチンコばっか来ても嬉しくねえんだよ。おっぱいを連れて来いよ！」
「……」
下ネタを言われて黙り続ける私と宮城。
女が入って来てないとかカイザーは言っているが、男装しているからわからないようだけど実は私は女の子だけどね。
冗談で私は実は女だよって叫んでみたいけど、女子を狙って変なことを企むカイザーのことだから何をされるか……。
「そ、それはすいません…。じゃあ、僕達がここの部活に来たのにデュエル部は活動してないんですか？」
さっきからタバコを吸いながらまるで自分の家かのようにリラックスして、私が買って来た本を読んでいるカイザー。

ここはデュエル部だっていうのにカードを扱うということがない。デュエルしたりデッキを弄ったりするのがこの部活と思ってたのに。

「活動？　そんなもんやんねーよ。大会の時だけ頑張ればいいんだよ」

「えっ？」

あっさりと質問の答えが返ってきた。

活動している人が全くいないでぽっくりと開いたこの空間が、こんなのは私が望んでいた部活じゃないってことを思い知らされる。

宮城の言う通りにやっぱりこの部活は荒れていると聞かされた通りだったんだな…。

「そんな細かいことはいいんだよ！　そんなことよりお前らの学年で神崎ミカがいるって本当か？」

「……。本当ですけど…」

「やっぱりマジだったんか！」

渡した本のページをじっくりと鑑賞しながら私の質問をすぐに忘れてプロデュエリストの神埼さんのことを聞こうとする。

今度は何を企んでいるつもりなんだ……。

私達が神崎さんのことを話すとあの怖い感じの冷たいテンションからいっぺんして急に慌しいテンションに変わる。

「つうことは俺様を差し置いて神崎ミカの同級生か！　許せん！！」

「そうですけど…」

神崎さんは有名人だからこんなところでもファンがいるんだなと私は改めて尊敬する。
そのファンの1人であるカイザーの表情がまるで変質者のように目が逝っている。

「もう見たのか！　神崎ミカのことは！」
「は、はい…」
「死ね！　サインとか貰ったのか！」
「いえ…。別に…」

さらに私や宮城の肩を順に触っていって必死に神崎さんのことを聞き出そうとする。
私達が神埼さんと関わっていると話すとまずいかもしれない……。確実に半殺しにされるかも。

「くそーーーーーーー！　使えない1年どもが！　デュエル部に入れた意味ねえじゃん！　はぁー！？」

カイザーのアイドル信者のような発言をするのが見ていて痛々しいけど、そんなこと言ったら怒られるからな…。
何故か使えないという言葉が胸に刺さって心に刻まれるのは何でだ？

「僕、あとでサイン貰ってきましょうか？」
「俺様は写真集を持っているほどファンなんだよ。」

おそらくだけどカイザーは神崎ミカの狂信的な激烈な大ファンみたいなんだ。
こんな怖い容姿の奴が神崎さんのファンとは世の中わからないものだね。

「わかっているだろうな…。お前らは神崎ミカと口を聞いただけでもデュエルの大会に出れなくなるぞ」

冗談じゃない…。私が神埼さんと付き合って一緒に住んでいるって言ったら確実に殺される……。

私と神埼さんとの関係のことは絶対に気づかれないようにしないと…。と気をつけようとしていたのに…。宮城が…。

「そういえば…。奈々川って神崎と付き合っているんじゃなかったっけか？　家も同じみたいだし！」

宮城が私と神埼さんの関係をあっさりと軽くばらされた……。言わないようにヒソヒソ話す予定だったのに…。

それを耳で流すように聞いていたカイザーは怒りをためながら体中を震わせて…。

「奈々川……。それは本当のことか…！」

「ち、違うんです！　あれは神崎さんのほうから強引に…」

遂にカイザーの怒りが頂点に達した。

「殺す！！」
「うっ」

カイザーの堪え切れなくなった右ストレートがおもいっきり私のお腹を殴る…。
とっさの判断に対応しきれなかった私はガードもできずに大きな衝撃がそのまま激突した。
腹筋を鍛えてもいない女性である私は痛みを耐え切れずに、お腹を押さえながらそのまま床に沈んだ。

「聞いてください！　僕は嫌だったのに無理やり襲われてしまって…！」
「死ね！」

本当のことを話てもカイザーは聞いてくれない。どうやら必死で言い訳しているように見えるようだ。
デュエルディスクを凶器のような扱いで倒れかけている私に向かって投げるが、私は間一髪うまい具合に避ける。
カイザーは犯罪者のような目をして本気のようだ…。私のことを本当に殺そうとしている…。

「付き合っているだ？　一緒に暮らしているだ？　それは裸同士で大事な毛を見せ合ったってことか！　あぁ！！」
「カイザー…。誤解なんです！　奈々川は……」

デュエル部に置いてあったデュエルディスクを何個も何個も私目掛けて投げようとするところを、この原因を作った宮城が懸命に謝

ろうとする。
最初は宮城の努力もむなしく狂気のカイザーは口を聞いてくれなかったが、私の本当のことを必要以上の声で何回も話すとカイザーの動きは止まった。

「なるほど…。俺様の物になる予定の神埼ミカがお前みたいな女男にほれるってことはないだろう」
「そうですよ…。僕が神埼さんと付き合うってありえない話ですし…」

ゆっくりとさっきの腹パンの痛みを堪えながら私は一呼吸ついてとりあえずは一安心だ。
宮城が言ったこの騒動を止めるための一部の嘘のおかげで、勘違いだと解釈したカイザーは私に攻撃するのは止まったようだ…。
だけど…。

「じゃあ！　神崎ミカの風呂場の動画を隠し撮りして来い！」

「はぁ？」

ポカンとしばらく口を開いたまま私はカイザーの言ってることが

理解できなかった。
隠し撮り？　女性であるからわかるけど女の子が一番無防備なところを狙って、女の恥ずかしい姿のを晒されていい思いをする人なんていない。

「神崎ミカの風呂場を盗撮しろって言ってんだよ！」
「なんで！？」
「一緒に住んでいるなら盗撮くらいできるだろうが！！」

カイザーはさらに元々荒かった口調がさらに荒くなり、唾が飛びまくってるほど興奮は最高潮に達成していた。

「本来なら口を聞いただけでもお前らは死刑なんだよ！　おっぱいが見れるだけで手を打つ。そのありがたみを知らないのか」
「そんなことできるわけがない！」

私だって女の子だっていうことがばれなくないからわかる。今、一番私がされたくないと思うことが盗撮されることだ。
人がされて嫌なことを何も知らない神崎さんのお風呂を盗撮することなんて私には出来っこないよ…。

「てめぇ…」

反抗的な態度を取っている私の首を縛り付けながら壁際を利用して体を宙に浮かされる。
これからそこで気絶している堀内先輩のように意識がなくなるまでリンチされるという未来が見える…。
けど私は屈辱に負ける気がしない。男になった私には勇気があるから…。

「おい、デュエルしろよ…！」

緊迫したこの薄暗い雰囲気の中、私はこの強気で言葉を言った。

「デュエルだと？」

「僕とデュエルしろと言っているんだ！」

私の不意を付いた言葉に、カイザーは二度確認するためにもう一度発言したけど私ももう一回発言してやった。

「ほう…。この俺様とデュエルするってか？」

「ああ…。そうだよ…。デュエルの練習をしないってことは余程自信があるんですよね」

「無茶だ。奈々川…。相手はデュエル部のエースカイザーなんだぞ…。お前が勝てるはずもない…」

宮城が私を止めに入ろうとしたけど、手を払って私が本気だということを理解させる。

相手は自称カイザーと名乗るほどデュエルの腕は一流かも知れない…。

でも、人間として終わっている変態な野郎に勝負を付かされるなんて一緒の恥だ。それこそ切腹したほうがましだよ。

それに私は一度、そこで泡を吐いて倒れている高校デュエルで４位の堀内先輩に勝ったんだ。自信はある！

「ただ単純に勝負するなら賭けをしましょうか。先輩♪」

「今、この俺様に対してその汚い発言を忘れるんじゃねえぞ！」

そこら辺に落ちているデュエルディスクを拾い上げて私は展開し

て勝負の準備を図ろうとする。
私の落ち着いて準備をしているのを確認しながらカイザーは私にさらに喧嘩腰で言葉を言う。
「お前が俺に勝てるという証拠はどこにあるんだよ？」
「僕が勝てば神崎さんのことを諦めてデュエル部もまともに活動してくれると約束してくれるか？」
私が頑張ればこの部活も普通の青春に溢れたまともな部活に変わってくれると信じているからこの台詞を言ったんだ。
だから活発になって楽しい部活になって、私がデュエルキングになる道のりの為に絶対に勝つんだ！
「だがお前にも条件がある」
「何だ！？」
賭けごとだから当然負けた時にも私の罰がある。簡単な罰かと思っていたのにこのあとの発言は…。
「お前が負けたら学校中を裸で逆立ちで歩けよ。チンコ丸出しにしてな！　神崎ミカにも嫌われろ！」
「……」
負けたら全裸で歩く条件を出されて私は少し動揺してしまった。
裸を出すという行為は私が女だっていうことがこの学園に知られてしまうこと…。それは私がデュエルキングになれないということだ。
それでも私は屈したりしないよ。強気で私は決意したことだから

な。

「その曲がった口を僕が二度と話せないようにしてあげるよ。さあデュエルだ！」

制服に隠し持っていたデッキをデュエルディスクに差し込んだ。

差し込んだデッキは自動的にディスクによってシャッフルさせ、私とカイザーのライフ表示は４０００となり、下のランプが点灯した。

『決闘！！』

ユウタ　ＬＰ４０００
カイザー　ＬＰ４０００

「俺様が先行を貰う！」

本当は私が先行を貰いたかったんだけど向こうは先輩だから仕方がないか。

意地を張っているカイザーは急いでいるようにデッキのカードをドローしたので先攻後攻を決める話合いができなかっただけなんだけどね。

「カードを3枚伏せてターンエンドだ！　今から女みたいなお前をボコボコにしてやるから待ってろ！」

「……」

私を多めな伏せカードで挑発したようだけど無駄よ。
急いで先行を取ったくせにデッキをぶん回さないってことはどうせ事故っているんだろ。所詮はフィールドはがら空きだ。

「僕のターンドロー！」

6枚になった手札の束を見て序盤をどう出るか一手を考える。
おそらくだけど私の攻撃を誘っているように見えるのよね。罠だとわかっていても3枚もある伏せカードをいち早く潰すために全身あるのみ。

「『X－セイバー　エアベルン』を通常召喚！！　そしてすぐにバトルフェイズに移行！」

カードをメンコのような勢いで叩きつけると猫のものとは思えないほど長い爪を持ったモンスターがソリッドビジョンに映される。
手始めにこのカードで相手をけん制するつもりだ。このカードは強力な効果を持っているから相手のペースを握るのには十分。

「いけ！！　『X－セイバー　エアベルン』でダイレクトアタック！！」

長い爪を生かした攻撃でカイザーに飛び掛ろうとしている。この攻撃が通れば大きなアドバンテージが取れる！！

「ノーガードだ！」

「！？」

カイザー　ＬＰ４０００→２４００

『エアベルン』の爪がカイザーのデュエルディスクを切り裂いた。伏せカードが３枚もあったのに防げない…？　あんなに強気で私のことを見下していたのに全てブラフだったなんて…。

でも、これで『エアベルン』の効果が発動する。これで私の勝利に大きく貢献するのだから。

「『エアベルン』の効果発動！　このカードが戦闘によって相手にダメージを与えた時、相手プレイヤーの手札をランダムに捨てさせる！」

「めんどくさいから早くこっちに来いよ！　選ぶんだろ！」

どうしてなのかわからないけど手札をハンデスされるってことはデュエリストでは不快なことなのに、カイザーは落ち込む様子もない。

それなのに平然とした態度で私に堂々と手札を向けてくる。だから私はカイザーの手札のカードを３枚の中から選んでやった。

「さあ何を選んだんだ？　そのカードの名前を言ってごらん？　ヒヒヒヒ！」

私は選んだカードを見て驚愕した。何で……。何でこのカードが……。

「俺様の切り札をわざわざ捨ててくれるなんてな、なんとありがたいんだろうな。感謝するぜ！」
「くそっ！」

切り札を捨てたのに悔しがる私の姿を見て宮城が疑問に思っている。
このデュエルモンスターズ界で一番捨ててはならないカードだったんだから……。そう…。手札から墓地に送られた時に効果を発動する暗黒界。

「お前が捨てたのは『暗黒界の龍神　グラファ』。このカードが手札から墓地に捨てられた場合、相手のカードを強制的に破壊！　さらに相手によって捨てられた場合は相手の手札をランダムに見てそれがモンスターだったら特殊召喚できるんだぜ！」

手札の『グラファ』を引き裂いた『エアベルン』を返り討ちにするかのように、墓場から不気味な色をした龍のモンスターが巻き込んだ。
さらに追加効果として私の手札のカードを見られる効果を持っている。私がカイザーにやったときのように、私も手札をランダムで選ばれなければならない。
しかも暗黒界を使用するカイザーと違って私には対策なんてない…。だから今度は相手の思う壺…。

「ちっ…。なんだよ…。はずれかよ…。まあいいか…」

ランダムに選ばれたのはモンスターカードの『ＸＸ－セイバーフォルトロール』。

幸いにこのカードはＸセイバーが２体以上いなければ特殊召喚できない条件モンスターだったので相手に特殊召喚されるということはない。

けれども…。情報アドを取られる羽目になってしまった…。

「…。くっ…。僕は手札のカードを２枚伏せる…。これでターンエンド」

私は伏せカードと共に並べる。モンスターがいないってことは今度は私がダイレクトアタックの危機に迫られる。

ユウタ
ＬＰ：４０００
手札：３枚
場　：モンスター
　　なし
　　魔法・罠
　　伏せ２枚

カイザー
ＬＰ：２４００
手札：２枚→３枚
場　：モンスター
　　なし

魔法・罠
伏せ3枚

「俺様のターンいくぜ！『暗黒界の狂王　ブロン』！　通常召喚だ！」

私を撹乱するように手札をパチパチと音を立てながらカードをプレイさせる。

現れたのは人間の容姿をしているのに首が異常なまでに曲がっている骸骨顔のモンスター。

「僕はこの瞬間伏せてあった『月の書』を発動させるよ！　効果により『ブロン』を裏守備表示に変更！」

活発に動いていたソリッドビジョンも裏守備という表示になればそのビジョンもカードの裏側を表したものになる。

普通ならばできるだけ温存して相手の攻撃時に発動したほうが得なのだが、暗黒界相手では違う解釈が取れる。

「僕が墓地に送った『暗黒界の龍神　グラファ』はフィールド上の暗黒界と名の付いたモンスターを戻すことで墓地から特殊召喚できる強力カード。でも、そのカードは表じゃないと召喚条件を満たせないんだよ」

「こいつ！！　俺様の動きが読まれているだと！！」

私は一生懸命勉強した知識があったからこそ、このプレイングが取れたんだ。デュエリスト同士ではカードの知識が多いほど有利だ。

予想外の展開でカイザーは慌てて今ある手札のカードで何とかし

ようとするけど手札のカードは動く気配はない。
この手札では今のターンは動くことはできないみたいね。
「ちっ……。しかたがないが俺様はこのままターンエンドだ！」

「僕のターンドロー！『ＸＸ－セイバー　フラムナイト』を通常召喚」
私は守備表示になったことで戦闘を簡単に破壊できるチャンスに、金色の髪をした可愛い目をした剣士を呼び出す。
そしてすぐに相手の伏せを警戒せずにバトルフェイズに入る。
先ほど『エアベルン』にライフを大幅に削られたとはいえ、初期ライフが４０００しかないこの世界では守らない方がもったいない。
アドバンテージの次に大事なのはライフなのだから。
「『フラムナイト』でそのセットモンスターに攻撃だ！」
小さいモンスターが得たいの知れない裏のカードに飛び掛っていく。もちろん私はそのカードは『月の書』で裏にしたカードだと知っているけど。
伏せカードもやっぱり発動せずに普通に通った。裏になっていた『ブロン』はそのまま戦闘破壊されていく。
「そして『フラムナイト』の効果だよ。墓地のＸセイバーを蘇生だ！　もう１度僕の前に現せ！！『Ｘ－セイバー　エアベルン』」
墓地から呼び寄せるのはさきほどハンデスに成功したモンスター。

さっきやったようにハンデスしたいけれども…。
私のやることは…。

「僕はメインフェイズに移行するよ」
「何びびってんだよ！　攻撃するんじゃないのか！？」

攻撃をせずにまっさきにメインフェイズ２に移行するとカイザーは私を刺激させてきた。やっぱり手札には暗黒界がまだいるのか…？
私の攻撃をまた誘っているように見えるんだよな…。下手に暗黒界相手にはハンデスするのは相当勇気がいる。
この攻撃が通ってれば相手のライフを８００まで追い込むことができたのだけれども暗黒界は相手にハンデスされると効果が凶悪になるから…。

「僕は手札から『フォルトロール』を…」

でもこれで場にXセイバーが2体そろった。どうせならさっき『グラファ』で見られた『フォルトロール』を出して展開するべきだな。
私が手札の一番右側にある『フォルトロール』に手を掛けようとした次の瞬間…。

「させないぜ！　『マインドクラッシュ』！」
「え…っ！！」

通称『マイクラ』。カード名を宣言することでその宣言したカードが相手の手札にある場合に全て捨てさせることが出来るカード。

このカードの発動によって私が狙っていたプレイングが大幅にずらされてしまうことになる。

さっきまで有利だった私だったけれどもここから相手の反撃が始まろうとしている。そしてカイザーの持つ暗黒界デッキの恐怖を知ることになる。

ユウタ
LP：4000
手札：3枚
場　：モンスター
　　XX－セイバー　フラムナイト
　　X－セイバー　エアベルン
　　魔法・罠
　　伏せ1枚

カイザー
LP：2400
手札：2枚
場　：モンスター
　　なし
　　魔法・罠
　　伏せ2枚
　　マインドクラッシュ（XX－セイバー　フォルトロールを宣言）

第9話　『暗黒界攻略の鍵は無限ループ！？』

ユウタ
ＬＰ：４０００
手札：３枚
場　：モンスター
　　ＸＸ－セイバー　フラムナイト
　　Ｘ－セイバー　エアベルン
　　魔法・罠
　　伏せ１枚

カイザー
ＬＰ：２４００
手札：２枚
場　：モンスター
　　なし
　　魔法・罠
　　伏せ２枚

マインドクラッシュ（ＸＸ－セイバー　フォルトロールを宣言）

「『マインドクラッシュ』の効果で『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を墓地に送らせるぜ！」
「……」
「ざまあねぇな！」

先ほど『暗黒界の龍神　グラファ』の効果で公開されたカードで反撃しようと考えは甘いようだった。

相手に知られているのカードはやはり簡単に対策されてしまうのがオチのようだ。
私は納得いかないショックで無言のままカイザーが宣言したカードをゆっくりとデュエルディスクの墓地のゾーンに置いた。
「これで終わりじゃねぇだろうよ！！　あとのカードを全部見せやがれよ！」
「何でだよ！　これで処理は終わりでしょ」
「不正がないか確認するためだ！　もう1枚隠れている可能性もあるだろ！　いいからよこせ！」
「っ！！」

『マイクラ』の確認のためとはいえカイザーは怒ったかのような表情で私の手札のカードを雑に奪い取られてしまう。
「『リビングデッドの呼び声』に『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』か…。うん…。『エマーズブレイド』はともかく、この中で『リビングデッド』が一番うざってーな」
「……」

カイザーはじっくりと私の手札をじーっと見つめながらいろいろとカードの感想を言ったことがむかつく。
デュエリストとあるものは、手札のカードを全てばれるという行為は丸裸を全て見られるくらいに恥辱なもんだよ。
「もういいでしょ！　いいから返して！…」
「焦るなよ。バーカ！　そんなに俺様に見られるのは嫌か？」
２枚しかないのに長い時間私の手札を見ながら手札を見ているから、もういいだろうと勝手に解釈した私は手札を無理やり奪い返し

た。
私は伏せカードをセットせずにターンエンドの宣言をする。伏せない理由はピーピングされたあとに伏せるとなるとそのカードは相手にバレバレだから出来ない。
「おっと…。俺様はエンドフェイズに『暗黒界に続く結界通路』を使用するぜ！　このカードにより自分の墓地の暗黒界と名のつくカードを特殊召喚できる。再び俺様の前に来い！　『暗黒界の狂王ブロン』！！」
このターンに戦闘破壊した首の曲がった骸骨の戦士がフィールドによみがえった。

「俺様のターン！　ドローといこうか！　前のターンでは邪魔されたがこれでようやくあいつを呼びことができるんだからな！」
手札をドローしてカイザーはまるで『ブロン』のようにボキボキと首を鳴らしながらゆっくりと私の顔をじっとみる。
奴の狙っているのは明らかに私のターンに防いだカード……。
「『ブロン』を手札に戻すことでこのカードは特殊召喚できるチェーンに乗らないルール効果だ！　現れろ！　『暗黒界の龍神　グラファ』！！」
「……。僕は召喚時には何も発動しないよ」
ゴゴゴと渋い効果音と共に地面から悪魔の顔を被った龍がブロン

を持ち上げて特殊召喚される。攻撃力２７００…。
もちろん今の私にこの召喚を止める方法などない。この召喚はアドバンテージを失わずに狙える…。なんて恐ろしいカードなんだ。
「そして今、戻した『ブロン』を手札から召喚！　俺様はバトルフェイズに入るぜ！」
しつこいようだけど３回目の『ブロン』が登場する。この召喚のあとにカイザーはバトルフェイズ移行のスイッチを押した。
「『グラファ』で『フラムナイト』に攻撃だ！」
「させない！　『フラムナイト』の効果発動！　１度だけ攻撃を無効にする！」
カイザーが私の方面に指を指すと龍神が紫色の黒炎を『フラムイト』に向ける。
小さい剣士でありながらも持っている小剣を振り回し三角形の紋章を作ると結界のような物を出して炎を防ぐ。
「でも『ブロン』の攻撃が残っているぜ。『フラムナイト』に止めをさしな！」
フィールドにいるときに１度しか使えない効果を使い切ったためこの攻撃は伏せぐことは私はできない。『フラムナイト』はそのまま破壊される。
ユウタ　ＬＰ４０００→３５００
「さらさらに！　相手に戦闘ダメージを与えた時に『ブロン』の効果発動だぜ！　手札のカードを１枚捨てることができるんだよ」

「僕のライフを削るより『ブロン』の効果を優先したのか！」

攻撃力が高い『グラファ』を囮にさせることで『ブロン』の発動条件を満たすことに狙いがあったようだ。

そして効果によって『暗黒界の武神　ゴルド』が墓地に送られる。

「そして、そして！　『ゴルド』は手札から墓地に捨てられた時、フィールドに特殊召喚ができるんだぜ！　これでさらに追い詰めてやるよ！　喰らうがいい！」

黄金に輝く武装した悪魔がフィールドに姿を現す。このことからカイザーは僕のライフを狙うよりボードアドを重視したってことか…。

「まだバトルフェイズは終わってない！　俺様は『ゴルド』で『エアベルン』を攻撃ーー！」

バトルフェイズでの特殊召喚ってことはこのカードでさらに私を追い込めるために反撃をするつもりだな。

この攻撃を私はそれを止めるべくセットカードに手を付ける。

「僕はトラップカードをオープンさせる！　『身剣一体』を発動！」

「見かけないカードだな？　何だ？　それは？」

カイザーは『身剣一体』の効果がわからないようなので私は説明をしてあげる。

テーマデッキのマイナーカードはあまり知られていないようなのかな…と私は心の中で落ち込む。

「『身剣一体』は自分の場にXセイバーが1体しか存在しない場合

に発動できるカード。これによって『エアベルン』の攻撃力を８００ポイント上げるよ」
「ちっ…。これじゃあ攻撃力上回ってしまったじゃねぇか…！　くっそったれ！！」

Ｘセイバー　エアベルン　攻撃力１６００→２４００
カイザー　ＬＰ２４００→２３００

攻撃力を１００だけ上回った『エアベルン』が『ゴルド』を粉砕して返り内にした。
舌打ちをしながらカイザーは壁を大きな音が出るように叩いていることから、作戦通りにうまくいかなかったことを意味する。
「しょうがないか…。まあいい…。じゃあ俺様はこのままターンエンド」
仕方がないと諦めてすぐに機嫌を直すとターンエンドを宣言した。
さあ、私のターンだ！

ユウタ
ＬＰ：３２００
手札：２枚→３→４　（リビングデッドの呼び声とＸＸ－セイバー
　エマーズブレイド）
場　：モンスター

Ｘ－セイバー　エアベルン（攻撃力２４００）
魔法・罠
身剣一体（エアベルンに装備）

カイザー
ＬＰ：２３００
手札：２枚
場　：モンスター
暗黒界の龍神　グラファ
暗黒界の狂王　ブロン
魔法・罠
伏せ１枚

カイザーのフィールド上のモンスターに少々驚きながらも、ドロー加速によって手札が増えた私はこの展開を打破する方法を考える必要性がある。

「僕のターン！ドロー！『エアベルン』で『ブロン』に攻撃だ！」
「ノーガードだよ！　ちっ！」

まずは『身剣一体』の効果でさらなる手札を増やすためにとメインフェイズ１を飛ばして攻撃宣言に入った。
舌打ちをまたしてイライラしているけれどカイザーはこの攻撃は防がなかった。いや、防げなかったというべきか。

カイザー　ＬＰ２３００→１７００

「『身剣一体』の効果でワンドロー」

私はカードの処理によってデッキの上に手を掛けてカードを持っている手札の束に加える。

「さらに『エネミー・コントローラー』を発動。1つ目の効果を使い『エアベルン』をリリースして『グラファ』をコントロールを僕の元へ移動させる！」

「チンコ小さい癖にいちいちチマチマと動きまくりやがって…」

そしてゲームのようなコントローラーのカードを使用させて『グラファ』に配線を指すとそのまま移動して私のカードのように扱った。

「これでとどめだ！　『グラファ』でダイレクトアタック！」

この攻撃が通れば私は勝てると勝利への希望を持って勢いよくカイザーを指で指名する。しかしそう簡単にうまくいくはずもなく…。

「これで終わりだと思ったのかよ…。手札から『バトルフェーダー』の効果発動！」

手札から鐘の音色が部室に鳴り響くと私のモンスター達は攻撃する目付きをやめて大人しくなった。

「…。僕はモンスターを1枚セット。そしてリバースカードを2枚伏せてターンエンド…」

「だがな！　これで俺様の『グラファ』を返してもらう！」

とどめをさせなかった私は少々落ち込みながらも持っているカードを大量に伏せて守りの姿勢に入ろうとする。

ここで処理しきれなかった『グラファ』をエンドフェイズ時に持

ち主に戻す行為はかなり痛い。

「ドロー。セットしてあった『強欲な瓶』を表にして1枚ドロー。そして『暗黒界の門』すぐに発動だ！　このカードが存在する時、フィールド上の悪魔族モンスターの攻撃力は３００ポイントアップするんだぜ」

やはり先行で伏せてあったカードはブラフであったか…。

フィールド魔法が発動されるとカードで溢れているデュエル部の景色が一変して、部室の中央に大きな黒い門のビジョンが映し出される。

暗黒と名のつくことだから実際は綺麗なもんじゃないよ。それでもこの景色が決闘の舞台としてのやる気が出てくるけど。

「『暗黒界の門』の効果！『ゴルド』を除外！『暗黒界の術師　スノウ』を墓地に捨て1枚ドロー！そして『スノウ』は捨てられた時、デッキから暗黒界と名のついたカードを持ってこれる！　俺様は『暗黒界の雷』を持ってくる」

「くっ…」

カードを次々と入れ替えてくるカイザーの行為は細かいだろうけど確実にアドバンテージを稼いで私に重い一撃を与えようとしている。

私にこの展開を防ぎきれるのだろうか…。

「『暗黒界の雷』発動！　俺はその目障りな裏側のカードを破壊だ！」
「…っまずい…」
大きな雷が私のセットカード目掛けて降り注いだ。カイザーが選択して破壊されたカードはモンスターカードだった。
「っっはっは…。お前の伏せカードは1枚は『リビングデッドの呼び声』なんだろ！　バレバレだっつーの！『エマーズブレイド』を破壊だ！」
満足気味の声で私に言い聞かせる。けど…。そのカードは…。
「残念だったですね。先輩！」
「なんだと…！」
「先輩が破壊したのは『XX－セイバー　ガルセム』。リクルーターである『エマーズブレイド』を破壊しようと企んでいるということはわかった。だからこのカードをわざわざ選んで伏せたんだ」
この狙いはわかっていたんだ。『マインドクラッシュ』でわかっているからこそカイザーは私のセットカードの『エマーズブレイド』を伏せるだろうと…。
多少ためらうプレイングだったけれども私の細かいフェイクを使ってうまく騙せたみたいね。
「『ガルセム』の効果でカード効果で破壊された時にXセイバーをデッキから手札に加える」
デッキの束をデュエルディスクから取り出して『XX－フォルト

ロール』を考える暇もなくめくって選んだ。
　さっき『マインドクラッシュ』で見事に捨てられちゃったけどXセイバーデッキにはこのカードはキーカードだから。

「でもなー。そんな余裕がお前にあるのかよ！『雷』の効果で手札を1枚捨てる。そして『暗黒界の狩人　ブラウ』が墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドローできる効果があってな！　ハハハ。これでお前を守るモンスターはいなくなったってことだよ。バーカ！」

　カイザーは再び手札をドローする行為を取る。

「俺は『グラファ』でダイレクトアタック！」
「うわあああああああ」

　無に等しい私のフィールドに直接『グラファ』のソリッドビジョンである火炎がモロに受ける。

　ユウタ　LP3200→200

「虫の息ってことか？　俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

　何とか耐え切ったけれども残りライフは3桁しかない…。まずい…。
　『リビングデッドの呼び声』で『フラムナイト』を呼んでこの攻撃を防ぐという選択誌もあったけれど、まだ持ちこたえると思ったから使わなかった。
　でもライフ3000も失うってことはもったいなかったかもしれない…。

ユウタ
ＬＰ：２００
手札：２枚→３枚　（Ｘ－セイバー　エマーズブレイドとＸＸ－セイバー　フォルトロール）
場　：モンスター
なし
魔法・罠
伏せ２枚　（１枚はリビングデッドの呼び声）

カイザー
ＬＰ：１７００
手札：１枚
場　：モンスター
暗黒界の龍神　グラファ
バトルフェーダー
魔法・罠
暗黒界の門
伏せ２枚

「僕のターンドロー！！」

カイザーに少しずつ追い込まれていく私は焦りを感じながらも、なんとしてでも手札のカードと睨めっこしながら勝ち筋を探していく。

長期戦に持ち込むほど不死身の『グラファ』により少しずつアド

バンテージの差が開いていくから何としてでも速攻で勝たないとまずい気がする…。

「なかなかいいカードを引いたな。僕は『大嵐』を発動！」

今、引いた『大嵐』を利用してこれであいつのガン伏せを全て吹き飛ばせると思っていたが…。

「これを通すわけにはいかない！『魔宮の賄賂』！　魔法・罠の発動を無効に破壊する！　でもお前はそのおまけとしてカードを1枚ドローできる！　さあ引きな！」

厄介な『門』と見えない伏せカードを飛ばすのは無理だったけれども僕はカードをドローできる。

手札を増やしていくと共にこのあとの展開をじっくりと考える。

「『Ｘ－セイバー　エマーズブレイド』を通常召喚…。さらに墓地の『ＸＸ－セイバー　フラムイト』を選択して『リビングデッドの呼び声』を発動！」

複数の手で剣を持った昆虫の剣士とカイザーにばれてある伏せてあったカードを使ってさらなる展開をこころがける。

「さらに自分の場にＸセイバーが2体以上存在するから『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を特殊召喚！　そして効果起動！」

「させるかよ！　ライフを１０００ポイント払って『スキルドレイン』発動だ」

カイザー　ＬＰ１７００→７００

効果を無効にされてしまった…。けれどもこれでカイザーは１００ものライフを失ったってことだ。

「だけどまだ僕は展開できる！レベル６の『フォルトロール』にレベル３の『フラムナイト』をチューニング！　剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け！シンクロ召喚！現れろ『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』」

「攻撃力３１００だと！！」

「暗黒界の弱点は『グラファ』に頼りっきりってことだ。攻撃力３０００以上のモンスターを出されると反撃できなくなるってこと」

私はシンクロ召喚をして切り札である『グラファ』の攻撃力より１００だけ大きい総司令官を呼んだのだ。

『スキルドレイン』で効果は発動できなけれども、この効果は暗黒界相手では無意味なんだけどね。攻撃力が高いってことに意味がある。

「『ガトムズ』で『グラファ』に攻撃！」

「ぐわぁ」

カイザー　ＬＰ７００→６００

『ガトムズ』は自分の身長以上もあろうかという剣を軽々と持ち上げて黒い悪魔の龍に切りかかり粉砕した。

「そして『エマーズブレイド』で『バトルフェーダー』を攻撃！カードを１枚セットしてこれで僕はターンエンド」

さきほど大きく邪魔されたカードを倒すとこのままこのターンを終わりにする。

今、伏せたカードは『ガードブロック』。低い攻撃力を晒した『エマーズブレイド』の戦闘ダメージを0にして次のターンに繋げる…。
これで次のターンをしのいでこのまま勝ちに繋げるという勝ち筋が私にはあるんだよ。

「俺様のターン！　ドロー！『暗黒界の門』発動！　墓地の『ブロン』を除外してこのカードを捨てるぜ！」
破壊できなかったカードを利用してさらなる手札増強をするカイザー。
次に捨てた暗黒界は何であろうと簡単に『ガトムズ』が突破されるはずがないと言い聞かせていたはずだったんだけれども…。
「っ！　そのカードは2枚目の…」
「お前は言ってたよなーー。暗黒界は『グラファ』頼りすぎのデッキってな…。確かに『グラファ』頼みだけれどもこれならどうだよ。俺様の運はまだまだいけるってな！」
私は捨てたカードを見て圧倒的なカイザーの力の前に凌駕する。
「そうだ！もう1枚の『グラファ』だよ。1枚ドローして『グラファ』の効果で『ガトムズ』を破壊だ！」
2枚目の『グラファ』が落ちて私の希望であった『ガトムズ』が『グラファ』と共に道連れにされて破壊されてしまう。唯一の私の

希望が…。

「次は『暗黒界の尖兵　ベージ』を召喚してこいつを戻し『グラファ』を特殊召喚！　さらに『死者蘇生』を発動して墓地の『スノウ』を出して『グラファ』を呼び戻す！」

『グラファ』の召喚コストとして次々とモンスターが手札に戻って一気に2体も並んだ…。

アドバンテージを失わない召喚方法…。こんなことって……！

「これで終わりだな！　お前は大人しく罰ゲーム通りに全裸で学校を逆立ちで歩くってことだ！『グラファ』で『エマーズブレイド』に攻撃！！」

忘れていたけれどもこの決闘は罰ゲームを掛けたデュエルだったんだ…。

このデュエル部の未来と私のデュエルキングになるという精神から決して負けてはいけない戦いだったということを…。

「『ガードブロック』の効果発動！　1度だけ戦闘ダメージを無効にして1枚ドローできるんだ！」

予定は狂ったが前のターンに予測していた攻撃を防いだ。私はまだ戦える…。次のターンで何とかすれば…。

「そして『エマーズブレイド』の効果で再び『エマーズブレイド』を守備表示で呼び出す！　これならまだ数ターン耐えることができる！」

リクルート効果で同盟カードを呼び出したけれども所詮は時間稼

ぎにしかなってない。このままだと少しずつ敗北に向かっていってる。

「だが持ちこたえたところで不死身の『グラファ』の布陣は簡単に突破できない！　これでターンエンドだ」

私は目をつぶってデッキのカードをドローしながら勝てる手段を思考する。

1枚のある伏せはずっとセットしてあった『レインボーライフ』だからまだデュエルは遅延できるから負けるってことはない。

そこで隙を見て逆転を探るというプレイングでは駄目だ…。カイザーの場にある『スキルドレイン』と何度でも復活する『グラファ』が私の逆転の糸を邪魔する。

ではどうすれば…。

ユウタ
LP：200
手札：0枚→1→2枚
場　：モンスター
　　X－セイバー　エマーズブレイド
　　魔法・罠
　　伏せ1枚

カイザー
LP：600
手札：2枚　（暗黒界の術師　スノウ　暗黒界の尖兵　ベージ）
場　：モンスター
　　暗黒界の龍神　グラファ×2
　　魔法・罠

暗黒界の門
スキルドレイン

最後の最後で引いた手札のカードを見たけれども直接的に６００の命のカイザーを止めを指す手段はない。
けれどもなかなかいいカードを引いたんだ。初めてやるけど、これから私は面白いことを思いついたからこれに挑戦して見る……。
「『おろかな埋葬』を発動！　効果で僕は『Ｘ－セイバー　パロムロ』を墓地に送るよ」
「いまさらそんな屑カードを墓地に送っても無駄だ」
確かにカイザーから見れば何の価値もないカードかもしれない。
しかし私にとっては憧れの不動遊星と同じ考えでこの世には不必要なカードなんて存在しないってことを思い知らせてあげるから…。
「『エマーズブレイド』を攻撃表示に変更して『グラファ』に攻撃！」
「血迷ったか！　それでは自爆だ！　俺様に勝てないからってサレンダーを選ぶより死を選ぶというのか？　自滅しても俺様の言った通りに別は受けるんだぜ」
カイザーは私の読めない予想外な動きに驚きを隠せない。この特攻によって普通ならば私のライフは０になる。
この特攻もあるカードと組み合わせることで強力なコンボに化けることとなる。
「手札を１枚捨てて『レインボーライフ』発動！」

「何をするつもりだ！」
「このカードが発動したターン中に受けるダメージは全て無効になってその数値分回復することができるカード。これによってこの特攻は２７００ライフポイント回復」

ユウタ　ＬＰ２００→３０００

ソリッドビジョンである苦しみのダメージは癒しに変わり私の体を包む。これによって大幅にライフポイントが動いた。

「『エマーズブレイド』の効果でＸセイバーと名のついたモンスター『パロムロ』を呼び寄せる。そして先ほど墓地に送った『パロムロ』の効果発動！　他のＸセイバーが墓地に送られた時、このカードは５００ライフポイントを支払うことによって墓地から特殊召喚できる」

ユウタ　ＬＰ３０００→２５００

「『スキルドレイン』は墓地の発動は無効にはできないのを裏目にとったか…。だが、いくらモンスターを並べようが無駄だぞ！」

確かにカイザーの言う通りにいくらモンスターの数を増やそうが相手の布陣を突破することはできない。
それでもなお私のターンは続くんだ！　もっともっとこれから長いターンがね…。

「『パロムロ』で『グラファ』を攻撃！」
「また自爆か！！」

ユウタ　ＬＰ２５００→５３００

もう1度特攻をして『レインボーライフ』によって大量に回復した。
初期のライフ４０００が可愛いと思えるほどに、今まで私がピンチだったという面影すらない。
「そして『パロムロ』で『グラファ』にアタック！」
ユウタ　ＬＰ５３００→８１００
「『パロムロ』が戦闘破壊されたことにより再び墓地の『パロムロ』の効果発動！　さらに蘇った『パロムロ』でもう1回『グラファ』に攻撃して！」
ユウタ　ＬＰ８１００→７６００→１０３００
「まさか…」
私がとっさに思いついたコンボに衝撃だったカイザーは思わずこの言葉を口にした。
「そうだよ。これは無限ループコンボだ。それもライフポイントが無限に回復するという超絶コンボ。止められないならずっと続くんだ」
私は永遠に『パロムロ』のループによってライフポイントを少しずつだが地道に増やしていく。
デュエル部が挑む本来の大会ならば1ターンの制限は3分と決まっているけど、これはフリーデュエルだからルールは定まっていない。

だから私はこのコンボを永遠に続けることができるんだ。私はループを途切れぬよう、ライフポイントをずっと回復させた。

ユウタ　ＬＰ１０３００→９８００→１２５００→１２０００→１４７００→１７４００……。

ユウタ
ＬＰ：８９２６００
手札：７枚
場　：モンスター
　　Ｘ－セイバー　パロムロ
　　魔法・罠
　　伏せ５枚

カイザー
ＬＰ：６００
手札：６枚
場　：モンスター
　　暗黒界の龍神　グラファ×３
　　暗黒界の尖兵　ベージ
　　魔法・罠
　　暗黒界の門
　　スキルドレイン
　　伏せ３枚

「すげぇ…。何が起きてんだよ…。俺、ライフが十万超えているの

を見るのなんて生まれて初めて見たよ…」

このデュエルをずっと見ていた宮城はこの状況を見て感激する。ありえないライフを見て思わず噴出しそうになっていたけれど。

「僕はこれでターンエンド。手札宣言によって僕は6枚になるように捨てるね」

「いくら攻撃してもお前のライフは全然削れる気がしない…。雑魚の癖に…」

あれから無限ループを続けてから1時間くらい経過した。

私のライフは十万を超え、まるで別次元のカードゲームというかのような数値になった。

カイザーの『グラファ』3体の鉄壁に反撃する手段がない私はただひたすら『パロムロ』を使って永遠に守りを固めるのみ。

勝負は永遠につかないと思うのだけど私には勝てる自信がある。

なぜならカイザーは『暗黒界の門』を使ってドローを大量にしているために、私よりデッキは数枚だけど少ない。

ずっとこの状況を覆す動きが何も起きずにターンが経過してくれて、このままずっとやり過ごせばデッキ切れで勝負がつく。

「『暗黒界の取引』を発動。効果によってお互いに1枚ドローしてお互いに1枚捨てる」

「どうぞ。チェーン発動はないよ」

このターンもカイザーはひたすら普通の人が削れ切れないライフを削ろうと焦ってプレイしているけれど所詮は無駄だな。

無駄だと思いつつも『暗黒界の取引』を私は通す。私とカイザーは『暗黒界の取引』の処理でカードを捲っていらないカードを捨て

る。
これによって私のデッキは5枚でカイザーのデッキは1枚になった。もうすぐでカイザーのデッキが0枚になって勝負がつく。
デッキが0になったプレイヤーはいくらライフがあろうかと負けになるという強制ルールがある…。

「『手札抹殺』発動！」

と、思っていた私は油断した。こんなカードが飛んでくるなんて思い付いてもいなく対策もない私は驚愕した。

「このタイミングで『手札抹殺』…！？」
「さあお互いに手札を全て捨ててその枚数分だけドローするんだぜ」
私の手札は6枚。カイザーの手札は5枚を捨てたからその分だけドローすることになる。

「デッキがない…」
「俺様もデッキがないなー」

お互いにカードをドローする。お互いにデッキも少なかったから2人はデッキのカードは足りなかった。
カイザーは棒読みでデッキがないことをアピールする。『グラファ』で殴り勝つんじゃなくて『手札抹殺』を引くまで耐えるのが本

当の理由だったとは…。

「お互いにデッキがなくなってことは…」

「俺様は納得いかないが引き分けってことだなぁ…。無限ループなんてふざけたことしやがって！」

私とカイザーのデュエルはお互いにデッキをなくしたことで引き分けだった。

これがデュエル部のエース、カイザーの実力か……。

第１０話　『風にたなびく少女』

ここの部活のデュエル部エースとのカイザーの決闘は結構惜しいところまで行ったのに引き分けだった。
かなり悔しい…。勝ったわけでも負けたわけでもないからカイザーとの私の強さのランクが同じってことを考えるとその点が惜しいな…。

「正直お前はチンコ小さそうに見えるから、威勢がいいだけの大男野朗だと思っていたけどなかなか面白い奴だったな。気に入ったぞ」
「どうも…」

普通の顔をしてデュエルの中もカイザーはしつこくチ〇コ…チ〇コ…という単語を連呼するのが、
さっきからずっと耐えていたけれどもそろそろ限界だ。乙女である私は生理的に引いているくるんだよ！！
何で男の人ってこういうシモネタばっか言うのかしら…。全く持って理解できない。

「おおおーー。あのカイザーにごり押しして引き分けなんて相当ないぜ！！　奈々川やったな！！　無限ループコンボを決めたときすごかったぜ！」

ずっとここで私のことを応援していた宮城はこのデュエルに歓迎して喜んでくれた。
はしゃぐ宮城の姿をジト目で見ながら、カイザーはボロボロの学ランからタバコを取り出しながら一言、

「お前は俺様の子分にしてやるよ！　感謝しろよな！」

子分？　怖い不良に言われると返事の返し方が意味わかんないんですけど？

そういえば集中しすぎて忘れていたけどデュエル前の賭けごと忘れているよなあ…。

神崎ミカを盗撮だとかデュエル部の練習を復帰させるとかいう内容だったけど引き分けだったからどうなるの？

そんなことを一切忘れてカイザーは新入生の私達になれて落ち着いて私が買って来たエロ本の続きを見続ける。

部活はやらないと駄目だろ！…。と言いたくてもヤクザのチンピラみたいな風潮のカイザーに言えるわけもないしなぁ…。

◆◆◆

男装しての学校生活の課題、私が学校生活を送るための寝床、自分が目指す目標のためにこれから頑張る部活動などといった問題を次々とクリアしていった私。

これなら充実したリアルが満喫できると思った矢先に今度は新たな問題が発生することになる。

「「今日は昨日話をした通りに身体検査とスポーツテストを行います。最初は体操服に着替えてからグランドに出て５０メートル走や

反復横とびなどといったスポーツテストを…」」

いつも通りの学校。そしていつも通りの私の担任の渋い白髪頭の今日行われるスポーツテストのこと先生のお話。

「５０メートル走は負けないから勝負しろよ！！」

「私、絶対太ったから体重計に乗るのやだーーー！」

「「そこっ！　静かにしろ！！」」

と、いった一般性との私語。ここまでは私が中学校の時と同じ様に学生らしい会話だ。

今日はデュエルについての勉強はなく、代わりに行われるスポーツテストのことを私は楽しみにしていた。

だって体育はデュエルの次に私は好きなものなんだよ！

男は女と違ってスポーツテストの評価は厳しめに付けられるけど、優秀な評価を取れば賞状をもらえるんだよ！

これは賞状目指して頑張るしかないよ！

「「スポーツテストが全て終わったら今度は身体検査を行います。男子と女子は共に体育館で身長と体重を計ります」」

次に身体検査のことも担任の先生は話を続ける。

今までみたいにここまでは普通に大人しく私は耳を済ませていたからここまでは問題ないんだけれども…。

「「体重と身長を計り終えたら別室で男子女子ともに下着を脱いで着替えてそれぞれ別々の保健室にいくように！」」

下着を脱いでと聞かされて反射反応で身体がギクッとしてしまっ

た。
話をさらに聞いていくと内科検診があるからしょうがないといった内容。
女子ではなく男子と偽っている私はこれはまずい！！
「「男子は上半身裸で待機してください。女子は中に入っていいといわれるまで脱がないでください」」
私が上半身裸…。こんなのありえないよ…。うぅ…。
上を脱いで女房がある私が待機中にずっと男子全員に晒すってことになる…。
うわっ！　これじゃあ女だっていうことが男全員にばれて大変なことになるよ！
羞恥心と私のこれからの学校生活に支障が出るってことになる…。
こんなの無理だよ…。

そしてさらに追い討ちをかけるかのように、私の隣の席に座っている男子3人組みがヒソヒソ話をしている。
それも…。エッチな会話…。

「（いいなーー。内科検診って医者って女のおっぱい見放題じゃないかよ！　ちくしょーーー！）」
「（隣の保健室ってことは俺らは見れないんだぜ…）」
「（ふふふ…。女子はブラジャー外すってことはチャンスだよ！）」
「（…。何がチャンスなんだよ？）」
「（だって下着を外すってことは、体操服の上で直接地肌で着ているってことだろ！　女子が保健室に行くまでに胸ポチとか見れるかもな）」

「（それに気が付くとはお前は天才か…）」

……。もういやだ…。このまま帰りたい…。

この人達に裸を晒したら、私は確実に狙われる…。やっぱ男の人ってみんないやらしいことばっか考えているのね…。

何だかんだいって、５０メートル走、反復横飛び、幅跳び、握力測定などといった競技を次々とこなす。

スポーツテスト、身体測定と次々とこなしたけれども問題はこれからだ…。

女子は別だけど、男子は再び教室に戻ってきてみんな着替えを始めている。これから内科検診といった人生最大の難関が待っている…。

「奈々川は身長いくつあった？」

「１６１．３センチ…」

「わーーい！　俺の方が大きいー！」

次に行われる内科検診の恐怖から心臓バクバクで破裂しそうな私は、宮城のどうでもいい質問を軽く返す。

「そろそろ体操服の下のＴシャツを忘れないうちに脱いだほうがいいぜ。保健室に入ってから脱ぐのは面倒だから早めにしたほうがいいよ」

「……」

一番言われたくない台詞を私に指摘される。わかってるけどどうしようもない私…。

「脱がないのか？」

「寒いからなかなか脱げないんだよ…」

「はぁっ？　もう冬は終わって今は春なのに…。寒がりなんだなー。奈々川は」

適当なことを言ってその場その場をやり過ごしているけど徐々に限界に近づいてきている。まずいぞ…。

「ちょっとトイレいってくるよ…」

「腹が痛いのかよ。急がないと俺らのクラス始まっちゃうよ」

「そっちじゃない…。小の方だよ…」

「大でも小でもどっちでもいいよ！！　まあいい…。俺は先に行ってるね」

嘘を言ってしつこい宮城をわかれさせたけれどもこれからどうやって対処すべきかを考える。

そして何かを思い出す。そうだ…！！　これだ！！

「似合っているわよね…」

女子トイレの鏡を見て自分の全身の姿を見て堪能する。
赤いリボンに懐かしさを感じる紺のブレザーにこの学校で指定されている長さのスカート。
私は今まで男の子になろうと諦めていたが今のこの姿ならどう見ても憧れていた女子高生よね！
何でこの学校の制服を持っているかって？　本人の許可なしに勝手にミカの教室に侵入して制服を奪ったのよ。
これ…。見られたら私は確実に犯罪者しなぁ…。まあばれても元々私は変態扱いされているしミカは怒らないだろうけど。
ってか…。今度は女装しても内科検診から逃げられなくない…。意味ないじゃん！！　と自分に突っ込みたくなった。

私は普通の女性らしくトイレを出て廊下を歩く。
元々、奈々川ユウタとしてこの学校でいる私だけれども、今は女の格好をしているからこの学校にはいない不審な人物なんだよなぁ…。
それでもすれ違う人達はみんなは気が付いていないから普通の女子高生扱いされているってことよね。

「ふぅ……。気持ちいい…」

逃げようとした結果、理由はわからないけど外の屋上に上がってフェンスによっかかってゆれるスカートから風の流れを感じる。
雲一つない澄んだ青空。屋上は死に近い場所だから…。それと一番死にたくないと思える空間でもある。私はそんな深刻な悩みしてないけど。

とりあえず1人になりたくて…。
誰にも見つからないからここでのんびりできると思いリラックスしようとひと段落あくびをしながら背伸びをした時、私は誰かを発見した。

「君も1人なのか？」
「え…え…」

と、赤い短髪の少年が私のことに気が付き、こちらに近づいてきて声を掛けられる。
この人のことは偶々私のクラスの生徒ってことは知っている。話なんかしたことないよ。
でもちょっとだけ気になる人だったからよく印象に残っている。

「小笠原カズマ君よね…。こんなところで何しているの？」
「オレの名前を知っているのか」

名前を突然言われて驚く赤髪の子。知っていたのはユウタのほうであって初対面の女の子に無理やり言われて驚くのも無理はない。
カズマ君は1人ぼっちで休み時間も悲しそうに座っているから名

前くらいしか知らなかった。

「だっていつも寂しそうだったから見てるよ。表情が暗かったから…」

「…。いつもか…」

私のニコっとした発言攻撃でちょっとだけカズマ君は今まで冷静だったのに頬を赤く顔染めている。

「君、クラスはどこなんだ?…。わざわざうちのクラスまでオレのことを見に来ているのかい?」

「あっ…」

ユウタの時の私が見ているだけで女の方の私はクラスすらないから勘違いを与えてしまった…。発言間違えた…。

「じゃあ、君の名前は何て言うの?」

「私の名前…?」

実際はこの学校に存在しない私だからこの質問はまずいんじゃないかと嫌な予感がする。

「私の名前は、なっ…」

「な?」

どうしても名前を反射反応で言ってしまう。苗字を言ったら絶対変なことに思われてしまう。

「あっ!　間違えた…私の名前はナナって呼んでいいよ」

「へぇーー。ナナちゃんか」

適当なことを言ってごまかそうとしているのだけれども、言葉を言い変え様としたから「自分の名前の癖になんで間違えるんだろう」と思われているだろうな。
しょうがなかったから私は自分の本名である名前をカズマ君に教える。

「それで？」
「はい…？」
「いや…。オレのことをいつも見ているって言ってたからオレのことどう思っているのかなぁって…」
「……。ち、違うわよ…」

別に異性として今まで見ていたわけじゃなくて、内気の性格の私はもっと友達が欲しくてカズマ君を見ていたわけで…。
やっぱ男装と女装を使い分けるのは難しいなぁと思った瞬間であった。

「ここに来たってことは君も悩みあるのかい？　だって今は内科検診やってるんじゃなかったか？　サボったの？」

突如、私が怯えていることを発言して思い出したくないことを思い出して焦りを感じている。
このことはもはや言葉を返せるはずもない。

「オレもさ…。サボったんだ…」
「えっ…？」

この人も自分と同じくサボった側の人間であると教えてきた。

なぜだ…。その具体的な理由は悩みがあるのかと思ったから、何で？　っとカズマ君に聞いてみる。

「君を見てると思い出すんだ……。オレが好きだった人と分かれてしまったんだ…。うあああああああああああ。思い出したくもない！！」

深刻そうな顔をして振られたとか言い出したけど、私は恋愛なんてしたことないから何て返事をすればいいのかわからない。

「やっぱさ…。オレ、死んでもいい側の人間だったんだよ…。このまま死んでもいいかと思えてきた…」

急に泣き顔を見せて、突然死にたいとか言い出したから何て言葉を返せばいいのかわからなかったけど。

長ったらしい会話を泣きべそかきながらだらだらと聞かされてもちろんつまらなかった。

「死にたいのか死にたくないのかはっきりしなさい！！」

「うぅ……」

「たかが振られただけでしょ！　そんな小さいことで死ぬって情けなさ過ぎるわよ」

「中学校のころから付き合ってたんだよ。2年の関係がオレのせいで崩れて…」

どうでもいいと思っていたのにこの人の泣き顔が少しだけ可哀想と思えてきたからって

何で私は助けようようと声を掛けているのかしら？

「あんた男でしょ！！　女の子に弱いところを見せるなんてかっこ悪いわよ！」

まあいいか…。どうせもうここで会うわけでもないわけだから、今日だけ女性の気分を味わえるってことで乙女らしく青春っぽい台詞を言う。

「私も今は悩みがあるのよね…。悩みがない人間なんてこの世に存在しないから…」

さらに私は髪の毛を風の流れに棚引かせて振り向かせながらウィンクして安心させようとする。

「確かにそうかもな…。こんな可愛い子の前でオレのダサい姿を見せてもどうしようもないしな…」

「えっ…」

か、可愛いって…。今までそんなこと言われたことがないから今日人生初めて言われてちょっとだけだけど嬉しかった。

私がもしこうやって女として居たらこんな青春があったのかなぁ…。

「あなたは今、学校をサボっていたってことは暇なんだよね。じゃあ…。気分転換にデュエルしなさい！」

この薄暗い雰囲気を変えるべく偶然ユウタ君のバッグから見えるデュエルディスクが２つ見えたのでここでデュエルをしようと誘い

かける。

「デュエルか…。デュエリストである以上、オレは断る必要性はないな。よし！　やろうよ」

「じゃあ…！　持ってくるの忘れたからデュエルディスクを貸してよ！！」

カズマ君は私の勝手なお願いも素直に答えて鞄からデュエルディスクを取り出して私の方にぽいっと投げる。

「何でデュエルディスク持ってないんだ？　デュエリストなら必須ものを忘れるなんてドジっ子なんだなーー」

何でカズマ君は私は何でデュエルディスクを持ってないのか疑問だったらしい…。

私も何で2つのデュエルディスクを持ち歩いているのか疑問だったけれどあえて聞かないでおこう。

たぶんだけど…。そのもう1つのデュエルディスクはピンク色にコーディネートされてたから彼女のものだろうけど。

「う、うるさい…！　今日は偶々急いでたから忘れちゃったんだ」

「急いでたって何を急いでいたんだよ…。別に急ぐことなんてないだろ」

確かに…。急いでいた理由は先ほどあったように逃げてからからだったな…。

そんなことよりもデュエルだ！　私はデュエルディスクを大きく広げてデッキをセットして展開させる。

「さぁ！　デュエル開始よ！！」

「先行は私から貰うよ。ドローだよ！」

まずは手始めに親切に先行を貰ったからデッキのカードを捲ってドローする。

「私はモンスターをセットしてリバースカードも2枚伏せてターンエンドだよ」

相手は何をしてくるかわからないから守りを固めただけ。前にも言ったと思うけどこれが一番安全なんだよね。

「次はオレのターンだ！ドロー。まず、オレは『ドラグニティ―ファランクス』を墓地に送って『調和の宝札』を発動！　2枚をドロー…」

カズマ君のターンに変わるとまずは手札を交換してカードを交換して調整する。何を企んでいるんだ…。

「『ドラグニティ―ドゥクス』を通常召喚！　効果によって『ファランクス』を装備する」

棒らしきものを手にした鳥人の男性がフィールドに登場する。このカードは確か、ドラグテニィでも中核を持つカード…。

「そして『ファランクス』の効果発動！！　装備カードとなっているこのカードはフィールド上に特殊召喚できる！！　現れろ！！」

装備した2本の角が生えたドラゴンが『ドゥクス』から離れて現れる。2体ものモンスターが並んだってことは狙いはやはり…。

「レベル4の『ドラグニティ―ドゥクス』にレベル2の『ドラグニティ―ファランクス』をチューニング！！」

2体のドラグニティが光に変わって交差して交わろうとする。現れたのは…。

「疾風の竜よ！　渓谷から姿を現せ！　現れろ！　『ドラグニティナイト―ガジャルグ』！！」

光の先から出てきたのはドラゴンだか鳥獣族だか判別できないほど大きな羽根を広げたモンスター。

「へーー。1ターン目からシンクロ召喚を狙うとは思わなかったわ…」

「褒めている場合じゃないぜ！　『ガジャルグ』の効果起動！　デッキから『ドラグニティ―ブランディストック』を手札に加えてすぐに墓地に送る！」

『ガジャルグ』は1ターンに1度デッキからドラゴン族か鳥獣族をサーチする代わりに他のドラゴン、鳥獣族を捨てなければならないカード。

サーチしたカードを手札にキープせずにすぐに捨てたってことは勿体無いことだと思うけど、やってることは『おろかな埋葬』と同

じだから問題ないのか…。
「そしてバトルフェイズだ！　オレは『ガジャルグ』でそのモンスターに攻撃しろ！」
『ガジャルグ』は低空で滑空しながら私のセットされたモンスターに飛び掛った。
「やりいー。破壊だぜ！！」
表になったのは緑色の髪をしている美少女モンスターが爪に切り裂かれながら苦しそうな顔をして破壊された。
「あなたが破壊したのは『ガスタの巫女　ウィンダ』。このカードが破壊された時、デッキからガスタと名のついたチューナーを特殊召喚できる」
「あーあー。可愛いモンスターを倒しちゃったよ。何か申し訳ない気がしてきた…」
「別に謝る必要性なんてないわよ」
私は効果処理としてデッキからこの条件を満たすモンスターを何を出そうかと、デュエルディスクからデッキを取り出す。
カズマ君は破壊される『ウィンダ』を見て変な感情を持っているらしいけど、この子の死は無駄ではない。
「『ウィンダ』の効果によって『ガスタ・ガルド』を特殊召喚」
「可愛い顔をしてただじゃ死なないのか…。厄介だ」
『ウィンダ』のペットでもある緑色の小鳥の名『ガルド』を呼び出す。

この子も破壊されることによってリクルートできるガスタデッキのキーカードでもある。
ガスタデッキはこのリクルートする無限の流れで場を維持する戦いが得意だ！

「オレはカードを2枚セットしてターンエンド。どうやら同じ風属性同士の戦いになりそうだ」

私と同様の枚数の守りを固めて次のターンに備えようとするカズマ君。
確かにドラグニティも風属性で統一されているテーマなのよね。
偶然にも私のガスタデッキのほうも風属性だからこの勝負は面白くなりそうだわ。
ここからが奈々川ユウタが使えない私のもう1つのデッキ、奈々川ナナがガスタの力を見せてあげる！！

ナナ
LP：4000
手札：3枚
場　：モンスター
　　ガスタ・ガルド
　　魔法・罠
　　伏せ2枚

カズマ
LP：4000
手札：3枚
場　：モンスター

ドラグニティ　ガジャルグ
魔法・罠
伏せ2枚

第１１話　『ガスタとドラグニティ』（前書き）

待ってた皆様、更新遅くなってすみません。
休みはいっぱい貰って更新できるチャンスが結構あったのに中々キーボードが進みませんでした。

普段はガチばっか使うのでガスタというマイナーすらＴＦでも使ったことないので結構時間掛かりました。
ドラグニティもファランクス、アキュリス、レギオン、ドゥクスといったガチカード以外の効果すら知りませんでしたし。

第11話　『ガスタとドラグニティ』

ナナ
ＬＰ：４０００
手札：３→４枚
場　：モンスター
　　ガスタ・ガルド
　　魔法・罠
　　伏せ２枚

カズマ
ＬＰ：４０００
手札：３枚
場　：モンスター
　　ドラグニティ―ナイト　ガジャルグ
　　魔法・罠
　　伏せ２枚

先行後攻と１ターン目の流れはお互いにライフポイントは変動しなかった。
私の場には『ウィンダ』が残したペットである『ガルド』にカズマ君は厄介な効果を持つ『ガジャルグ』がフィールドに残っている。
お互いに理想の序盤の１ターン目を経過したことだよね。ここからがどちらが勝負の流れを作ることができるのかが勝負の鍵となるはず。

「私のターン」

丁寧な手つきでデッキのカードを捲っていく私。
私が先に序盤の流れをつかもうとデッキのカードを追加してから４枚になった手札で考える。
「『ガスタ・ガルド』をリリースして『ガスタの疾風　リーズ』をアドバンス召喚するよ」
考えた通りに『ガルド』をアドバンス召喚の為のコストとしてフィールドから姿を消すと、その代わりに姉のような雰囲気を持つツインテール美少女が現れる。
女の子とは思えないほどガタイのいい筋肉質なスタイルのいい体系をしているけど攻撃力は１９００。
「また可愛いモンスターがでてきたなー。でもそのモンスターで何をするつもりなんだい？」
カズマ君は攻撃力が２４００の『ガジャルグ』では勝てないからって『リーズ』を指差してちょっとだけ笑って舐められている感じがする。
でもね。このカードは面白い効果があるからそれを今から見せてあげるわ！
「こうするつもりよ！　私は伏せてあった『リミット・リバース』の効果発動！　効果によってさっき墓地に送った『ガルド』を特殊召喚する」
再び『ガルド』が小さな羽根を広げながら華麗に姿を現す。
「そして『リーズ』の効果を発動するよ！　手札を1枚デッキの下に戻すことで相手フィールド上に存在するモンスター1体と自分フ

ィールド上に表側表示で存在する「ガスタ」と名のついたモンスター1体のコントロールを入れ替えることができるんだ」

『リーズ』が持っている杖をクルクルっと一周するように回すとカズマ君の『ガジャルグ』と私の『ガルド』の目が回転していく。

「オレの『ガジャルグ』が！！！」

目を回した2体のモンスターを『リーズ』が「えいっ」という掛け声と共に杖を最後に振るとそのモンスターの持ち主のコントロールがそれぞれ入れ替わった。

そしてそのモンスターを使って…。

「バトルフェフェイズに移行するよ！　奪った『ガジャルグ』で『ガルド』を攻撃！」

「ヤバイっ！！」

奪ったモンスターを使って攻撃宣言をする私。

この攻撃が通れば『ガルド』の戦闘破壊された効果によって私の場にレベル2以下のガスタを再び呼ぶことができる。

これによってさらなるアドバンテージを作る予定だったのだが…。

「『攻撃力の無力化』を発動！！　バトルフェイズを強制終了する！」

カズマ君が発動したトラップにより渦巻状の螺旋渦が出現してその攻撃は止まった。理想な流れはそう簡単に作れるものではないか…。

「あぶねぇ…自分のモンスターをオレに送りつけておいてなんて酷

いことをしやがるんだ！」
「『ガスタ・イグル』。その子はガスタ一族のための中でもペットっという立ち位置なのよ。ご主人のために破壊されるのは本能だと思うよ」
「オレのドラグニティは装備して仲間との絆の連携をするデッキだからわかんないなぁ…。同じ風デッキなのにどうしてこんなに違うものなんだろうか…」

カズマ君は私の仲間モンスターを送りつけるプレイングをあまりいいと思っていないけど、このデッキはリクルーターを最大限に生かすためのデッキだからそういうコンボになっちゃったんだけどね。

「確か『ガジャルグ』には1ターンに1度鳥獣族かドラゴン族をサーチする起動効果があったね。私もこの効果を発動して2枚目の『ガスタ・ガルド』を墓地に送ってターンエンド」

私は地味だがデッキ圧縮と墓地肥やしのために『ガジャルグ』の効果を使うためにデッキのカードを広げた。
そしてその中から条件に一致するモンスターを選んで墓地に置くった。ただ単に無駄な犠牲のために墓地に送ったわけではなくこのカードは後々役になると信じているから送ったんだ。
この子の命も決して無駄にはしないよ！

「オレのターン！　ドロー。『ドラグニティ―トリブル』を通常召喚。この召喚時の起動効果によって『ドラグニティ―コルセスカ』を墓地送ろうか」

ドラグテニィの指揮官だと思われしきポーズをしたモンスターが現れたけど攻撃力は頼りにならないほど低いからそんなに怖く見え

ないんだよなぁ…。

「さらに『トリブル』を墓地に送って『ドラグニティアームズ―ミスティル』を特殊召喚！」

『トリブル』が口笛を吹くと全身黄色の長い槍を持った龍『ミスティル』が空奥から現れてハイタッチすると司令官は消えていった。

攻撃力は２１００か…。奪った『ガジャルグ』は２４００だから警戒するまでもないと思っていたけど追加効果があるみたい。

「このカードが特殊召喚に成功した時の効果で『ドラグニティ―ファランクス』を装備！」

『ガジャルグ』を呼びために使った2本の角が生えたドラゴンが今度は黄色の龍に装着される。

そして『ファランクス』自身の効果ですぐにして分解されてモンスターの形として姿を現す。

「レベル6の『ミスティル』にレベル2の『ファランクス』をチューニング！伝説のソードマスターの龍よ！　オレの前に降臨せよ！

『ドラグニティナイト―バルーチャ』」

『ファランクス』と『ミスティル』が光の粒に変わると一瞬目が眩む光が発生する。

その光の中から出てきたのは緑色の龍に乗っかったソードマスターというべきか…。攻撃力は２０００？

「そんなモンスターでは勝てないわよ」

シンクロ前より攻撃力が下がって思わず声が出てしまったけど、

カズマ君は私に教えるためにすぐに『バルーチャ』の効果を読む。

「こうするつもりだ！『バルーチャ』がシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在するドラグニティと名のついたドラゴン族モンスターを任意の数だけ選択し装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。オレは『ファランクス』『ブランディストック』『コルセルカ』『ミスティル』を装備だ！」

龍の上の戦士が剣を地面に向けると墓地のドラグテニィ達が地面から次々と出てきて武器に変わっていく。

そしてドラゴン達は４つの武器に変わってそれをそれぞれ龍と戦士が持って戦力を上げていく。

「さらに『バルーチャ』はこのカードに装備されているカード１枚に付き攻撃力が３００ポイントアップするんだぜ」

バルーチャ　攻撃力２０００→３２００

なるほど。これで私の『ガジャルグ』の攻撃力を上回ったってことね。

「バトル！　『バルーチャ』で『リーズ』にアタック！！」

すぐにバトルフェイズに入って攻撃宣言態勢に入る『バルーチャ』で私のモンスターをやっつけるつもりだけどそうはさせない。

私には前のターンに伏せたトラップカードがあるからそれをボタンを押して起動させる。

「トラップ発動！『魔法の筒』！」

「やっぱ伏せカードはおっかないもん搭載してたか。でもそうはさ

せない！　『トラップ・スタン』！　このターン。このカード以外の罠効果を全て無効になる」
「っ！」

『トラップ・スタン』が発動されると紫色の電流がフィールド一面に走る。
すると『魔法の筒』と書かれた表向きになっている罠カードが機能を停止して役割を果たせずにそのまま墓地に送られた。
とっさだったので私は反射でデュエルディスクを使って盾にしようと攻撃を防ごうとしたがあまり意味がない。

ナナ　ＬＰ４０００→２７００

「そして『コルセスカ』が装備されたモンスターが戦闘破壊した時、デッキからレベル４以下の同じ属性と種族のカードを持ってくることができる」

厄介な効果だ…。カズマ君はこの効果によって『ドラグニティーアキュリス』を手札に加える。

「さらに『ブランディストック』が装備されたモンスターは１度のバトルフェイズで２回攻撃できるんだぜ！　『バルーチャ』！　奪われた『ゲイボルク』の為に攻撃しろ」
「ちょ、ちょっと待って…！」

ナナ　ＬＰ２７００→１９００

これで攻撃は終わりだと思ったのに想定も付かない攻撃により、

さらに私のフィールドは一気に戦意が喪失した。
そして戦闘破壊されたことによってまた手札アドバンテージを稼がれてしまう。

「再び『コルセスカ』の効果で『ドラグニティ―ブラックスピア』をサーチする。バトルフェイズを終了して『ガルド』を守備表示に変更。カードを1枚伏せてターンエンド」

ナナ
LP：1900
手札：2枚→3枚
場　：モンスター
　　なし
　　魔法・罠
　　なし

カズマ
LP：4000
手札：3枚（2枚はドラグニティ―ブラックスピアとドラグテニィ―アキュリス）
場　：モンスター
　　ドラグニティナイト―バルーチャ（攻撃力3200）
　　ガスタ・ガルド
　　魔法・罠
　　ドラグテニィ―ファランクス
　　ドラグテニィ―コルセスカ
　　ドラグテニィ―ブランディストック
　　ドラグテニィ―ミスティル

伏せ1枚

「私のターン。ドロー」

私は手札と手札の隙間を使って目で状況を把握する。
カズマ君の場には大量に装備された『バルーチャ』。攻撃力は3000越えってことはそう簡単に戦闘破壊できそうにないや。
けれどもカズマ君の場にはチューナーだったのにも関わらず処理できなかった『ガルド』が残っているな。

「『ガスタの交信』を発動。墓地の『ガルド』と『ウィンダ』をデッキに戻して相手のカードを1枚破壊することができる」
「っ！？　オレの『バルーチャ』を選ぶつもりかよ！」

まず発動した魔法カードに驚いてカズマ君は一目散に『バルーチャ』が破壊されると思い込んでいるらしい。
好きなカードを破壊できるとはいえ、ここは慎重に選ぶべきだな。そのリバースカードもかなり怪しいし…。よし…決めたよ。

「私はその伏せカードを選択して破壊するよ」
「え？　『バルーチャ』じゃないのか？」

『ウィンダ』が手を揃えて何かと交信するような演出が行われると1ターン前に送りつけた伏せカードが木っ端微塵に吹き飛んで破壊されていく。

「オレの『ゴットバードアタック』が…」

危なかった…。チューナーの癖に前のターンに使われずに残ってたってことは私が『ガルド』は偶々鳥獣族だったために『ゴトバ』のコストにする予定だったのか…。
いや…。よく考えたらドラグニティシンクロには指定があるから使えなかったってことでそのまま立っていたってことだよね…。そこは深く考えないでおこう。

「そして『ガスタの神官ムスト』を通常召喚！」

ガスタ一族である鏡の杖を持ったおじさんが棒立ちで現れる。

「バトルだよ。『ムスト』で『ガルド』に攻撃！！」

おじさんは懸命に同じ緑色の毛をしている仲間である『ガルド』に襲い掛かった。そのまま戦闘破壊は成功できた。
そして前のターンには邪魔されちゃったけどガスタデッキの得意なリクルート効果をようやく発動できる。

「『ガルド』は破壊されたでデッキからレベル2以下のガスタを呼び起こすことができる。『ガスタ・イグル』を特殊召喚！」

フィールドで破壊された時に『ガルド』は効果を発動する。もちろん相手の場にいようと最終的に私の墓地に送られるから問題ない。

「いくよ！　メインフェイズ2に入ってレベル4の『ムスト』にレベル2の『イグル』をチューニング！！　ガスタ一族の少女よ。私の前に天空へと飛翔して！　シンクロ召喚『ダイガスタ・ガルドス』」

成長した『ガルド』が『ウィンダ』に騎乗したものが大空から舞

い降りてくる。
何でおじさんと『ガルド』ではない違う鳥がシンクロ素材になったのに美少女モンスターになったという突っ込みは置いといて、メインフェイズでなぜこのカードを出したのかはちゃんと理由はあるのよ。

「『ガルドス』の効果！　1ターンに1度、私の墓地に存在するガスタと名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊できるのよ」
「まじか！　だから『バルーチャ』を最後に狙ったのかよ…」

私はコストとして墓地の『ムスト』と『リーズ』をデッキに戻すとツインテールの美女が杖を持って『バルーチャ』に向けて振ると『バルーチャ』は爆発音を鳴らして破壊されてしまう。

「よし！　私はカードを1枚伏せてターンエンド！」

手札を全て使い切ってしまったけれどもこれで厄介なモンスターを破壊できて安心だ。次は相手のターンだから全力で守りきらないと。

「オレのターン。『アキュリス』を通常召喚！」
「これでどうするつもりなの？」

ドローしてすぐに2ターン前にサーチで加えたカードだから私はわかっているけどカズマ君は赤い刃物の凶器の形をしたドラゴンを

呼び出す。

「『アキュリス』が通常召喚に成功した時、ドラグニティと名のついたカードを特殊召喚してこのカードに装備できる！　効果によって『ドラグニティ－ミリトゥム』を出して装備だ！」

細長い剣を持った鳥獣剣士が続けて現れてすぐにアキュリスを自分の武器に加えるかのように振る舞った。

「『ミリトゥム』の効果によって装備されたドラグニティを特殊召喚できる！　『アキュリス』を再び特殊召喚だ！」

「へー。なるほどね」

そして『ミリトゥム』がその赤い剣を屋上から天空に向かって振りかざすと『アキュリス』が武器から再びモンスターに変形する。

私はカズマ君がこうやってカードのシナジー同士でシンクロ召喚を狙うってことに関心していた。

でも関心している場合ではない。これで次にシンクロ召喚が来るっていうことは確定している。

「レベル４の『ミリトゥム』とレベル２の『アキュリス』をチューニング！　現れろ！『ドラグニティ－ヴァジュランダ』！」

武器の剣と鳥獣の勇者が星の屑になり合わさって生まれ変わって出てきたのは大きな槍を持ったドラゴン。

ゆっくりと責める私のガスタデッキとは違ってドラグニティの展開力の速度は明らかに違いすぎる。

「『ヴァジュランダ』を呼び出すことに成功した時、墓地に存在するこのカードにドラグニティと名のついたモンスターを装備するこ

とができる。オレは『アキュリス』を装備！！」

再び赤色の槍の形をした龍が今シンクロ召喚された『ヴァジュランダ』に装着される。

「『ヴァジュランダ』の効果発動！　このカードが装備されている装備カードを墓地に送ることで攻撃力は倍になる！」

ドラゴンナイトはアキュリスを思いっきり投げるとその気合で攻撃力をさらに上げていく。

ヴァジュランダ　攻撃力１９００→３８００

「攻撃力３８００？」

「これで終わりじゃない。装備カードとなっている『アキュリス』が墓地に送られた時、相手のカードを破壊できるんだよ。オレは『ガルドス』を破壊だ！」

鋭い槍の武器となり投げられた『アキュリス』は乗っかっている怪鳥を狙い落とすとそのままバランスを崩して追突する。

まずいぞ…。今の破壊で私の場にはモンスターがいなくなってしまった…。

「これで終わりだ！！　ダイレクトアタック！」

攻撃力３８００の『ヴァジュランダ』が私を襲う。この攻撃を許してしまうと私は敗北してしまうから何としても止めないと。

「…。トラップ発動！　『ガスタのつむじ風』！　私の場にモンスターがいないとき墓地の『ガルドス』と『ガルド』をデッキに戻して他のガスタを特殊召喚できる。私はデッキから『ウィンダ』を特殊召喚！」
「構わない。『ヴァジュランダ』！　このまま『ウィンダ』に直行しろ！！」

緊急時だったけど『ウィンダ』が盾になってくれたおかげで間一髪重い一撃から免れることができた。

「『ウィンダ』の効果によりデッキから『ガルド』を特殊召喚…」

リクルートコンボにより再び守りを固める。けれども墓地にある『アキュリス』の存在からそんなに何度も守りきれるもんじゃない。

「これでゲームセットだな。君の場と手札にはカードが一切ない。それにオレのライフは４０００で全快だ。もう止めてサレンダーしたほうがいいんじゃないの？」

カズマ君は余裕をかまして堂々としながらおそらくこのターン引いた手札のカードを伏せてターンエンドの宣言をする。

「まだだよ。私はライフがある限り絶対に諦めない」
「諦めだって肝心なこともあるんだ！　オレだって彼女のことは諦めたんだよ」

急に落ち込みながらさっき話していた彼女のことを口にして静まり返るように黙り込むカズマ君。やっぱり彼女のことを気にしているのか？

「いや、違う！！　伝説のデュエリストの武藤遊戯だってそうだった。いくら不利であろうともライフが尽きない諦めない精神だからデュエルキングになれたんだ。私だって諦めない！」
「ナナちゃんは随分と男らしい台詞を吐くんだな。だったらやってみろよ。この状況でよ！」

「だったらこのターンで決着をつけてやるよ。いくよ！　私のターン！！」
「やってみろよ！　人はそうやって約束事を作っても結局破られてしまう運命なんだぜ！」

今、大口を叩いたらすぐにそそのかれて返されて言われた。
エンド宣言したことによって『ヴァジュランダ』の攻撃力は１９００になったけどそれもちょうど私のライフと同じ数値だ。
いかにもこのライフが少ないってことがいえる。おそらく『ヴァジュランダ』を攻略しても展開の速いドラグテニィのことだからまたシンクロ召喚されて一気にケリをつけられてしまうだろう。
しかもアドバンテージの差をかなりつけられてしまったから長期戦をするなんてことはもう無理だ。

ナナ
ＬＰ：１９００
手札：０枚→１枚
場　：モンスター
　　ガスタ・ガルド
　　魔法・罠
　　なし

カズマ
ＬＰ：４０００
手札：１枚（ドラグニティ―ブラックスピア）
場　：モンスター
　　ドラグニティナイト―ヴァジュランダ
　　魔法・罠
　　伏せ１枚

「『ガスタの静寂　カーム』を通常召喚！」

デッキトップを光らせて引いたカードは日傘のような形の杖を持ったのんびりとしたお姉さん。

「大口を叩いた割りにそんなへなちょこなモンスターじゃオレのライフ４０００は削れないぜ」
「『カーム』の効果発動！　デッキのガスタ2枚をデッキに戻すことでカードを1枚ドローすることができる」

確かにこのモンスターだけでは勝つことはできない。
私は墓地ゾーンから『イグル』と『ウィンダ』を手に持ってデッキに加えてゆっくりと緊張で落とさないように落ち着いてシャッフルする。
デュエルモンスターズではドロー1枚1枚に重く制約が掛かっている分、カード1枚1枚の重さは重いからこのドローで勝負が決まる。
ここからどうすればいいんだろう…。まあ、ドローしてから考えるか。

「よっしゃ！　来たーー！　『緊急テレポート』！　このターンのエンドフェイズ時までデッキからレベル３以下のサイキック族モンスター１体を特殊召喚できる！」
「またお前かよ…」
「『ウィンダ』来て！」

何度も何度も場と墓地を行き来していて飽きたと口にされてしまったがこれが基本戦術だから仕方がない。

「レベル４の『カーム』にレベル２の『ウィンダ』をチューニング！！　ガスタの封印を解いて真の力を開放して魔力を解き放て！　シンクロ召喚！『ダイガスタ・スフィアード』！」

『リーズ』の大きな特徴だったツインテールを解放させて機械的な種族のヴァイロンを装備して現れる。

「そして『スフィアード』がシンクロ召喚に成功した時、墓地のガスタと名のついたカードを手札に加えることができる。『ガスタの交信』を手札に加えて発動！　伏せカードを破壊して！」

シンクロ素材となったカードをコストに魔法カードを使い邪魔になりそうな伏せカードを破壊する。
破壊できたのは『ドレイン・シールド』。私がさっき伏せた『魔法の筒』とは反対に攻撃したモンスターの攻撃を無効にしてそのモンスターの攻撃力分回復できるカードだ。

「だが、所詮は攻撃力２０００しかないじゃないか。これでは決着は付かないぜ」
「構わない。私は『ガルド』を攻撃表示にしてバトルフェイズに入り『ヴァジュランダ』に攻撃！」

「なぜだ。自分から大ダメージを受けてまで新にカードをリクルートしたいっていうのか？　１４００ポイントのダメージを受けるぞ！」

カズマ　ＬＰ４０００→２６００

私の自爆特攻をする姿に少々驚いた感情があったらしいがライフが何故か自分のライフが減った途端に大人しくなった。

「オレのライフがなんで…」

「驚いたでしょ。『スフィアード』が存在する限り、私のガスタと名のついたモンスターが戦闘ダメージを受ける場合は代わりに相手が受ける効果を持っていてねぇ…」

「何っ！？」

「『ガルド』が戦闘破壊されたことによりデッキから『イグル』を特殊召喚。そして再び『ヴァジュランダ』に攻撃！」

緑色の鳥獣が絶対に勝てないほど強大な龍目掛けて飛んでいく。もちろん簡単にブレスを吐かれて破壊されてしまう。

止められないコンボを自ら破壊される『イグル』をカズマ君は見ながらそのダメージは受けることとなる。

カズマ　ＬＰ２６００→９００

「くそぉ！」

「『ウィンダ』を特殊召喚。さあこれで終わりだよ。『ウィンダ』

で『ヴァジュランダ』に攻撃！！」

カズマ　ＬＰ９００→０

カズマ君のデュエルディスクはライフポイントが０になると音を鳴らしてソリッドビジョンを終了させた。

「くそっ…。結構追い込めたのにオレは女にも負けてしまうのかよ…。こんな貧弱な男だからオレは彼女にも振られるんだよ…」

地面に崩れてデュエルディスクをはずして悔しそうに床を何度も殴る。その姿からカズマ君の目には涙が。

「そんな根拠はどこにもないでしょ。カズマ君はそうやって弱弱しい姿を彼女に晒すから嫌われるのよ」

「うるさい！！」

私が励まそうと考えて台詞を考えたのにカズマ君はそれを聞いて怒り出してしまった。

さっきから彼女、彼女としつこいように言って大泣きしているけど私には振られたことがないからその感情はわからない。

でも私にもミカっていう彼女がいる…。けどあれは私と同姓だから彼女っていうのかすらわからないから違うかもしれない。

「ほら。泣き止みなさいよ。こんなところで泣いてたら彼女に嫌われるわよ」

「！？」

私はポケットにあったハンカチをカズマ君に渡す。
そういえば私もミカにデュエルで負けて大泣きしていたところをハンカチ渡してくれて感動したからそれを思い出してまねした。
なのにカズマ君は私の行動にギュッと来たのか急に黙り始めて私の顔をじっと見つめる。

「そうだよなぁ…。振られた理由がオレがすぐに諦めて弱い姿を晒してしまったからだな…。オレは君みたいにはっきりとした発言で勇気ある行動を取るべきだったんだ」
「……」
「それにしてもナナちゃんはデュエルは男みたいな派手なプレイングだったな。とても女がするプレイングには見えなかったよ」
「それはどういう意味よ！」
「褒めているんだよ。オレは」

男の人にあまり褒められたことがないから何かちょっと嬉しいな…。
でも久しぶりに女に戻ったっていうのに普段は男装している時の癖から、何で男気溢れることをしてしまったんだろう。

そして屋上の景色を二人で満喫しながらその昔の彼女とやらの会話を私はしばらく聞いてあげた。
彼女との別れ話を私に聞かせると安心したのかカズマ君は泣き止んでさっきとは人違いとは思えないほど笑顔は綺麗になった。
どうやら彼女のことは諦めて普通にこれから友達を作って学校生活を楽しむようだ。そして、人段落付いてから…。

「カズマ君って部活に入ってる？」
「何も入ってないよ」

部活は入ってないか…。
私はとっさに思いついたことなんだけど、デュエル部には人が全然いないで活動をあまりしていないから誘うチャンスなんだよな。

「カズマ君はデュエルは好きだよね！　じゃあデュエル部に入ってよ！」
「っ！？　デュエル部！？」

ちょっといきなりだったからポカッと穴が開いたように大きく口を開けているけど、私がニコっとうなずいたら急に顔を赤くして悩んでいるみたい。

「じゃあ決まったら放課後にデュエル部の部室に来てよ！　待ってるから！！」
「……ドキっ！」

私は風で揺れる後ろ髪をカズマ君に向けて手を振りながら学校の屋上からゆっくりと消え去るように立ち去った。
卑怯だけど女ってことを無理やり利用した作戦を使ってこれでまずは部員1人ゲットだな！

第１１話　『ガスタとドラグニティ』（後書き）

裏話

主人公のデッキはＸセイバーではなくガスタにするはずだった
けれどもごらんの有様で作者はガスタの効果は一切知らなかったので諦めるはめに
まだそれを根に持っていたので女に戻ったときに使うという設定になりました

第１２話　『部活再開？』

時計に午後の９時と長い針金で指された時間、薄暗い体育館の道具置き場にに２人の少女がお互いに向かいあっていた。
１人は羞恥心が湧き上がっているあまりに顔を赤くしている。
何故か冷たい地面に裸足で白いパンツと胸を隠す下着１枚の姿を隠しながら左手と右手を使い多い隠している。

『ホラホラ。全てを私に晒しちゃいなよ』

もう１人の女性は下から上へと体全身を舐め尽すような触り方をしながら下着姿の女性を責め続ける。

『やっ…』

触られると敏感になっている体に釣られて声も反応してしまう。

『私ね。あなたのことが好きだったの』

女性同士の行為が禁断なことだとわかっているからこそ余計に死ぬほど恥ずかしいことだと実感させられる。

『っ？』

思ぬ行動を取られてその女性は驚いた。
徐々に手の道筋が顔へと近づいた時、いきなり女の子同士でキスをされてしまったのだ。

『あなたのキスの味…。とてもおいしいわ』

舌を入れられ口の中を犯されたことにより、２人の涎は結晶となったかのようにくっついて出てきた。

『だめぇえええ。私達女の子なのよ…』

『もう１回チューしようよ…』

もう１度２人は口と口をくっ付けながらクチャクチャ音を立てながら激しい行為をする。

女心がまだ残っている女性は懸命にキスを阻止しようとしても、この逃げずらい雰囲気に圧迫されてうまく実行することはできない。

「ブッーーーー」

「うわっ！　奈々川きったねー！」

私はデュエル部の部室でのんびりとペットボトルのお茶を飲んでいたのでこのアダルトビデオの展開に思わず吹きだしてしまった。

噴出したお茶を見て隣に座っていた宮城はその姿を見て私のことを見ながら大うけしている。

この内容は女性の私にとってはキツイものなんだぞ！

それと私、奈々川ナナは男として奈々川ユウタとして生活している為に、今現在進行形で神崎ミカと付き合っている。

どうしてもこのビデオの内容と照らし合わせてしまうんだよな…。

変なこと想像しちゃう…。

「つぅか。奈々川の趣味のレズものっておもしれぇなこれ。これとジンジャエールだけでいくらでもおつまみいけんな」

目が悪くなるくらいの距離でお菓子の袋を片手にテレビの前を占領しながらリーゼントの男は感想を言った。

ここの部活のエースの中里カイ。通称カイザーと呼べといわれている男は股間部分を掻きながら大声で叫んでいる。

本来ならデュエル部の部活といえば大会に向けてデッキ調整だとかデュエルの練習とかするはずだっていうことはわかっている。

今はいないがガチホモの堀内先輩、女好きな先輩変態カイザー、ビビリな私と同じ同級生の宮城と、ここのことを何も知らない私あわせて４人だ。

人数は十分いるからビデオを見るほど部室は暇ではないから部活できると思うんだけどなぁ…。

でも、部活動の練習は一切やらないといえども本当にここのデュエルは一流だった。

エースであるカイザー、高校デュエル大会で４位の堀内先輩がいることからここのデュエルの腕はそうとうガチだそうだ。

今年の夏休みごろから冬に掛けて行われて開催されるデュエリストである高校生の中でも憧れる大会、通称デュエル甲子園が行われる。

デュエルキングになる目標の私はもちろんこの大会に参加して、上位になることで年に数回行われるデュエルキングを決める大会に出場すること。

そのためにはまずはデュエル甲子園に勝ち進まなければならない。勝ち進むためには個人戦だけではなくチーム戦もあるからこのデュエル部で頑張らないといけないはずなのに…。

「暇だなぁ…」

ビデオを見尽くしたあとにカイザーはダルそうに耳を掻きながらつぶやく。暇だったら活動しろよと私は言いたい。

「そういえば僕が新しい部員を誘ってきたんだよ。そろそろ来るんじゃないかな？」

今日、私は久しぶりに女の子の格好をしてある人をこの部活に誘ったんだ。人が来ると聞いたちょっとだけカイザーは嬉しそうだ。

「おいおい。ついに女の子が来るんじゃねぇか！」

「違うよ」

「んだよ…。何度も女じゃねぇならいらねぇって言ってんだろ！」

女じゃないとわかった途端に嬉しそうな感情がつまらなそうな感情に変わった。

ここに来る予定のカズマ君は弱虫だけどちょっとだけ気になっている。…。いや好きとかそういう意味じゃなくて…。

私はそのカズマ君がそろそろ来るかなぁ…と期待を胸にしながら。

トントンと扉が叩かれて誰かがやってくる。うわさをしてきて出てきたのはやはり本人だった。

「この部活に入りたいんですけど…」

カズマ君はここのデュエルをやる部活だとは思えないほどゴミであふれた空間に少々怯えつつもここにやってきた。

「お前か…。てめぇも弱そうな顔してんなーー」

「……」

「そんな怯えなんなよ。部活入りたいならこれに書け」

カイザーはこの空気になじめないカズマ君にガンを飛ばしながら喧嘩腰で挑発しつつも先輩らしく入部希望の紙を渡す。

その姿に多少ビビリながらもキョロキョロしながら何かをカズマ君は何かを探している。

「あれ？　ナナちゃんは？」

ペンを持ちながら私の本物の下の名前を口にしてくれる。私を探してくれてたんだ。

もうしわけないけどここにナナはいないんだ…。私は男装しちゃってるからナナであるってことをうまく伝えることはできない。

「ナナちゃんって誰だよ！　糞ヤロー」

ゲンコツのポーズをしながら女の名前を聞いたからって力を溜めて怒っているような顔をしているカイザー。

「だから…ナナちゃんって言うのは誰だ！！　そいつはお前と出来

てる奴のことか！！」
「…。違いますよ…。ナナちゃんに部活を誘われたからここに来たのに…」
私のことを見つけられなかったカズマ君は寂しそうにカイザーに説明をする。
「ハハハ…。こいつ馬鹿だろ！　ここの部活に女なんていねぇよ！つぅかいたら今ごろ俺様とエッチしてるっつぅーの！」
女の子をまるでエッチな目で見るカイザーに私はドン引きしている。
「ってかここに女みたいな奴ならいるけどな！」
女みたいな奴がいるといってカイザーが指を指したのは私。
なるほど…。みたいな納得した感じで私のことをカズマ君はじっと見ている…。何か不味い予感を私は体が予知した。
「ナナちゃん？…」
見つけたと訴えるかのような顔で私のことを見つめるカズマ君。もしかして気づかれた？
「僕はナナじゃないよ？」
「あれ…」
危険と焦りを感じた私は懸命に首を振って自分はナナではないとアピールする。
それでも女の子の格好をした時と今の姿では声とか身長がほとん

ど同じだからバレバレだったのかもしれない。
「おかしいな…。でも。顔が似てるよ」
「それは気のせいじゃないかな…？」
ジロジロと私の全身を上から下までカイザーとカズマ君は露骨に眺めている。
この行為はまるで私を性的な意味で見てるとしか思えない。
「あ…。あの僕は…」
破れるかのように心臓バクバクな私は声を震わせて言った。
「確か一日中一人ぼっちでボーっとしているカズマだよね？　ホラ、俺とクラス同じ一緒じゃん。こいつは奈々川ユウタだよ。忘れたのか？」
「うーーん…」
ナイスだ！　宮城…！
宮城が話しの流通を変えてくれたおかげで私は心の中でホッとため息をつくことができた。
カズマ君はおかしいなと思い立ったのかあいまいになったような顔になって私がナナである疑惑がなくなったと感じる。
「奈々川とナナちゃんって子を見分けるのはありえねぇだろ！　どんだけお前の目は老眼なんだ？　ハハッハ」
１人で大爆笑をしているカイザー。身長が軽く１９０を超えているから低い不良の笑い声が不気味で怖い…。

「そういえばナナは僕の幼馴染なんだよ…」
話題をとっさに思いついた適当な嘘を言ってここを何とか誤魔化そうとする。
それなのに…。
「でも…。ナナちゃんって子に俺様は会ってみたいぜ」
「俺も会ってみたい！　ここのナナちゃんはここの部活に入ってないのにお前に誘われたんだろ？　天使なんだろうなぁ…」
「要するに俺様がカッコいいからナナちゃんはファンなんだろ」
「…（そんなわけないだろ…」
「てめぇ…。今、何か言ったか？　ぶっ殺すぞ！」
「何も言ってないです…」
ナナという名はこの学校にいない架空の人物なのに何かすごい盛り上がっている…。私…。どうすればいいのよ…。
「おい！　新入り！　そのナナちゃんって子を連れて来いよ！」
「え？…。オレは今どこにいるのか知らないんですけど…」
「つかえねーなー。ようやくここの部活に花が咲きそうだっていうのによぉ！」
今度はナナに会いたいという話に変化している…。そのみんなが求めているナナは目の前にいるっていうのに…。
「奈々川？　幼馴染ならナナちゃんの連絡先くらい知ってるだろ！
ここに連れて来いよ」
「今…僕とナナは仲が悪いんだよ…。最近喧嘩しちゃってさ」
今思いついた理由でみんなを諦めさせる為に偽ってもこれが嘘だ

っていうことがすぐにバレバレのようで…。

「奈々川よぉ！　お前はここで部活をやりたいって言ってたよなぁ…！」

私の弱みを握って何としてでもナナをここに連れて来いと何度も言い聞かせる。

ハアハアと声を漏らしながらニヤニヤしているのか怒っているのかわからない顔が気持ち悪い…。

「もしナナちゃんを連れてきてくれたら活動を再開してやんよ」

ここで受け止めなければせっかくカズマ君が部活に入ってくれたのに部活をやらないって言ったら部活を止めちゃうかもしれない…。

しょうがないけどここは我慢が必要だ…。素直になって命令通りに私は再びナナになるしかない。

「わかったよ…」

嫌だけど部活を続けるためだ…。返事1つを返してうん、とうなずいた…。

◆◆◆

「エへへへへ」

カイザーとの約束のために私はナナにもう1度戻るためすぐに着替えをした。
私は女子トイレの鏡に映されている女子高生になった自分の姿を見ながら、どれが一番可愛く見える角度は何かを堪能する。

「やっぱり似合う。可愛いーーー」

女を捨てるために自分の胸を潰していたサラシも外したからキツキツってこともない。この姿がやっぱりいいわー。

「この制服を着て男の子と青春したかったなー…」

恋愛してみたいとか考えちゃ駄目だ駄目だ。
お兄ちゃんがかなえられなかった夢のデュエルキングになるために女の子ではないって決めたんだ。
女はデュエルキングにはなれないから高校も男装して男の子になった。だからバレてしまったら絶対にデュエルキングなんかになれない。
と決意したものの…。やっぱり女の子としての未練が残っている…。女の子になれるのはおそらく今日だけだからしっかりと満喫しないとな。

「はいはいはいはい。可愛い。可愛い」
「うわーーーーーーー」

自分の制服姿を見ていたら鏡からは別の女性が写っていた。
それは私の知り合いでもある人物。しかも悲惨なことに今私が着ている制服を盗んだ女の子なんだ…。

「神崎ミカ！！　いつからそこにいたんだよ！」
「この制服を着て男の子と青春したかったなー。辺りからすでにいたわよ」
「あああああああ！！」

見られたくない姿を神崎さんに見られてしまって顔から火が出るくらいに恥ずかしかった。
この子は私が女物の下着をはいている所を見られて以来、私に女装癖があると思い込んでいる。

「やっぱりあなたは正真正銘の変態だったみたいのようね」
「これは違うんだ…。これには訳があって…」

さっきまでカイザー達と騙していたのとレベルが明らかに違う。
何で神崎さんの制服を着ているのか騙しきれるはずもない。

「私の制服がないと思ったらあんたが盗んでいたなんて…。おかげでずっとジャージ姿だったのよ」
「勝手に借りてしまってすみません…」

ペコッと頭を下げて謝るのは何て惨めなんだ…。このくらい謝らない限り誤解を解けてはもらえそうにない。

「神崎さん！　お願いがあるんだ！！」
「何よ！」

デュエル部の活動開始の誓いのためにもこれは必要なんだ…。無茶だと返事が帰ってくるかもしれないけど私は諦めない。

「この制服を今日だけ貸してくれないか？　頼む…。一生のお願いだ…」

なんということを頼んでいるのよ私…。こんなのオッケーするはずないだろ…。そんな思いとは反対に神崎さんの答えはすぐに返ってきた。

「何に使うのかしらないけどあんたの為なら別にいいわよ…。あなたが必要としているなら貸してあげるわ」

私のことが好きな神崎さんは顔を恥ずかしい感情の色に変えて素直にあっさり貸してくれた。やっぱり神崎さんと付き合って正解だったかもね。

「ありがとう…」

「だけど私とあなたは付き合っているってことを忘れないでね…。それを使っていやらしいことするんでしょ！」

「誤解だ！　変なことはしない…！。必ず返すから…」

「変なことはしないねぇ…それで何をするつもりなのかしら。あとでいくらでも私の女の魅力であんたの歪んだ性欲を元に戻してあげるっていうのに！」

「だから誤解だ！」

「それにしてもあんたって本当に女の子みたいねーー…」

神崎さんは私が女装好きな変態と錯覚されているけどこれで再びナナになれたな…。

元々肌の色とか微妙な身長のおかげで女の子が幸いにして女の子

みたいで可愛いとか言われているから神崎さんにはバレてはいないようだ。
さあ…。デュエル部に戻るぞ！！

◆◆◆

「ん？」
「君がナナさんなのか？」

私が再び女子の制服を着てこの男臭いデュエル部にやってきた。
みんなは私がここにやってくるっていうのをずっと待ってましたと言わんばかりにいっせいに観察している。
とくに私が来た途端カイザーの強張ったニヤニヤして崩れている頬はすぐにわかった。
カズマ君を騙すのに成功した時のようにみんな鈍感なのか私が女装してもユウタだっていうことはわかってない。

「あれ？　奈々川は？」
「急に用事思い出したみたいで私に一言声掛けて帰ったみたいだわ」
宮城が疑わしく思ってたことをナナとユウタは幼馴染の設定らしく適当にとっさに言い訳を作って言った。

「あいつは別にどうでもいいんだよ！　それより君に会いたくてさ」
カイザーが口にしたどうでもいいってことは何よ…。何で男の私より女の私のほうが優しいのよ。
それに嫌なことを思い出したけど、私が男装してたときに部活に入ろうとしたときはいきなり腹パンした癖にさ…。
「自己紹介を忘れていました…。は、始めまして。中里カイっていいます」
「……」
ユウタとして接しているときとは大違いに声を優しそうに変えてフレンドリーに接してくる。
「カズマを部活に誘ったってことはナナさんも入るんですよね」
私がこのまま入部するのかと思ったのかカイザーはペンと入部の紙を疾風のごとく一瞬にして持ってきて私に渡してきた。
「ごめんなさい…。私はここの部活に入る予定はないわ」
「何でですか？　だったらなぜナナさんはここに来たのですか？」
「幼馴染が話ししてた通りにデュエル部は活動があまり活発じゃいみたいだから何をしているのか見に来たのよ」
ナナは今日しか現れない…。だからナナのほうはここの部活には入れないんだ…。ごめんなさい…。
でも心配はいらないよ…。私は奈々川ユウタとして元気にデュエル部に入っているから…。
「聞きたいことがあるんですけど、君とユウタはどういう関係なん

ですっ？」

次はナナとユウタの関係の話…？

私がユウタだっていうことをバレない為にもまた付きたくもない嘘を付かなければいけないのか…。

「ユウタはとても優しい人だよ」

「ほう…」

「デュエルがとても強いし、モテモテだし、優しくてとてもダンディなのよ」

「うんうん」

「ユウタはデュエルキングになりたいって言った…。だからもっともっと強くなる…。じゃなくてなってやるって言ってたわ」

って…。私ったら…何言ってるのよ…？

これって一目瞭然に自分を自分で褒めて自慢しているだけじゃない…。最後何か噛みまくってナナが決意した台詞になっちゃってるし…。

「そうか。そうか」

納得したのかしてないのか知らないが、女の私が言ったからって話を最後まで聞いてくれたんだね。いつもは怒鳴るくせに…。

「それじゃあ約束通りにユウタが悩んでいたデュエル部の活動を開始してくれますよね」

「もちろん！」

やったー。これで悩みの1つだったのが解消された。これならデュエルの腕を強化することができる！

「ここの部活は超強いってことを最初に言っておきましょう。どんな学校にも負けるはずがありません」

やっとカイザーは先輩らしく振舞って私達1年生を安心させた。

「ぼくたちは必ず全国大会を制覇してみせます。だからナナさんは安心してください。ぼくの教えで絶対にデュエルキングのレベルになると思いますよ」

いきなり何よ…。やる気なかった癖にいきなりやる気出し始めちゃって…。

でもデュエル部の情熱は本気のようみたいだな。やはり自称カイザーと名乗るだけあって言葉の発言力も中々。

「カイザー…。ユウタをお願いよ…。必ずデュエル部で全国を制覇してよ。約束だよ」

「カイザー……？　何で先輩のそのあだ名を知っているんだ？」

「じゃなくてカイ君…。だよね…？」

「うぉおおおおおおおお。やっぱりナナさんはぼくに出会う前からあだ名を知っていたんですね。感激です！」

女の子に対してだけ敬語で話すなんてこんなのカイザーじゃない…。

今まで私が見てきたカイザーは人を思いっ切り暴力を振るったり汚い言葉を連発する男だったのに…。何で別人になっちゃったのよ。

「あともう1つナナさんにお話があるんですが…」

「何！？」

もう1つ別の話…？
何故か内容は聞いてもないのにカイザーの薄気味な目つきから、体が反射的に反応して嫌な予感がしたのか身震いした。

「正直に言いましょう」
「えっ？」

急に私の手を握ってきた…。身長が大きい不良は伊達じゃなく手のひらのサイズは私の手を隠すくらいに大きい。一体何よ…。

「君はぼくのすごい好みです。エンジェルみたいな君の笑顔がぼくの恋のハートを打ち抜かれました」

「ブーー。カイザーが告白した！」
「…。ナナちゃん…？」

いきなり告白…？　宮城とカズマ君はあまりの衝撃的な出来事に漠然としている。
私はカイザーのことは好きじゃないのに…。しかもいきなりだよ…。出合ってから数分の人に告白されたのよ。

「さっそくですけど妊娠してください」

「やっぱり死ねっ！！！」
「ギャーーーーーーーーっ」

女子が一番言われたくない台詞に反応して自分のフルパワー全快でカイザーの急所を蹴り上げた。
そのままカイザーは想像も付かない痛さに意識を失って泡を吹いて倒れてしまった。やっぱり男の人って変態ばっかりで嫌いだ…。

「女って怖いなぁ…」

第１２話　『部活再開？』（後書き）

これで一章終了ですね
次回からはデュエル部が大会に出るお話になります
その前に番外辺をやっておしまいです。お楽しみに！

あと１話と２話を変更するって予告してたけど結局変えなかったね
これはいつかやりますのでそれはまた報告します。ノシ

番外編～『Ｎｏ．７　ラッキー・ストライプ』（前書き）

時は前にさかのぼって
この番外編は何故か妙に閲覧数が多い６話の続きとなります。

番外編～『Ｎｏ．７　ラッキー・ストライプ』

――デュエリストである以上皆はカードを大切に扱う。では、カード１枚１枚ってなんだろうか？

――この世の中にはカードには精霊が宿っているとか、闇のカードと呼ばれる特別な力を持ったカードが存在すると言う学者が存在する。

――うわさ話になるが過去の事件に、闇のカードの使用者は死者や重症患者などといったこと最悪なことが起きるとか…。

私、奈々川ナナは私のことを男として好きになってくれた神崎ミカと同居することになった。

これから新しい人生が始まるわけだが、実際には異性を騙しているわけだから悪いことをしていると自覚している。

けれどもここまで来ちゃったから今更、後戻りはできない。これも私がデュエルキングになるための通過点なのだから。

「うわー。それにしても神埼さんの家ってすごいなーーー。これって全部レアカードでしょ！」

「そんなの自慢するものではないよ。これ全てプロリーグで貰ったものだし」

「こんなカード見たことないよー」

目の視覚に入りきらないほどに神崎さんの家のリビングにはおしゃれとして置物ショーケースのガラス一面に張られている。
一般人には手を出せない氷結界のシンクロシリーズである『ブリューナク』、『トリシューラ』の高額カードを見て私は目を輝かせた。
それに世界に数枚しかないと言われている『破壊王ゼクセクス』『魔導神のオブジェ』『運命の女王エターニア』がずらりと並ぶ……。
直に感想を言うと、デュエリストの憧れでもあるこれらのマッチキルモンスターの存在を見た私は、改めて生きてて良かったと考えさせられるほど感動的だった。
さすがプロデュエリストの金銭感覚はすごいと褒めるべきか…。一緒に住む予定である神崎さんは凄い人物だったんだなと実感する。
今の私と比べて、ただの学生だある私と付き合うって少々勿体ないんじゃないとマイナスイメージを考えてしまうけど、本人はこれで満足してるからいいのか？……

「何だこのカード…。ナン…バーズ？」
ショーケースの中身を順番に目で追っていき、私は1枚だけ浮いているあるカードを見つけるとそれに見惚れてしまっていた。
「ああ…。それね」
「このカードは何？」
このカードはエクシーズモンスターなのだが他のエクシーズモンスターとは何かが違う気がする。
オーラのような強烈な威圧感がたかがカードのはずなのにに私は

何かを感じ取っていた。人間とは言わないが、生命が生きているような感覚だ…。

「欲しいならあげるよ」
「いいのか？」
「別に構わないわよ」
「でもこれって高いんじゃないのか…？」

これも他のカードと同じように値段が高そうに見えるのだが…。私のことが大好きな神崎さんはお構いなしに返事を返してくれた。
話を聞いてみると、近頃にこのカードを誰かが発見して美術館に置かれるはずだったらしいが、神崎さんは見入ったのでお金で譲りうけたらしい。
そんな気軽に買えるもんじゃないはずなのに…。それを私に返事1つで渡すなんて…。別に私は欲しいとは言ってないのにね。

「あんたこのカードを使ってデッキを作りなさいよ！」
「はぁ？」

意味がわからない…。勝手に私にカードを渡してそれでデッキを作れとか…。
…と、思ったけれども、どうやらそれを神崎さんが私にくれたのは理由があるらしい。

「このカードはね。持ち主に運命をもたらすものなんだって」
「！？」
「私は信じていないんだけど今までこのカードを持ったものは突然大金持ちになったりトップスターになったってさ」
「そんなうまい話あるわけないだろ…」

運命をもたらす…？　大金持ち…？　宝くじが当たったときのように想像してみるけどありえない話に私はもちろん信じていない。
たかがカードにこんな漫画みたいな夢のような話が起こるわけないだろ…。

「じゃあ神崎さんはこのカードを使ってプロデュエリストになったのかい？」

話の流れに似たことを軽く冗談交じりで神崎さんはこのカードとの関連性があるか聞いてみた。

「私は自分で未来を切り抜けたから別にこんなカードなくたってプロをやっていけるわよ」

答えはとてもあっさりしたものだった…。
じゃあ何でこのカードを私にくれたのか…。それには訳はあるようで、

「あなたはデュエルキングになるんでしょ」

私の夢のため…？

「このカードの力を試したいじゃん。もしこのカードがうわさ通りならすごいものでしょ！」
「うーーん…」

絶対にデュエルキングにならないといけない運命の私に取っては考えられる内容だ…。
自力で這い上がらなければならないから…。このカードの力に頼っては駄目だとわかっているのにどうしてもうまい話に乗せられ

てしまう。
それにこのカードのことを信じてないはずだったのにね。この後、私はナンバーズ7の力が本当であることを思い知る羽目となる。

◆◆◆

「『No.7　ラッキー・ストライプ』かぁ…」

私は娯楽である風呂から上がった後、すぐに寝室着に着替えて神崎さんが私にくれた部屋に駆け寄ってさっきからずっと何かを考えていた。
ベットの上でナンバーズと書かれたカードを広げて、マシュマロンのぬいぐるみに抱きつきながらこのナンバーズを生かせるデッキ構築を考える。
サイコロ振って出た目によって効果が変わる？　不確定要素だから凄く使いにくいんですけど…。でも貰ったものだし何とか使えないのかなぁ…。
「でもどうせならこうする構築もありか…。フフフ…」
このカードを使う方法を思いつかなかった私はネタとしてあえてギャンブルカードを多めにする構築にしてみた。

デッキコンセプトは滅茶苦茶でシナジーはないけれども回ったら面白いだろうなと期待しながら…。

「どう？　あんたは随分楽しそうに見えるけど」
「ちょっ！　勝手に僕の部屋に入ってくるなよ！」

1人の時間を楽しもうと思ったら神崎さんが進入してきた。
今は着替えをしてなかったから良かったものの、もし下着姿で私がいたら大変なことになってた。
女だってことがバレてしまっては困るから勝手に入ってくるのは怖いよ…。

「私があげたそのカードでデッキ作ったんでしょ」
「そうだけど…」
「なんか自信なさそうわね」
「このカードはとても強そうに見えないからどうすればいいのか考えているんだよ」

そのデッキは出来たんだけど回るはずもないよ。
あくまで遊び用のデッキなんだけど、神崎さんはそのデッキに妙に気になっているらしくて…。

「だったらデッキ調整のためにデュエルしようよ！」
「でもぉ…」

再びプロデュエリストの神埼ミカとのデュエル。
一度は負けたとはいえ、リベンジを果たしたいって精神はある…。
けれどもこのデッキで勝てるのか…？

「じゃあサイコロを振って先行を決めるね！」

おいおい…。返事をする前に勝手に始めるなよ…。しかもサイコロの目は5…？

「早くあんたもサイコロを振りなさいよ」

私に選択肢はないのか…。

まあいい…。デュエル大好きな私はもちろんやりたいので、神崎さんから借りたサイコロをゆっくりと転がす。

先行が欲しい私。神崎さんが出した5より大きい目はそう簡単には出ないと感得していたのだが…。

「6…。なかなかやるじゃない」

出た目は6…？　偶々だったとはいえ、ラッキーだ。これで先行は私が貰った！

私達2人はベッドの上にデュエルが出来るスペースを作って、お互いに向き合いながら始め出した。

「僕のターン」

新しく作ったデッキとはいえ、プロ相手にどうやって責めればいいのかわからない。

カードに視野を入れてから考えた結果、こうやってターンを終えることにした。

「僕はモンスターをセットしてターンエンドをするよ」
とりあえずはこれで様子見だよ。

「私のターン。ドローまずは『ライトロード・パラディン　ジェイン』を通常召喚！」
フィールドに現れるのは全身を白い鎧で固めた美男男性。
プロデュエリストの神埼さんが使うカードらしく優秀な効果を持っているエリートモンスターか…。
「バトルフェイズに移行よ！　『ジェイン』でそのセットモンスターを蹴散らしてやりなさい！」
『ジェイン』が武装している剣が突如輝きだしてパワーアップする。ダメージステップ時に攻撃力を３００ポイント上げる効果だな…。
そしてその攻撃を通した私はそのセットモンスターをオープンさせる。

「セットしてあったカードは『ダイス・ポット』！」
「だ、『ダイスポット』って…？」
「このカードはね。リバースに成功した時、お互いにサイコロを１回ずつ振って相手より小さい目が出たプレイヤーは、相手の出た目×５００ポイントのダメージを受けるんだ」

「そんな運カードをデッキに入れているなんてあんたらしくないわね…。まあ構わないわ。相手してあげるわよ」

プロの神埼さんは常にガチカードのことばかり考えているだろうから、『ダイスポット』のことなんて読めなかっただろう。

このカードによりこれからカードゲームではなくサイコロで勝負を始めることになる。

神埼さんはまず最初に先攻後攻を決めたあのサイコロを拾って決闘場になっているベットの上で転がした。結果は…。

「うーーん…。４が出たんだけど喜ぶかどうかは微妙な数字ね…。まあいいわ。次はあんたの番よ」

中間ら辺の数で神崎さんはこのままサイコロで勝つことができると妥協しているらしい。

まあ一般人なら一度先行をゲットした私が６が出たから次は出ないという考えなのが平凡なのよね…。

私は希望を胸にし、サイコロを手のひらに乗っけて、ゆっくりと坂を転がす感覚でサイコロを転がした。

「なんで…？なんで６なのよ…」

結果はごらんの有様だった。私のダイスが表しているのは紛れもなく６だよ。

「６の目が出た場合に勝利した場合、相手プレイヤーに６０００ポイントのダメージを与える…」

ミカ　ＬＰ４０００→０

再び６の目が出たことによって『ダイス・ポット』による理不尽なワンターンキルが成立した。

２回も６が出るってことは３６分の１…。すなわち約３パーセントってことだからそこまで高くはないはずだろう。

運を味方にしてくれると聞かされた『ラッキー・ストライプ』の力がもたらしてくれたのか…。

「これがナンバーズ７の力ってことなのかなー…」

「ムカァー…。偶然でしょ！　そんなインチキなんてあるわけないよ」

さっきまで神崎さんは私に渡したカードの説明をしてくれたのに、私がこれのカードのおかげと言った途端にチート扱いですか、そうですか。

でもこれは偶然な出来事ではないような気がする…。私がサイコロを振った途端に次の出てくる目の未来が脳裏から見えたもの。

これがナンバーズ７の力…？

◆◆◆

私はナンバーズを貰った日から人生は１８０度変わったかのように、自分の人生に追い風が乗っかったかのように全てがうまくいった。
自分が気になる男の子と隣の席になるクラス分け、電車に乗っている時も常に私のためにわざわざ空けてくれるなどといったどうでもいいことから、
大金のお金を拾ったのでそれを警察に届けたら3割をくれたこと、宝くじを適当に買ってみたら大当たりが出て大もうけしたこともあったりした。
そしてデュエル部の全国大会も私が全勝無敗の成績のおかげでデュエル甲子園も制覇したのだ。
その成績が認められたのか、すぐに優勝してから私はデュエルキングを決める大会に招待されることになる。
今まで通りに私は『Ｎｏ．７　ラッキー・ストライプ』を駆使して勝負に勝ち進んでいった。このまま行けば夢まで後一歩のところまで私は来ている。

「「期待の新人奈々川選手の登場だ！　果たして完全無敗の王者となることはできるのか！！」」

珍しいもの見たさに皆は私のほうに声援を大きく浴びせていく。
この緊迫したムードとこの広いスタジアムにはもう慣れたよ。私がこんなところで負けるなんて絶対にありえない！

「「先行と後攻は私が持っているコイントスで決められる。このコイントスで決まる先行のアドバンテージは大きいぞ！！」」

こんなところでも不合理な運か…。でもね。私の持つナンバーズ

の力の前では運命なんて無力に等しいものなんだよ。

「宣言してあげましょう。このコイントスは必ず裏が出るってね」

私がコイントスの結末を予言すると観客は小さい虫のようにざわめき始めて対戦相手の選手も度肝を抜いている。

屑みたいな一般人の考えじゃ無茶はないか。私みたいな超エリートが人生の勝ち組の姿を特とご覧なさい。

「「果たして運命はどちらに微笑むのだろうか！」」

コインを天に向かってはじくと宙を舞って回転していくのを審判が空中でキャッチしていく。

このコインの結末は審判が手を開くまで私を除く人間では誰にもわからないだろう。

「「宣言通りに奈々川選手。先行か後攻をお選びください」」

「僕は後攻を選ぶとするよ」

対戦相手の選手を大きく見くびながら、私は怒りの感情を与えるためにわざわざ刺激をするためにファンサービスをしてあげたんだよ。

こうやって楽勝に勝てる相手にあえてファンサービスを振舞ってあげるんだから、面白いプレイをしてくれなきゃ困る。

ナナ
ＬＰ：４０００
手札：５枚→６

場　：モンスター
　　なし
　　魔法・罠
　　なし

対戦相手
ＬＰ：４０００
手札：３枚
場　：モンスター
　　剣闘獣ラクエル
　　魔法・罠
　　伏せ２枚

決勝戦の相手は２伏せと攻撃力が高いモンスターを立てて私にプレッシャーを与えるプレイングか…。
まずまずと言ったところだけど所詮はその程度？　全くもってエンターテイメントになってないな。

「僕のターン。ドロー。まずは手札から『サイコロン』を発動といきますか。このカードはサイコロを振って１以外の数字が出たときに相手の伏せカードを破壊することができる」

みんなはこのカードのことを劣化『サイクロン』って批判しているけど、運命に選ばれている私が使うとこのカードは違うのだよ。
このカードは破壊が不確定だから対象は取らない。つまり私の運命力を知る相手はこれに恐れたのかチェーンして『和睦の使者』を発動してきた。馬鹿め！

「結果はもちろん６だよ。６が出た時は魔法罠カードを２枚破壊す

る。僕は残りの2枚を選択して破壊するよ」

私が振ったサイコロごと飛ばす突風が『和睦の使者』と『剣闘獣の戦車』を巻き込んでいく。伏せカードは完璧だったらしいけど残念だったわね。

「僕はさらに『スナイプストーカー』を通常召喚。このカードの効果によって手札を捨てることによりサイコロを振ることができるんだ。1か6以外の数字が出たら相手の好きなカードを破壊することができる」

もう一度サイコロを振る。普通に使うにしろ3分の2の高い確率らしこんなことで外れるわけはない。そのまま処理によって『ラクエル』を破壊していく。

対戦相手と観客のみんなは私の華麗なるサイコロ裁きに見惚れているけどまだ終わらないよ。まだ私の運命は揺るがない！

「そして『モンスター・スロット』。僕のモンスター『スナイプストーカー』とさっき墓地に送った『ルーレットボマー』を選択して発動」

このカードは選んだ場のモンスターと同じ墓地のモンスターを除外することで発動できるカード。

その後、私は自分のデッキからカードを1枚ドローすることになるがそれが選択したモンスターと同じだった場合、それを特殊召喚する効果があるんだ。

カード効果の演出によりスロットマシーンに似た機械が現れてリールが回転されていく。

私がストップボタンを押していくことになるが結果はもうわかっているよ。3つのリールが止まってそろったのは全てレベル4のモ

ンスター。

「もちろん効果は必ず当たるんだよ『伝説の賭博師』を守備表示で特殊召喚する」

西部劇のような帽子を被ったナイスガイギャンブラーが出現する…。まるで私のような天才イケメンギャンブラーで美しい…。

レジェンドギャンブラーもコイントスを3回行ってその結果により効果が変わる効果があるんだ。

「表、表、裏か…。わざわざこの結果を出すようにしたんだ。この効果により相手の手札をランダムに1枚捨てる！」

これで相手のカードはギャンブルカード達のおかげでこのターンだけで大量に吹っ飛んだ。

みんな狂ったように安定性がなければ弱いと述べているけど私はそうは思わない。このナンバーズがある限り…！

『和睦の使者』を発動されたことによってこのターンは攻撃しても意味はない。わざとサービスしてやったんだ。次の君のデュエルを見届けてあげよう。

対戦相手は崩壊されたフィールドと3枚になった手札のカードで展開を作ろうと長い思考を取ってる。

いろいろと次の展開考えたのかまずは『剣闘獣ホプロムス』を通常召喚して次に『スレイプタイガー』を特殊召喚した。

『スレイプタイガー』をリリースしてその効果によって『ホプロムス』をデッキに戻し、『剣闘獣ダリウス』を特殊召喚させる。

その特殊召喚された『ダリウス』が剣闘獣の効果で特殊召喚された扱いになっているらしく効果により私が墓地に送った『剣闘獣ベストロウリィ』を特殊召喚させた。
そして『ベストロウリィ』と『ダリウス』はシンクロ召喚やエクシーズ召喚と一律した召喚扱いらしく2体のモンスターが変化して何かが生まれる。
現れたのは『剣闘獣ガイザレス』。剣闘獣はデッキのモンスターがデッキに戻ったりしまくるからずるいな…。

「すごいよぉ。モンスターを融合を使わずに融合召喚をするなんて君はなんてデュエリストなんだ。おーぅ、このままじゃー」

私は棒読みであざとらしく台詞を言って決勝戦の癖に対戦相手をいまさら感でたくさん褒めまくった。
対戦相手はそんな私を無視して『ガイザレス』の効果で伏せてあった『賭博師』と『スナイプストーカー』が破壊されてしまう。
バトルフェイズに入られ、私がモロにダイレクトアタックを受けたことによって『ガイザレス』の攻撃後の効果を使用させられてしまうこととなってしまった。
効果によって『ダリウス』と『エクイテ』に変形して『ダリウス』の効果で『ラクエル』を蘇生、『エクイテ』の効果で『剣闘獣の戦車』を破壊する処理を行っていく。
そして…。『ムルミロ』『ダリウス』『ラクエル』も3体いることによって融合できるカードが存在する…。融合して出てきたのは『剣闘獣ヘラクレイノス』！
『エクイテ』の効果によって手札に加えた『戦車』のカードをセットして相手はターンを終えた。

ナナ

ＬＰ：１６００
手札：２枚→３
場　：モンスター
　　なし
　　魔法・罠
　　なし

対戦相手
ＬＰ：４０００
手札：１枚
場　：モンスター
　　剣闘獣ヘラクレイノス
　　魔法・罠
　　伏せ１枚（剣闘獣の戦車）

「そろそろ受けてもらおうか僕のファンサービスを！　僕のターン。『時の魔術師』を召喚！」

可愛い時計の形をしたモンスターはもちろん『剣闘獣の戦車』に弾かれてしまったよ…。でもこれでいい…。

「やりますねー。ではこれはどうでしょう『死者蘇生』！！」

これも『ヘラクレイノス』の手札を１枚捨てる効果によって無効にされちゃったよ。

でもこれで相手の手札を全て使いきることができたからその効果はもう使えなくなっちゃったねー。

「ブラフは全て成功しました。では『カップ・オブ・エース』の効果発動！　デッキからカードを２枚ドローします」

今までのは全てこのカードを発動されるための囮だといってもいい。

『カップ・オブ・エース』はコイントスをはずしたら相手が２枚もドローされることになるが、運命力がある私にとって禁止カードの『強欲な壷』な感覚であるんだよ。

「次に『名推理』！　発動！」

相手プレイヤーはモンスターのレベルを宣言してこれから特殊召喚ができるモンスターが出るまで私のデッキを捲ることになる。

これで相手が選択したレベルを言い当てることが出来たらこの特殊召喚を阻止できるが、はずした場合は私の場に捲ったモンスターを特殊召喚できる効果を持っている。

今までの私のモンスターの流れからして相手はレベル４のモンスターばかりだから次も４だろうと選択したが、そんな簡単な考えじゃこれは止められない！

「残念でしたね。はずしたことにより僕は『魅惑の女王　ＬＶ７』を特殊召喚！　さらに攻撃力１５００以下のモンスターが特殊召喚に成功したことにより『地獄の暴走召喚』で互いにモンスターを１体選んで可能な限りデッキ、手札、墓地から特殊召喚する」

周囲に浮かぶ火の球を浮かばせながらドレスをしている究極の女王が３体。

相手の『ヘラクレイノス』は融合モンスターのことだから『暴走召喚』の効果はうまく使うことはできないよ。

「僕は『魅惑の女王』３体でオーバーレイネットワークを構築！
エクシーズ召喚！」

女王３体が重なりあってソリッドビジョン中央に強大な黒い穴を作り出して、モンスターを特殊召喚するスペースを作り出す。
すると私の晒してある首元に７と書かれた数字が浮かんでいく。
これがナンバーズに支配している私の本当の姿だ！

「私に絶対的な幸運を舞い渡してくれる全知全能の神よ！　最強の力の前で全てを破壊しろ！　現れろ！『Ｎｏ．７　ラッキー・ストライプ』！」

巨大な胴部分が縞模様のモンスター。ステッキ部分には自分のナンバーである７を模した飾りが付いている。
対戦相手は召喚に３体も消費したのに攻撃力は７００かと馬鹿にしたような顔をしているからこれからそれを嘆きに変えてやるよ。

「君のデュエルはすばらしかったぁーー。デュエルのプレイングも戦略も！　だが全然、この僕を倒すには程遠いんだよねぇ！！『ラッキー・ストライプ』の効果！　エクシーズ素材を１つ取り除き、サイコロを２つ振ってその合計が７の場合に選べる効果がある！」

サイコロを振る。サイコロの目は２と５が出たよ。私が振るんだから絶対に出て欲しい目が出るようになっているんだから。
私の顔は、ナンバーズに支配されているから、綺麗な顔が乱れて恐ろしいことになっているはずだけどそんなのはどうでもいい。

「『ストライプ』の１つ目の効果！　このカード以外のフィールド上のカードを全て墓地に送る」

持っているステッキをポンポンと手品師のように振るうとマジシャンのようにして一瞬にして『ヘラクレイノス』を消し去った。

「『ストライブ』のエクシーズ素材を取り除いて再びサイコロを振る。そして7が出たことによってもう1つの効果でデッキからカードを3枚引いて2枚を捨てる」

もう1回振ったらもちろん合計は7。『天使の施し』と同様の効果を使って手札を交換していく。唯一それと違うところは私の手札が0枚だったから発動後に1枚増えたってことだ。

「そしてもう1度サイコロを振って7が出たときの効果！　手札または自分、相手の墓地からモンスター1体を特殊召喚できる！　僕は君の墓地の『ヘラクレイノス』のコントロールを得ることにしよう！」

相当うざいモンスターを今度は私が奪ってやった。手札が1枚ある私は魔法罠を封じることができる効果が使えるけど、このターンで決着が付くからもはや使う必要すらないか。

「これで終わりだ！『ラッキーストライブ』はサイコロを振って出た目が一番大きい数字×７００がこのカードの攻撃力になる」

私が最後に出した目は6だったことからこのカードの攻撃力はあの伝説でもある『オベリスクの巨神兵』などの神のカードにも匹敵する４２００だ。これで一撃で葬り去ることができる。

「お前には僕の運命を導く為の道しるべにしか過ぎない！　この僕の為のいけにえとなるがいい！　『ラッキーストライブ』！　ダイレクトアタックだ！」

フハハハハ。『ラッキーストライブ』の攻撃によって相手の４００のライフを消し去った。
これで私の勝ちだ！　私が勝利したことによってスタジアム中が壮大な大声援が私を襲いかかる。
これでデュエルキングになるという夢がかなえることができたぞ！　これが勝利者にのみ与えられる栄光…。そして名誉か…。
しかし随分と呆気なかったな。学生時代はもっと苦戦すると思ったが…。人生はヌルゲーだったんだな。
このナンバーズの前では運なんかまやかしにしか過ぎない。これからもずっと私にとって都合のいい出来事ばっかりが起きることだろう。

◆◆◆

「おーい。起きろー」
「！？」
おかしいなぁ…。私は突然あの後の記憶から飛んで…。
私はナンバーズ7をうまく使ってデュエルキングになったって言うのに何で目の前には神崎さんの姿が…？
そしてパジャマ姿の隙間からチョコチョコ見える神崎さんの胸の谷間が…ってあれ…？。
「あんた物凄い顔をしながら寝言言ってたけど大丈夫だった？　にやけながら笑ってたけど何の夢見てたの？」

「えぇえええええ。これって全部夢だったの？」

そりゃそうだよなーー…。カード1枚だけでそこまで人生が思うように進んでいくってのはありえないもんなー…。

「何がなんばーずナナの実力よ」

「これは誤解だ…」

ってか…。あの1人ごとを全部聞かれたっていうの……。あの変な思いついて連発してた台詞まで…。

ナンバーズナナって完璧に私の名前を捩ったカードじゃん…。恥ずかしい……。

「寝顔が女の子らしいと思ってたけど中二臭い台詞連打していたからさすが男の子って感じよねー。超変態よあんた」

「そっちこそ変態だろ！　僕の部屋に入るなって何度も言ってるのに僕の寝てる姿をずっと見てたってことはド変態だよ」

いつもと変わらない日常。私と神崎さんは喧嘩のようなじゃれ合いのような下らない言い争いの会話が続いていく。

まさかと思ってあとで調べてみたんだけど、何度見ても神崎さんのショーケースコレクションの中には『Ｎｏ．７　ラッキー・ストライプ』のカードの姿はなかった。

夢でも自分の妄想でもいい…。私はあのナンバーズの夢は中々面白かったよ。言い訳などに頼らないで自分の道を切り開いていかなければ！

そう簡単に私の夢のデュエルキングにはなることはできない。だからこそ私はこれからの学園生活で頑張って強くならなければならない！

番外編～『Ｎｏ．７　ラッキー・ストライプ』（後書き）

数時間もかけて書いてあるこの小説よりも詰めデュエルの方が倍も閲覧数があったと聞いた時の絶望。
と、茶番は置いといて番外編を読んでくれてありがとうございます。

何でこのチョイスだって？
ゼアルでチャーリーの話が個人的に壷だったんで。
あと主人公の名前つながりでやりたいと思った。
次はナンバーズ７７が来たらそれもやるな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4494x/

遊戯王～デュエルキングを目指す少女の物語

2011年12月13日08時50分発行